UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニュースレター

No. 68

特集・日本GAP企画第1回 アメリカ中米宇宙考古学の旅

GAPニューズレター　第68号

〈巻頭言〉第三次大戦…1
UFO問題の真相（最終回）　G. アダムスキー…2
なぜ金星へ有人飛行？…5
日本GAP企画第1回
「アメリカ中米宇宙考古学の旅」紀行
転生と追憶の砂漠へ　久保田八郎…6
回想のアメリカ中米旅行―思い出を語る人々…34
質疑応答（1）スティーブ・ホワイティング…43
〈予告〉日本GAP企画第2回アメリカ南米宇宙考古学の旅…45
各地支部大会行事報告と予告…46
〈予告〉本年度・日本GAP総会…47
日本GAP各地月例研究会案内

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共禁無断転載。

GAPとは

ＧＡＰは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がＵＦＯの真相について〝知る〟機会を与えられるべきであるという見地に基づいて１９５９年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて〝コズミック・パワー〟の子であり、そのパワーの諸法則や宇宙に遍満している真実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた〝生命の科学〟の研究と理解を通じて体得できます。

日本ＧＡＰの目的はＵＦＯとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1．この太陽系の他の惑星群から偉大な発展をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。

■表紙写真は1979年８月13日、米カリフォルニア州デザートセンター砂漠でアダムスキーと金星人オーソンとのコンタクト地点を視察する日本 GAP 旅行団。右端は案内するフレッド・ステックリング氏。中央のサングラスが編者。　野口敏治氏撮影。

＜巻頭言＞

第三次大戦

九月に軍事研究筋から入手した情報によると、一九八〇年から数年間が第三次大戦発生の可能性が大であるということで、この原因はソ連の衰弱したブレジネフ書記長の後継争い、同国内の経済と労働問題の危機、エネルギーの枯渇等、種々の難問題が重なって外部に爆発するからだという。当然、これは全面核戦争を意味し、世界の大破壊をもたらすだろう。つまりソ連が火ぶたを切るというわけである。

ソ連だけを悪者扱いにするなという説が巷間に流れているけれども、軍事研究家（複数）の推測によれば、どのように分析してもソ連を抜きにして第三次大戦はあり得ないという。

日本はどうなるか？　これも諸説紛々だが、現在のところ米ソ間で核戦争が発生した場合、日本の科学技術を高く評価している両国は、わが国に核弾頭を撃ち込むことはなく、むしろ攻撃を避けて、戦後処理に日本人を利用するのではないかというのが研究家の一致した見解である。

しかし直接、被爆しないにしても、貿易立国の日本の場合、資源の殆どを海外に依存している以上、大戦勃発の暁はあらゆる物資の輸入が停止して全国に大混乱が生じることは想像に難くない。太平洋戦争終結後の食糧不足を主体としたすさまじい紛乱や地方の三国人による暴動などを上回る悲惨な飢餓地獄が展開するのではあるまいか。

人間にとって究極的に必要なものは食物であり、これの欠乏や絶無が人間の常識を喪失させて悪鬼と化さしめることは終戦直後または戦争中にざらに見られたことである。

戦後、連合軍の傀儡となった―というよりも日本人の豹変ぶりを遺憾なく発揮したのだが―軟体動物の如きわが政府の徹底した無為無策により地方の物価は信じられぬほどのスピードで急上昇した。最もバカげていたのは、地方のＮＨＫ局がラジオ放送で中央の天井知らずの物価を連日伝えたために、田舎の農民がそれをネタにして作物の価格をでたらめに釣り上げた現象だった。無能な日本政府はこうした地方の実情を把握する術も持たなかったのである。

日本占領連合軍最高司令官たるマッカーサーは足利尊氏以来の悪政をやったと評されたが、今考えると、いかに武力で制圧されて骨抜きにされたとはいえ、わが政府の弱体ぶりには驚くべきものがあった。終戦後、たしか幣原内閣が組閣された際の記念写真では、従来の慣習を破るというアメリカの無名の一カメラマンの言いなりになって、国会議事堂のはるか前方まで全大臣が遠出して並んだと記憶する。なぜ拒否しなかったのか。

政府といえども衆愚の象徴みたいなものである。選挙で当選して代議士になり金バッジをつけて登院する〝選良〟のなかに、一人で海外旅行の出来る者は少ないということだが、立法府や行政府の、まるで国際感覚や道義心などを持ち合わさぬ俗物たちによって支配されるわが国が、第三次大戦のとばっちりを受けたらどうなるかは大抵知れている。ローマのコロセウムを見て「イタリアは遅れとるのう」と言った大臣もいるほどだ。

しかし政治屋をあざ笑っても始まらない。問題は、現実に大戦に巻き込まれて日本が阿鼻叫喚の巷と化した場合、我々はどうすればよいかだ。大戦など発生しないと断定する人には無意味だろうが、いつの時代でも恐るべき大戦争は不測の時機に突発するという事実を忘れてはならない。第三次大戦の全面核戦争などなにが起こるものかと頭から否定すべき根拠はないし、必ず発生するという確証もないが現状では起こる確率が大である、と軍事研究家連は力説する。

日本は絶対に核攻撃を受けないか？　これも確実な保証はない。核装備しない国が核攻撃を受ける筈がないというあまりにも純情な論議は別として、軍事研究筋以外のある説によればソ連はアメリカを刺激するために、核兵器を持たぬ日本へ核弾頭を撃ち込むだろうという。ソ連の核ミサイルＳＳ９は二十五メガトン級であり、広島型原爆の約一千五百倍の破壊力を有し、爆心地より半径二百㎞が無人の荒野と化す。これが仮に東京と大阪の二個所に落ちただけでも、日本本土の三分の二はアメリカのモハービ砂漠の如き広大な廃虚と化して、生き残った地方民も弱肉強食の恐るべき地獄絵図に巻き込まれるだろう。

そんなばかな事が、と笑う向きはもっと世界史と現実の国際情勢、特に軍事面を研究されるとよい。慄然たる事実がひそかに展開しているのである。

歴史は繰り返す。なぜなら人間のマインド（心）は数千年来いささかも進歩していないからだ。

ここでは第三次大戦が確実に発生すると〝予言〟して読者を恐怖のどん底におとしいれようとするものではない。「安全と水はタダで手に入る」と思われているわが国で、核戦争の余波だろうが水不足による断水だろうが、生活が窮乏状態におちいった場合の精神のあり方に言及するのが目的である。

この解答は完全にアダムスキー哲学の中に存在する。特に転生の法則が重要である。つまり我々は何が何でも肉体的に助かろうという欲求や、不可能を予測した場合の絶望感などを超えて、惑星間での転生を考える必要があるのだ。

この深遠高次な宇宙哲学は一般人に全く知られていないけれども、法則は万人に厳然と作用しており、何人といえどもこれを逃れることはできない。

「生命は転生によって連続する」という法則を知っただけでも、死の恐怖は薄らぐ筈である。これこそ真に人間を救う哲学ではあるまいか。

人間が救われるという場合、必ずしも肉体の救済だけを意味するのではないことを認識するのが宇宙的であり、この方向に前進する必要がある。

UFO問題の真相（最終回）

1965年ニューヨークでの講演

★米空軍はデザートセンターの記録を保管

★グレン中佐はアダムスキーの体験を傍証した

★太陽は熱球ではない

その他

ジョージ・アダムスキー

結局は自分たちの作った放射能帯から放射能が我々の頭上に降り注ぐことになるのです。仮に二千マイル上空での核実験が許されてそれが成功したとしても、電離層を破壊することになってしまいます。

電離層というのは、言ってみればハエが室内に入って来れないように窓の所に取りつける網戸のようなもので、太陽から放射されるガンマ線を防ぐフィルターの役割を果たしているものなのです。そのようなフィルターを破壊してしまったら、ガンマ線のような危険な放射線が直接我々に降り注ぐことになるのです。おわかりですか。

地球人は狂人となる

地球人はときとして狂人のようになります。人間は地球上で最も知的な創造物であり生物であるなどとは実に滑稽で馬鹿げた話です。一般に地獄という所に存在すると信じられている悪魔でさえも、自分たちの地獄を絶滅させるようなことは決してしません。そんなことをすれば彼らは何も支配することが出来なくなりまた自分たちの栖である地獄を絶滅させれば、自分たち自身をも絶滅してしまうことになるからです。

ところが人間は自分たちの手でみずからを絶滅させようとしています。もはや悪魔よりも愚かなのです。

ともかくバンアレン帯というのは、宇宙からの殺人的な放射線が直接我々に降り注ぐのを防ぐ唯一の防御帯なのです。したがってその防御帯の中に核弾頭を撃ち込めばどういうことになるかは直ちに理解できます。スペース・ピープル（宇宙人）は正しく真実を伝えてくれたのですが、地球人は信じようとはしませんでした。

米空軍はデザートセンターの記録を保管している

さて、晴れた空の下で私が二度目に宇宙人と会見したとき彼は英語で話しました（編注＝この宇宙人は金星人オーソン）。イギリス英語ではなくアメリカ英語でした。ひとくちに英語といっても二種類ありますからね（笑）。

英語で話しながら私は少し傷ついた気持になりました。というのは、最初の砂漠でのコンタクトのときに彼は私と四十五分間にわたって会見したわけですから英語が出来たのなら当然彼は多くの事柄を英語で私に話せた筈ですが、最初のときは英語を用いなかったからです。

一方、私がデザートセンターの砂漠で宇宙人と会っていたあいだ、上空にジェ

ット機やB29が飛んでいました。彼らはマンスフィールド空軍基地から飛来してコンタクトの光景を写真に撮ったと言っていました。我々はそのジェット飛行中隊がどこの所属であるかをすべて知っています。彼ら空軍関係者は、私が宇宙人とコンタクトした現場に六人の目撃者がいたということばかりでなく、会見がどのように行われたかということなどを詳しく観察した後、その記録を保管したのです。

この会見後、アリゾナ州から来ていた人類学者（編注＝ジョージ・ウィリアムソン）が私に撮影ずみの乾板をくれと要求しました。また宇宙人も一枚くれと言いましたので私は渡し、ウィリアムソンにも一枚渡しました。彼は直ちにアリゾナ新聞やフェニックス新聞に行ってそれを現像しました。もっとも現像された写真はあまり鮮明なものではありませんでしたが、とにかく写真が出来ました。新聞社としては私が撮影した写真の中で他にもっとよく撮れているものがあるかどうかを知りたがったのですが、あいにくパロマー山の私の自宅には電話がなかったために、彼らは確認することができずそれでウィリアムソンや友人たちの話をまとめて写真とともに公表したわけです。私はそうした話にコメントを加える立場にありませんでしたから黙っていることにしたのですが、デービスが秘密を公表して私が注目をあびることになったため、私は事件の真相を話さねばならなくなり、それ以来ずっと真相を話し続けてきたのです。

印象すなわち沈黙の言語をキャッチすること

とにかく私が二度目に宇宙人と会ったとき、彼は英語で話し始めました。私は内心驚いて、最初の会見のときになぜ英語で話さなかったのかと尋ねたのです。

すると彼は、自分の惑星（金星）と地球とのあいだには電話回線がないと言いまた私が印象やジェスチュアを通じて話の内容が理解できるかどうかをテストしたのだとも言いました。

テストの結果は上出来だったそうです。したがって次回に彼が私と会っても私が正しく印象を受けることを確信したということでした。とにかく私は我々がテレパシーまたは予感と呼んでいる方法を応用して話をしたのです。

もしあなたがたが神に祈っているとき神の方からあなたがたに応えるとしたら神は「修道尼さん、あなたの祈っていることは私の耳に届いていますよ！」とか「あなたの望む物を喜んで与えましょう！」などと大声で叫んで答えるようなことはしません。あなたがたは〝印象〟を受けるのです。

あなたがたが真に創造主とコミュニケートしようとすれば、あなたがたの心はその〝印象〟に気づきます。これが本来あなたがたの行うべき方法なのです。

私が今こうして話しているときでも言葉やジェスチュアで表現する以前に印象が先にやって来ます。印象が先にやって来て、それからそれに対して音声を与えます。なぜなら我々は通常音声に慣れ親しんでおり、我々が自分の意志を相手に伝える際には音声に頼っているからです。しかし宇宙の言語または神の言葉というべきものは〝沈黙の言語〟です。これによって神はすべての創造物を統轄しているのです。

グレン中佐はアダムスキーの体験を傍証したのだが——

宇宙人はついに私に言いました。

「宇宙船に乗りたいですか？」

「もちろん！」と私は答えました。私は以前に一度だけ彼に会っただけですが、今回はなんといっても親友になったのですから——。

私は乗り込みました。どこへ連れて行ってくれるのかを知りたかったのですが気にしないことにしました。仮にふたたび帰れなくなってもたいした問題ではないと思ったからです。早晩（生か死の）どちらを選ぶか決める必要がありました。私は年をとっていますし、肉体もかなりすり切れたような状態で古くなっていましたから、ここで新しいのと交換してもよいと思ったからでもあります（笑）。もしまた楽しくやってゆこうとすれば新しい肉体を手に入れるほうがよいですからね（笑）。

それから我々は宇宙船に乗って宇宙空間へ飛び出しました。真っ暗闇の中をずっと飛び続けました。宇宙空間の奥深く行けば行くほど、ますます暗くなるのです。

ついに我々は月の周りを飛びました。オランダのユリアナ女王は私が月のまわりを飛んだことを知っていましたし、ソ連も同じように知っていました。あとになってソ連は私がユリアナ女王に進呈した〝ある物〟について放送しましたが、私はまだそのことについては発表していません。

とにかく我々は月のまわりを飛びました。月面にあまり接近せず、といって遠くに離れすぎない状態で飛行したのです。地球の三万ないし四万フィート上空を飛行すると（宇宙船の装置を用いて）いろいろな物が見れるように月面上にもさまざまな物を見ることができます。このことは一九五五年に私が書いた「宇宙船の内部」という本の中で詳述しました。

この本の中で私は宇宙の〝ホタル火〟のことも書きました。まるで無数のホタルが飛び回っているように見える現象のことですが、このホタル火はいろいろな色をしていました。物質やホコリの粒子もありました。なかには粒子よりも大きな物もありました。宇宙人が私を宇宙船に乗せてくれたおかげで、我々はこうした情報を無料で入手することができたわけです。

しかしアメリカはこうした情報に満足せず、私の体験後数年たってから五千万ドルもの費用をつぎ込んでグレン中佐をロケットで打ち上げたのですが彼は私が目撃したのと同じ光景を納税者たちに報告しただけでした（笑）。

（編注＝宇宙空間へ最初に飛び出したグレン中佐は、暗黒の空間に不思議なホタル火現象を見たと報告して大問題になり、あわてた米当局は以後宇宙飛行士たちに

対して厳重な緘口令をしいたといわれている。中佐が日本製カメラ「ミノルタハイマチック」で撮影したというホタル火現象の写真はついに公開されなかった）

我々地球人は通常こんなやり方しかできないのです。

それはともかくとして彼は多くの報告をしました。私はテキサスの航空宇宙局からグレン中佐の撮った写真を入手しました。これからそれをお見せしますが、それによると宇宙空間には形あるものは全く存在しないように見えます。では太陽光線はどのようにして反射するのでしょう？

太陽光線は何かの固体に当たって反射するのです。もし今晩月が出ていなければ、いかなる光も見えません。月は固体です。太陽の光を反射してこのように輝くのです。

私は三枚の写真を持っています。これはそのうちの一枚です。これがその写真です。楕円形をした物が見えています。ここにあるこれです。輝いている部分をごらんなさい。これはグレン中佐が地球に帰還するときに撮った写真です。（訳注＝テープによると、ここで聴衆の一人が何事かを質問するがよく聞こえない）

これですか？　これは地球の軌道です。つまり、一般には何と呼ばれているのか私にはよくわかりません。

これはかなり幅の広い縞模様です。両側が暗く黒くなっています。宇宙空間には暗黒以外に光がないからです。宇宙空間の奥深く入れば入るほど暗くなってゆきます。我々が知っている暗さよりももっと暗くなりますし、我々が知っている寒さよりももっと寒くなるのです。

太陽は熱球ではない

太陽自体は熱球ではありません。太陽に近づくにつれて暑くなるかわりに凍りつくようになります。太陽に近づけば近づくほど寒冷がひどくなるのです。太陽は放射能帯で、いわば大きな核にたとえることができます。核エネルギーを絶えず放射しており、炎が上がっている部分では、六十万フィートにもわたってコロナを放出させています。

太陽の球体のまわりに反射現象が起きているのですが、このことは宇宙飛行士もつい最近になって認めました。太陽を取り巻く大気に、ちょうど雲に光が反射するように光が反射している一方、球体そのものは我々が通常考えているように明るくはなく、逆に暗いのです。

太陽は明るい光を放っているのではありません。いわば黒い光、あるいは黒い光線と呼べるようなものを放っているのです。数年前、ゼネラルエレクトリック社が開発した黒い光線と呼ばれる放射線を放射する機械と同じようなものです。光線を放射しますが、光線そのものは何かの物体に当たってその物体を輝かせるまでは不可視の光線なのです。そして何かの物体を輝かせるためには、光線がその物体に当たらねばなりません。こうして光輝が生じるわけです。

光は秒速十八万六千マイルの速度で進行するといわれています。ところが光というのは何か別な物から生じる副産物なのです。つまり光と呼ばれるものが最初から存在するのではなく、何かの副産物なのです。電磁波は三十八万五千マイルの秒速で進行することが発見されましたが、光はその副産物なのです。むろん何が本当に正しいかは誰も正確に知りません。

我々人間は完璧に創造されてはいません。学ぶことによって完全なるものに近づいてゆくわけです。完璧に創造されていないからこそ、学ばねばならないのです。

さて、これらはグレン中佐が撮った写真です。これらの写真を宣伝用に使用してはならないとここに書いてあります。しかし私はそれについて説明することはできます。62、60、49と番号がふってありますが、これらは写真の番号です。これらは地球の写真です。この地球の写真はジョン・グレン中佐が三月六日の宇宙飛行の際に撮ったものだと記されています。彼はただ水晶玉のようなものを見ただけだと言うでしょう。そう言いながらわざわざ写真に撮ったわけです。事実、空間以外に他に何も存在しないといえるかもしれません。

人間には素晴らしい能力が潜在する

探査用ロケットが地上から発射された後、大気圏外にそのロケットを押しやらねばなりません。というのは、地球に引きつけようとする引力からそれを解放しなくてはならないからです。ひとたびロケットが引力圏から脱すると、それは宇宙空間を飛び続けることになります。そこで宇宙空間には物を移動させる何かの力が存在するにちがいありません。さもなければロケットは一カ所に静止したままの状態になってしまいます。しかし実際は飛び続けます。

奇跡というものに言及すれば、我々が現在行っているようなことが（宇宙空間へロケットを打ち上げることが）まさしく奇跡であり、誰もがこうした奇跡を行えるとは思えません。

ここに地球人自身が作った宇宙船があります。宇宙船のカプセルは金星に到達する予定のものです。これが地球から六百万マイル離れた位置で故障したとします。機器類を設計した人間がカプセルに乗っているとします。彼は自分が設計した機器に関する図面を取り出し、技術者がその図面に従って各部品を組みたて直します。設計者は図面の内容が理解できるからです。そこで機器類はふたたびうまく作動します。六百万マイルの彼方で彼は外へ出ることもできませんが、あたかもこのテーブルの上にいるかのごとく働きます。彼は図面の内容をよく理解し各部品の仕様の細部にわたって詳しく知っているからです。彼らは故障部分を修理し、取りつけ直します。すると各機器はふたたびうまく作動するようになります。

七月のいつかに火星に到達しようとしている探査ロケットは、地球から完全にコントロールされています。三千万マイルも離れた所からコントロールされてい

るのです。

人間は天才的能力を持たないなどと言わないで下さい。こうした能力を世界平和のために有効に利用しようとしないのは全く残念なことです。戦争や闘争などを起こして地獄の状態を作り出すかわりに、こうした英知を生かして天国を作るべきです。

今日我々の生活はエレクトロニクスに負うところ大です。ハネウェル社は最近一般に売り出されると女性が大喜びする機械を開発したと発表しました。その機械は家のどんな所にも取り付けられるものです。ホコリというものは昼夜をとわず家具、衣類、食器等の上にたまりますが、この機械を取り付けるとホコリを払う必要がなくなります。ホコリがこの機械のところに集まるので、毎月その機械を取りはずして、きれいにするだけでよいのです。

スペース・ピープルからこうしたアイデアを拝借することさえできます。彼らの宇宙船にはこうした機械がすでに取り付けられているのです。我々はスペース・ピープルからこのアイデアを得て実際に機械を製作し、同じように使用しているのです。

スペース・ピープルがこの地球にやって来ていること、また彼らの多くがこの地球上でスペース・プログラムにもとづいて各国政府を援助していることなどはもはやファンタスティックなことでも何でもなく、単なる事実なのです。人間が六百万マイル彼方にある探査用ロケットの部品を、地球にいながら取り付け直させるアイデア以上に、ファンタスティックなものではないのです。

人間は自分たちの内部に宿る素晴らしい能力について気づいていません。もし神が我々の創造主であり――事実そうなのですが――この素晴らしい肉体を創造したとすれば、この肉体の中には我々が学ぶべき多くの事柄があります。我々は何も知らないのですから――。偉大な父（創造主）の息子や娘たちは、今日我々が地球から六百万マイル離れた所で部品を取り付け直すといった素晴らしいことができるだけの能力を受け継いでいるのです。

我々が行わねばならぬ唯一の事は、自分たちの勝手なセンスマインドに従って物事を行うことではなく、創造主の意志に従って物事を遂行してゆくことにあります。そうすることによって我々は素晴らしい生活を送ることができるのです。

（完）**志田真人訳**

△訳者紹介▽

この素晴らしい連載記事の第二回目からは翻訳をインドネシア在住のGAP会員・志田真人氏にお願いした。氏は東京在住中に日本GAP東京本部月例会の司会者として活躍したアダムスキー問題に関するベテラン研究家の一人で、数年前二十歳代の若さで某大会社のインドネシア出張所長としてジャカルタに赴任するという実業面でも優秀な若手であり、以後編者と緊密な連携を保ちながら研さんを続けている。英語とインドネシア語に堪能。三十一歳。恵美子夫人も熱心なGAP会員。愛児・宇貴君（三歳）がいる。

なぜ金星へ有人飛行？

八月二十一日付静岡新聞夕刊二面に「ソ連、金星へ有人飛行か――80年始め――西独の研究所長語る」と題して次のような記事が掲載されている。

「西独ボフム宇宙観測研究所長のハインツ・カミンスキー教授は、二十日付現地紙とのインタビューで、ソ連は一九八〇年代初め、金星に向けて有人宇宙船を打ち上げるかもしれないと述べた。

同教授によると、ソ連が百七十五日の長期宇宙滞在を記録した今回の宇宙飛行は、金星飛行へのリハーサルだったという。カミンスキー教授の計算は金星飛行にかかる日数は百六十日とされている」（資料は静岡市の会員・梅沢明氏提供）

大衆はいぶかるだろう。金星の表面温度はセ氏数百度の高温で、生物がいる気配はないというのに、なぜその焦熱地獄へ人間を送り込むのかと。

かりに飛行士を着陸させないで、金星を回る軌道から観察するだけだとしても、地球人にとって全く無用なはずの高熱惑星を観察するのはやはり無意味なのに、ぼう大な国費をかけて有人宇宙船を打ち上げるのは奇妙である。

その理由は？

実はソ連のトップは金星に大文明が存在することを知っており、一番乗りすることによって自国を有利に導こうと画策しているのではあるまいか。あらゆる面でソ連が窮地におちいる今後の数年間、ソ連の打開策は金星人との接触により何らかの対策を講じることにあるとの認識のもとに、極秘裡に金星への有人飛行を計画し、プログラムを遂行中の事実を西独の研究所長がすっぱ抜いたものと思われる。

したがって金星の表面温度がセ氏数百度というのは大衆を欺くための虚報か、または実際に初期のロケットがそのような報告を行ったあとに真実を知ったソ連当局がひた隠しにしていたのかもしれない。

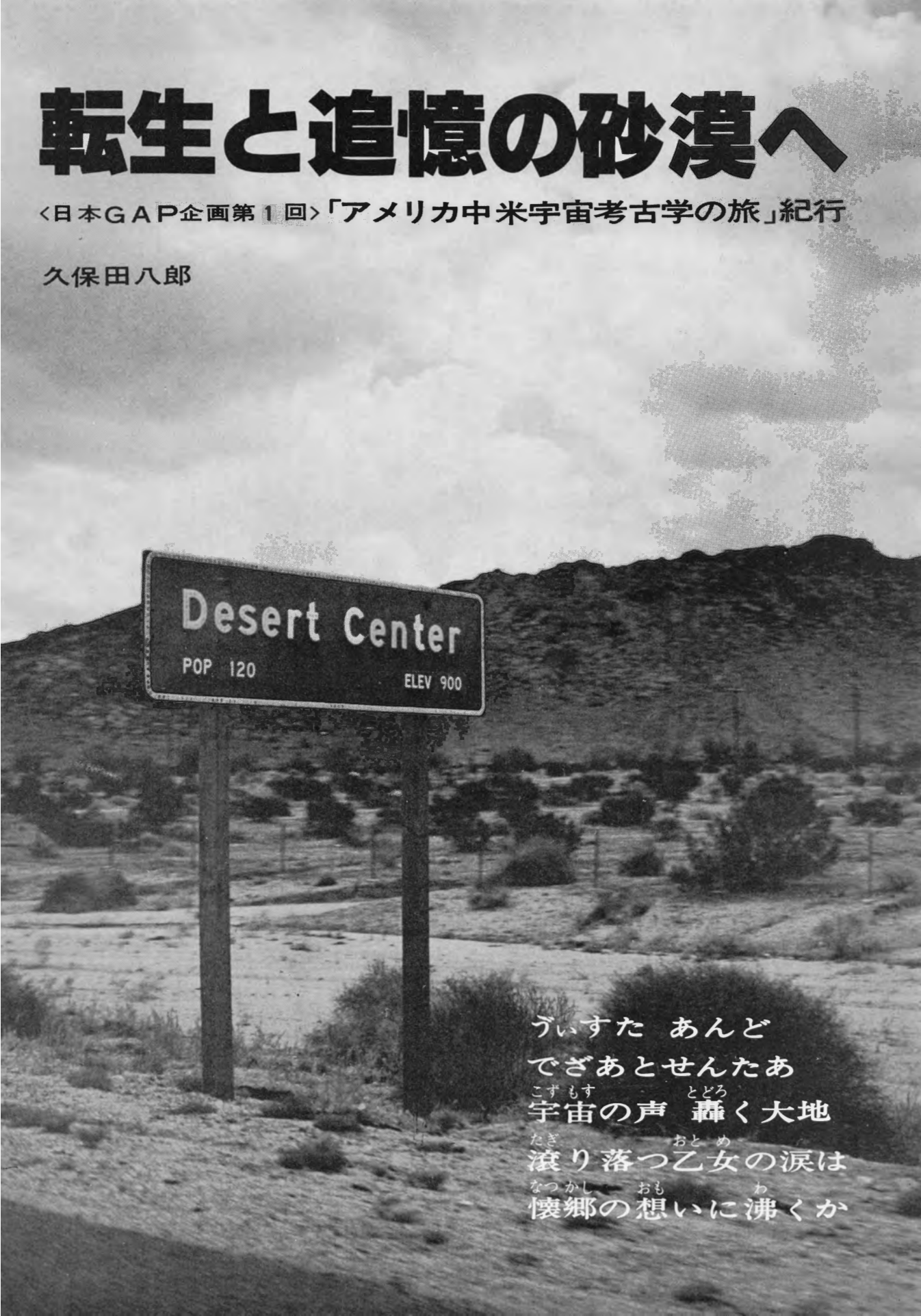
想起すべきは、一九五〇年代後半に地球のロケットが初めて大気圏外へ打ち上げられたとき、地球を観測して、地球の表面はセ氏数百度の高温のため人間は住めそうにないと報告し返した事実である。これは開発途上の不備な機器を搭載したロケットであるから、誤測もやむを得ないが、今年の金星ロケットは、雲で覆われた金星表面に不思議な白熱光が存在することを発見した。光輝が変化しない〝光〟のベルトである。科学者は謎の現象だと言うけれども、これも表向きの発言であって実際には金星に大都会の照明が存在することを知ったのではないだろうか。

しかしもっと奇妙なのは、こんな驚くべき新聞報道にだれも注目せず、金星の表面は高温だと思い込んでいることである。

転生と追憶の砂漠へ

〈日本ＧＡＰ企画第１回〉「アメリカ中米宇宙考古学の旅」紀行

久保田八郎



づぃすた　あんど
でざあとせんたあ
宇宙(こずもす)の声　轟(とどろ)く大地
滾(たぎ)り落つ乙女(おとめ)の涙は
懐郷(なつかし)の想(おも)いに沸(わ)くか

かねてから企画中の「アメリカ中米宇宙考古学の旅」は予定どおり今年八月に実施された。十一日より十二日間（一部の参加者は十三日間）の強行軍であったが、十日と十一日に分かれて出発した旅行団メンバーはロサンジェルスで合流後アメリカGAP本部訪問とデザートセンター見学を終え、メキシコとグァテマラの古代の遺跡を視察し、素晴らしいエキゾティシズム（異国情緒）を満喫して愉快この上ない旅を続け、二十二日につつがなく成田空港へ全員帰着した。大成功裡に終了したこの旅行の実施に際してご協力下さった参加者と関係者各位に衷心より感謝する次第である。

× × ×

この旅行は日本GAP独自の企画による宇宙的な内容をもつもので、ただの物見遊山でないことは、すでにご承知と思うが、それだけに旅行内容を最高度に充実させて、生涯の思い出として残るような素晴らしいものにしようと、企画者たる編者は乏しい知恵をふりしぼり、提携旅行社ワールドセブントラベル社の田中氏と共に、十数度にわたる徹底的な打ち合わせを行い、ありとあらゆる手を打って万端の準備をととのえたのであるが、幸か不幸か飛行機の切符の世話をする某社の不手際により、六十名全員が予定の八月十一日に一台の旅客機に乗れなくなり、やむを得ず二つのグループに分けて第一グループの二十六名だけは一日早く十日に出発してロサンジェルスの夏の一日を余分に楽しめることになった。もちろん一日分のホテル代は某社の負担によるのであるから、トクをしたわけである。あとで聞いたところではディズニーランドへ遊びに行った人たちもいるらしい。何が幸いになるかわからないので、とにかく短気は禁物だということをあらためて痛感した。

さて、私自身は三十四名の第二グループと共に十一日の出発と相成ったが、団長としての責任上、第一グループの方々に挨拶や見送りを行う必要があるので、九日に大荷物をかかえて自宅を出発し、午後四時すぎに成田空港近くのナリタビューホテルへ投宿した。スーツケースは塙君が運んでくれたので、同君と共に宿泊し、添乗員の田中氏と最後的な打ち合わせを行ったり、すでに同ホテルへ入っていた九州からの参加者、元木和雄氏（熊本県）や首藤秀利君（別府市）と歓談したりして夜をすごした。

十日は昼近くまでぐっすりと眠り、連日の疲れをいやし、午後三時に空港へ行き、第一グループの皆さんに挨拶し、全員の記念撮影を行ったあと、六時三十分に別れた。今夏は史上空前の海外旅行ブームとあって成田空港ビル内は大混雑を呈している。昨夏の閑静なロビーとは比較にならない喧噪ぶりだ。

タクシーでホテルへ帰ってから塙君と柴田文子さん（山形県）の三人でバーへ入り、ここで夜遅くまで話し合った。

明くれば十一日、九時三十分に三人で朝食をとり、十時四十分にホテルを専用バスで出発し、空港に到着後、レストランで時間をつぶした。ホテルのチェックアウトタイムは十一時だから、あとは空港で待機することにしたのである。

第二グループの集合時間はノースウエストオリエント社のカウンター前へ午後三時となっているので、一時半頃にそこへ行くと、ちらほらと参加者の顔がそろい始めた。松若氏（東京）のような久方ぶりに会う、なつかしい人々もいる。三時には全員がそろったが肝心のワールドセブン社の岩本氏が見えない。田中氏は先発隊と共に行ってしまったから、かわって岩本氏が出発手続きを行うことになっていたのである。しかし三時半になっても姿が見えない。これはおかしいというわけで、ノースウエストのカウンターから場内アナウンスをしてもらったら、まもなく岩本氏がやってこられた。集合場所を間違えていたらしい。

氏が仕事中、私は全員の点呼をとり、手伝ったりして、最後に挨拶を行い、全員の記念写真を撮影後、出国管理事務所へ降りて行った。デザートセンターの砂を取ってきてくれと塙君が追いすがりながら言う。同君も行きたいのは山々だろうが事情あって断念したのである。オーケーとばかりに合図をして階段を降り、型どおりの手続きをすませて、出国ロビーへと進行した。岩本氏が事務所を通り抜け、柵の所まで来て別れの挨拶をされるので恐縮していたら、役人がやって来て大声で叱りつけたので、氏はすっ飛んで行かれたが、気の毒でもあり、妙におかしくもあった。もちろん氏の誠意には感謝のほかない。それにしても日本の空港の役人は威張るものだ。

●第1グループ（8月10日出発）

●第2グループ（8月11日出発）

●挨拶をする筆者（成田空港にて）

見知らぬ紳士の援助

全員はサテライトへ進行して、ここでしばらく待たされた。成田空港はパリのドゴール空港をモデルにしたといわれるが規模はかなり小さく、サテライトは乗客でスシづめとなり、座れない人もかなりいた。もっと巨大な空港ビルにすればよかったのにと思う。六時出発予定のノースウエスト8便が何かの都合で遅れてしまい、結局、離陸したのは七時三十分頃だった。旅客機の発着時間ほどあてにならぬものはないことは過去四回にわたる海外旅行でよく知っていたが、この遅れにより、シアトル空港である不思議な体験を持つことになったのである。

機内ではスペイン語の本を出して読みかけたが、気分が落ち着かない。実はこの第二グループの添乗員の役目を私が引き受けることになっているので、海外旅行の未経験の方々の不安やトラブルの解消等にも気をくばらねばならず、のほほんとしていられないからだ。しばらく瞑想したり、ウイスキーを飲んだりして、少し眠り込んだ。

機は約九時間の平穏無事な飛行の後にシアトル空港に着陸した。出発が遅れたから、現地時間で十一日の十時三十五分着の予定が昼の十二時頃になってしまった。ここでいったん降りて一時発のロサンジェルス行きの飛行機に乗り換えるのだが、そのためには空港カウンターで手続きをして団体用のボーディングカードの交付を受けねばならない。それで、あらかじめワールドセブントラベル社から連絡してあった同空港内の免税店の人が私たちを出迎えて、手続きを代行することになっていた。したがって一刻も早くイミグレーション（入国管理事務所）を通過しなければならない。ところが、このイミグレーションはおそろしく手間どるので、長蛇の列は一向に進行しない。世界の空港で、ここほどのろいイミグレーションを見たのは初めてである。能率主義のアメリカに似つかわしくない場所だ。

やっとの思いでこれを通過して外へ出ると、迎えに来ているはずの、それらしい人が見当たらない。出発時に渡されていた大きなマークを私と野口氏（静岡市）とで手に持ってかざしながら探したけれども、さっぱり現れない。時間は刻々と経過する。まごまごしているとロサンジェルス行きの飛行機に乗れなくなるが、そうなると、えらい事になる。

「よし、わしがやったる！」

意を決した私は、急いで工作にとりかかった。税関から出て来る皆さん方に、一階で待っているようにと伝えて、まず眼についた奥のカウンターの白人女性にNW98便に乗るにはどこで手続きをすればよいのかと尋ねてみた。もちろん、もう日本語は通用しないから会話はすべて英語である。語学の重要さをいやというほど感じながら返事を待った。

するとエスカレーターで四階へ行けと言う。OKとばかり長大なエスカレーターで四階へ上がってみると、だだっぴろい構内はすべてノースウエストの専用フロアーで、ゲートが沢山並んでおり、どこへ行けばよいのか見当がつかない。あわてくさって、あちこちのゲートのカウンターで尋ねまわったところ、結局、S3というゲートへ行けばよいことがわかった。

ところが小走りにそのカウンターへ行ってみるとだれもいない。標示を見ると出発は一時三十分となっている。98便の出発時間は一時の筈だったから、三十分延ばされたらしいが、それにしても時計を見るとあと十分間しかない。

「しまった！　締め切ったのか！」

一瞬、絶望の想念がわき起こったけれども、すぐに打ち消して、いや、今日中に全員が必ずロスへ行ける、もう行っているのだ！と強烈なイメージを描いたりしながら、心中に何らかの印象が浮かぶのを待った。

そのとき私の左隣に先程から長身の白人タイプの紳士が立っているのを意識した私は、ふと尋ねてみた。

「このカウンターには係員はいないのですか？」

紳士は明瞭なアメリカ英語で答えた。

「いや、いるんです。その人は今、用事があって機内へ入っています。数分間したらここへ戻って来ますから、ここで待っているとよいでしょう」

言い終わって紳士は左方へ向かって歩いて行った。私は待った。

すると、たしかに数分間たってから中年の係員がやって来た。とびつきたい思いで事情を話し、至急にボーディングカードを作ってもらいたいと言うと、相手はきさくな態度ですぐに作成を始めた。

「仲間を呼んで来ますから、カードはここにとっておいて下さい。私たちがここへ来るまでは飛行機を出さないようにして下さいよ」と頼むと、彼はYes, sir!と明るく答えた。

「わーっ、助かったどォ！」

心中、大声で叫びながら重いカメラバッグを右手に、大きな買い物袋を左手にさげたまま、ふたたび小走りに広いフロアーを横切り、大エスカレーターで一階に降りて行くと、一同が集まって待機している。皆さん、集まりましたか？　と息せき切って尋ねると、まだ竹野さん姉妹が税関から出て来ないという。集燥にかられながら待つこと約十分。やっと二人が「すみません」を連発しながらかけ寄って来た。出て来てよかった！

「さあ、エスカレーターで四階に行って

下さい」

一同をうながして、また四階へ上がりS3のカウンターへ行くと、カードは全部作成されていた。各自の航空券まできちんとはさみ込んである。係員から受け取って全員にくばったあと、お礼のシルシにと十ドル札をつまみ出してその親切な男に渡そうとしたが、ノウ！と言って受け取ろうとしなかった。

飛行機に乗り込み、指定席にすわってやれ安心、これでロスまで行けると胸をなでおろしているうちに、ハッとした。

カウンターの横にいた、あの長身の紳士は、まるで私が来るのを待ち受けるかのように立っていて、話し終わるとすぐに姿を消してしまった。私を援助するために現れたような人物である。数分間たてば係員が戻って来るということをどうして知っていたのか？　その紳士もボーディングカードを必要とするのなら、そこを離れるはずはないし、すでにカードを持っていたのなら、無人のカウンターの前でただ一人で立っていたのもおかしい。ひょっとしたら、あの人はスペース・ブラザー？

あれこれ考えていると飛行機は離陸して、そのうちに、私の右隣の窓ぎわに座っている黒人の母子に気をとられてしまった。

いくたび生まれなば

なぜなら母親が抱いている幼児がひどいむずかり屋で、何にでも手を伸ばして取ろうとし、それが出来ないと、すぐに泣き出すからである。しばらく我慢していたが、あまりギャーギャー泣くのでうるさくなってきた。手にしていた扇子を持たせてやると泣きやんで喜びながらもてあそぶ。年齢を聞いてみると、十九カ月になると母親が答える。幼児はどうみてもサルにしか見えないが、母親も男女の区別がつかぬほど黒くて、ボリュームのある胸の隆起がわずかに女性であることを示しているだけだ。声はまさに女の声で、しかも品格のある立派な英語を話す。高度な教育を受けているのかもしれない。

だが黒人なるがゆえに白人社会から蔑視され虐げられて涙とともに暮らした日々もあったのだろう。「いくたび生まれなば主の御許に近寄れん」という黒人霊歌の悲痛な叫びが、この赤ん坊の泣き声に秘められているかのようだ。

「よしよし、泣くな泣くな。誠実に生きれば来世は美しい金髪の白人に生まれ変わるかもしれないよ」と、赤ん坊に慰めの想念を発しながら母親とあれこれ話しているうちに、機は五時半にロサンジェルスに着いた。黒人の母親は丁重な謝辞を述べて去って行った。

空港には第一陣の田中氏とともに浜村君（千葉県）や加畑君（東京）らが出迎えに来ていた。一日ぶりの再会である。シアトル空港でのことなどを話したあと一緒にウィルシャー街のヒルトンホテルへ行く。

素晴らしい雰囲気のGAP旅行団

ロビーへ入ると、いやもう、見知らぬ日本人でごった返して、まるきり日本のホテルである。何の用で来たのか小学生の団体までが入り込んで右往左往している。よくも親が金を出すものだと感心しながら自室へ入り旅装を解く。

洗濯をしたり、ひと風呂あびたりしたあと、七時四十分間からホテル内のミッションルームで、わが旅行団最初の全員夕食会を開催した。自己紹介のあと、有志が次々と歌をうたったりして、にぎやかになってくる。ビスタの日米GAP合同夕食会の予行演習だというわけで、佐藤和枝さん（宮城県）がリードして、ひとしきり合唱なども出る。私も何か歌わねばと思い、大正時代のはやり歌「恋は優し野辺の花よ」を一曲うなる。睡眠不足で疲れているせいか、よい声が出ないが、拍手喝采だった。

この旅行団はほぼ全員がGAP会員であり、アダムスキー哲学の実践者の集団であるから、雰囲気はすごくよい。全体が調和して奉仕精神に満ちているので、すこぶる快適である。そこらの新聞広告で編成した寄せ集めの旅行団とは次元が違うのだ。精神の状態を高次に保つことの重要性をあらためて痛感したのであった。

フロリダ州の大学に留学中の越崎裕子さん（浜松市）が見えたので全員に紹介する。彼女は一昨年の秋、ステックリング氏が東京で講演を行ったときの三人の花束贈呈者の一人で、ロスから合流して旅を続けることになっているのだ。

和気あいあいたる空気のなかに全員の記念写真を撮影後、解散して、自室へ帰り、就寝したのは十一時すぎだった。ぐっすり眠って、三時頃にポカッと眼が覚めてから以後は眠れない。さまざまな想念が去来するにまかせて暗黒の一点を見つめ続ける。

●機内の楽しいひとき

一路パロマー山へ

明くれば十二日早朝、六時に室内電話でモーニングコール。ベッドを出て仕度をすませ、七時より昨夜の夕食会場と同じ部屋で朝食をとる。八時出発というので全員八時までには集合したのだけれども、ポーターによるスーツケース類の積み込みが手間どったために、バスの出発

●アメリカ第２の大都市ロサンジェルス。東京・新宿の超高層ビル街に似ているが，東京よりもはるかに美しい都市である。

は四十分遅れた。今夜はビスタへ宿泊するので、バスのどてっ腹の貨物室へ全員のスーツケースを収容して運搬する必要があるのだ。この四十分の遅れは痛かった。それで、今後はスーツケースのちょっとした運搬をポーターに任せずに各自で運ぼうということになった。日本製のスーツケースは底にキャスター（小さな車）がついていて、押せばごろごろと動くから便利である。アメリカ製のスーツケースにはキャスターがないので手でかかえて運ばねばならない。

気温はさして高くはなく、むしろ涼しい。ロサンジェルスの空はどんよりと曇り、いまにも雨が降りそうな天候だ。これはパロマー山まで続き、結局、この日の南カリフォルニア一帯は厚い雲に覆われた陰うつな空模様となって、アメリカ入り第一歩のバス旅行はあまり快適な気分を起こさせなかったが、後になってこのような低い温度のためにむしろ好結果が得られたのだろうと判断した。最初からカンカン照りの暑い日ざしを受けながら強行軍を続けたならば、多くの人がバテていたことは必定である。しかも旅行の終わり頃のロサンジェルスは快晴のすばらしい天気となった。これでよかったのだ。

バスは沿岸の町並を通過しながら一路パロマー山を目指して南下する。一昨年に団体で来たときは奥地のハイウエーを走ったために、ほとんど町らしいものは見えなかったので、今年は特に海岸近くの町の道路を走るようにとバス会社に頼んでおいたのである。

ガイドはロサンジェルス在住の日本人上川氏で、まだ若い。カリフォルニア大学で人類学を専攻したという。カリフォルニア州の特徴を説明し続け、美しい家屋が窓外を流れるなかを疾走すること約二時間にして、車は次第に山間部へ入り、パロマー山のふもとから登山道へとさしかかった。ここへ来るのは三度目の私は大体に様子がわかっているのでパロマー天文台へ行く途中のパロマー・ガーデンズを見つける役を務めることになった。霧が深く立ちこめて、視界がよくきかない。山頂で晴れることを期待しながら、バスは登山道を登って行く。

十一時頃、見覚えのあるキャンプグラウンドの看板を掲げた広い台地の入口が左方に見えた。ここだ、ここだ、と運転手に知らせると、車は少し走り過ぎてから停車したので、一同降りて、ぞろぞろと歩きながら引き返す。

私が先導して門をくぐり、左奥のレストラン跡の方へ歩くと、むこうになつかしい木小屋が見えてきた。ここは周知のようにかつてアダムスキーが一族と共に住んでいた場所で生活の資金源として弟子のアリス・ウェルズ夫人がレストランを経営していた。そのレストランの建物は取り壊されて、いまは敷地にコンクリートが敷かれており、そのすぐ奥にアダムスキーがみずから建てた小さな木小屋が建っている。いずれも永久に記念物として残されているものだ。

一昨年に来たときと全く同様だが、小屋の下部の板が少しはぎ取られているのが眼についた。早く修理しないと、いず

●パロマー・ガーデンズ入口付近。霧が深い。

れメチャメチャにされるかもしれない。

説明をしたあと皆さんは暫時あたりを散策して往時をしのんでいる。かなり感動している人もあるようだ。ア氏が六インチ反射望遠鏡を使用して有名な円盤写真を撮影したのもこの場所であり、低空の円盤から金星文字のプレートが投下されたのもここである。歴史的な場所としては意外に俗っぽい感じがするけれども、これはその後、トレーラーなどのキャンプ用としてこの広場にあちこち家が建てられたりプールが出来たりしたためだろう。ア氏が住んでいた当時はまだ広々とした草原だった筈である。

一九七五年の秋にここへ初めて私が来た当時は、ステックリング氏とホワイティング氏が案内してくれて、ずいぶん秘話を聞かせてくれたが、それもつい昨日のような感じがする。ア氏が愛したというカシの大木を見ると胸が熱くなる。帰らざる主人を今もって待っているかのようだ。空気は澄み、小鳥の美しいさえずりが聞こえて、ここはまさに別天地である。

レストランの敷地上で小屋をバックに全員の記念撮影を終えてから、私たちはふたたびバスに乗り、山頂の天文台へ向かった。霧はいよいよ深く、晴れた日なら白いドームが見えるのに、山の輪郭さえ定かではない。

約二十分間進行して、バスはやっと山頂の駐車場へ来た。ここで降りて小道を数百メートル歩く。途中、右手にある天文博物館へ寄った後、ドームの方へ接近するのに、それがさっぱり見えない。高さ六十メートルもある巨大なドームを不可視にするほどの濃霧が立ちこめるのは一年のうちでもめったにないことなのだろう。そのめったにない現象を見ることができたのだから、考えようでは、幸運だったとも言える。ものは解釈のしようひとつだ、失望はすまいぞよとわが身に言い聞かせながら、内部へ入る。

こんな日でも多数の見物客が来ている。大望遠鏡のメカニズムについて少し皆さんに説明したあと、一同は売店で資料を買う。ここでは天体写真を売っているのである。日本人はめったに来ない場所だから、これで三度目という私はたぶん日本人として見学最多記録になるのではあるまいかと思っていたら、上川氏が語るところによると、なんでもUFOにとりつかれた一日本人がここに住んでい

●パロマー・ガーデンズのレストラン跡にて。後方の木小屋はアダムスキーが建てたもの。

●パロマー天文台の巨大なドーム前で

るという話を聞いたことがあるという。氏名不詳だが、アダムスキー研究家ではないらしい。また天文台とも関係はないようだ。

一同は外へ出て、ドームの正面で記念写真を撮影した。霧のためドーム全体がよく見えない。肌寒くてシャツ一枚では震えそうだ。今度の旅行の全員記念写真の撮影係は私が引き受けているので、携行したマミヤRB67をバッグから取り出し、セットしたあとセルフタイマーをかけて大急ぎで石段をかけあがると一同が一斉に笑う。ドン腹のオヤジがヨタヨタと走る姿がおかしいのだろう。今に見ていなさいよと、心中私はある期待に胸をふくらませた。それはグァテマラへ行ってからの水泳である。これでアッといわせて男を上げようと満を持していた。

感動のビスタGAP本部

天文台を出てからまた小道を通り、バスで下山を開始したのは二時すぎであった。さらばパロマー山よ、と言いたいところだが、この霧ではどうもパッとしない。

山を下ってから午後四時すぎに、思い出深いビスタの米GAP本部へ着いた。まずホワイティング氏が例の人なつこい笑顔で出迎える。続いて中へ入ってみて驚いた。十数名の紳士淑女が正装して集まっており、アリス・ウェルズ夫人やステックリング氏らの旧知の顔も見える。やあやあと挨拶を交わしたあと、聞いてみると今日は本部でミーティングが行われていたということだった。そして今夕の日米合同パーティーにそなえて正装していたということがあとでわかった。

●ビスタの米GAP本部

続々と屋内に入って来る旅行団の人たちを大広間に誘導する。数名の女性は涙を流して感動していたが、特に柴田文子さんは声をあげて泣いていた。これは実は彼女のアダムスキー問題に関する過去世の記憶がよみがえったためなのである。彼女の出身惑星(ホーム)に対する一種の郷愁が強烈にわき起こったのであって、ここはそうした場所なのだ。

全員が集合してから私は日英両語でアリス・ウェルズ夫人の紹介を行い、野口氏が世話人となって皆さんから集めて頂いた寄付金八〇〇ドルを名簿とともにその場でウェルズ夫人に贈呈した。彼女は謝辞を述べた。

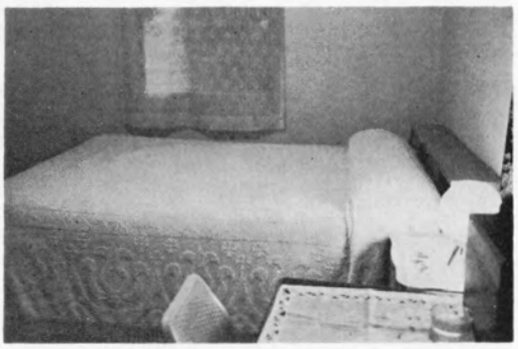
続いて一同をア氏の寝室へ案内する。狭いので行列をなして次々と入り替わりながら見学する。ここでも柴田さんは激しく泣いていたし、他の女性たちも涙を浮かべて室内から出て来るので、私も切ない気持にかられてきた。ア氏の高貴な波動の満ちた部屋で感動に全身を震わせる人は、何らかの過去世からのカルマによって、その波動に同調する人なのである。いま詳述する余裕はないが、とにかく転世を抜きにしてこの問題は語れない。このことは翌日のデザートセンターという場所にも密接な関係がある。

●アリス・ウェルズ夫人

室内のア氏の遺品や絵画等を次々と見ているうちに、食堂の一隅に一人の背の高い白人と一緒に立っている日本婦人を見つけた。すると彼女が微笑して大阪出身の馬場康子さんであることを告げた。

「ああ、馬場さんですか！」

私は歩み寄って挨拶した。彼女は一昨年の五月にビスタでホワイティング氏の甥(おい)であるセルチャウ氏と結婚して、以来ビスタに住んでいる日本GAP会員である。苦労していると聞いたので、案じていたけれども、意外と明るい表情であ



●アダムスキーが使用したベッド

●馬場康子さんと御主人

る。二、三、言葉を交わしてから、すぐに皆さんに紹介した。セルチャウ氏はまだ若いが、端正な容姿の立派な人物である。料理関係の仕事をしており、ステックリング氏と同じホテルで働いているという。この二人が結ばれたのも強力なカルマによるものなのだろう。偶然ということはあり得ないのだ。しかもセルチャウ氏もアダムスキー哲学の熱心な研究家なのである。

尽きぬ名残を惜しみながら一同は本部を辞して外へ出た。今夕は合同夕食会があるのでその準備に急がねばならぬ。

バスでビスタ町内のベストウエスタンヒルトップモーテルへ入ったのは五時半頃だった。集合は六時半だから一時間しかない。この間に私は自室でまず大洗濯をやり、服にアイロンをかけ、ひと風呂あびた。旅なれているので造作ない。しかも室内は十五～六帖もある広さで、奥には台所までついている。日本でモーテルといえばよくないイメージが浮かぶけれども、アメリカのモーテルというのはホテルを二階建ぐらいの小規模にしただけで、部屋は立派である。一人で泊まるのはもったいないくらいだ。

大盛況の日米合同夕食会

ネクタイをしめて正装して外へ出るとすでに皆さん方も正装してロビー前に集合している。男性は背広にネクタイを着用し、女性もそれに準じた華やかなドレス等で身を包んでいる。これまでのジーパンや運動服等によるハイキングスタイルからみて、打って変わった美しいきらびやかな光景だ。雰囲気の変化に服装が重要な役割を果たすことを痛感したのであった。バスの白人運転手が複雑な目つきで一同を凝視している。

バスに乗り込んで約六キロ離れたスージーレストランに着いたのは六時五十分頃だった。レストラン裏手の空地へ降りると、すでにステックリング氏その他が来ていた。宴会場は奥の大広間になっているので裏手から入れと言う。

中へ入ると、ホワイティング氏らがマイク二個や拡声機等を一式準備していた。「この機械も日本製なのだろう？」と言うと、「そうだ」とホワイティング氏が答えて高らかに笑う。実は私はワイヤレスマイクを日本から携行したのだけれども、急いだためにモーテルへ忘れたので、今日はマイクなしでやらねばしようがあるまいと、あきらめていた。テープレコーダーもトランクに入れたままで持ち出すのを忘れてしまったが、これは同行の菊地喜之君（千葉県）がソニーの高級機を持参してステレオ録音をしたことが後に判明したのでそれをコピーしてもらうことにした。

七時五分にワールドセブントラベル社の田中氏の司会でディナーパーティーが始まる。まずステックリング氏のスピーチが英語で行われ、それを私が通訳した。全文は次のとおりである。

「日本GAPの皆様方、こんにちは。ビスタへ来られました皆様方を歓迎いたしますとともに、皆様方が楽しく心のわくわくするような訪問をなされたことと思います。私たちは皆様をお迎えして心から嬉しく思います。共にすごすひとときは報いのある有益なものとなるでしょう。

ビスタはジョージ・アダムスキーの最後の居住地でありました。私がホームと言わなかったことにご注目下さい。というのはアダムスキーは宇宙の人であり、宇宙が彼のホームであったからです。私たちの考え方が次第に宇宙的になり、私たちの関心が、周囲のより広い分野に向かって広がるにつれて、私たちは以前にもまして、より広い宇宙の中に住むことになります。

皆様方がビスタやその他の場所へ旅行をされることによって、皆様は視野を広め、体験の範囲も広がります。こうして帰国されたとき、皆様方は自分自身のホームや国よりも他の場所でより大きな生命の概念を持つことになります。こうしたプロセスが国から国へと作用するにつ

●ステックリング氏のスピーチ。右は通訳の筆者

れて、それはもっと大きなスケールで惑星から惑星へと作用することになります。

私たちが一緒に座って食事を始める前に、私は『生命の科学』コースに関して詳細に心に浮かんできました、きわめて重要な点をお伝えしたいと思います。

人間は、肉体の中に宿る宇宙の意識は頭の中や心の中にあるのではなく、太陽神経叢の中にあるという事実にほとんど気づいていません。この部分で、自然は消化の奇跡、肉体の維持などを遂行し、特に最も重要なのは、再生によって生命それ自体の永続を行っているのです。

今述べましたこれらの原理は自然の基本的な法則であり、宇宙的なものです。人間の心はこれらの法則の結果であり、そして心というものはそれを創造した英知がみずからを表現するための経路として働く仕事を持っているにすぎません。したがって人間は何を食べようとも問題ではありません。むしろ食事のために座る前に、自分をどんな心の状態の中におくかがもっと問題です。

不安、心配、あらゆる緊張は強い感情であり、強い感情は極端なフィーリングです。人間が何かで極端になりますと、本人は必ず何らかの代償を支払わねばならなくなります。なぜなら自然は平安とバランスを保ちながら調和の方向に作用しているからです。もし私たちが、先に述べましたような強い感情を持ちながら座って食事をしますと、自分自身をアンバランスな状態におくことになります。そうすると肉体の調和した機能を妨げることによって消化不良になるかもしれません。

この例からみますと、私たちは、はるか彼方にいると思われる偉大な宇宙の英知は、全然遠い所にいるのではなく、肉体のあらゆる機能やあらゆる生命の呼吸を通じて、私たちを維持するために、私たちと共にあるということになります。

この事実に気づくならば、これから相伴にあずかろうとする食事から最上の結果を得るために、この重要な平安の法則を認めて、心をリラックスさせる必要があります。

宇宙の諸法則はきわめて実際的なものであり、地球でもどこの惑星でも生かされています。なぜなら地球は人間の住む宇宙の一部分であるからです。私たちが日常の義務の中に生命の諸原理を生きた形でもたらさねばならぬ場合、以上述べたような例が参考になります。どんな教えの価値でも生活を通じて生じるからであり、原理の学習を通じて生じるのではありません。私たちはこの両方を行う必要があります。

『生命の科学』の研究者である私たちは印刷された頁から『生命の科学』を取り出して日常生活の中で応用するように精一杯の努力をする必要があります。これを行うならば、そして他人が理解するのを助けるならば、私たちは進歩の道を歩むことになり、今日直面している多くのトラブルを理解することになります。

挨拶を終えるに際して次のような最も重要な言葉をお伝えします。これはずっと以前に、今日のような夕食会の席上でブラザーズの一人から与えられた言葉です。

『この食事について私たちは創造主に感謝します。願わくば創造主の広大な王国の中の万人が等しく恩恵にあずかりますように！　この食物が私たちの肉体を強化し、あらゆる生命の創造主に対する喜びの表現として、肉体内に宿る聖霊に役立ちますように！』

どうも有難うございました」

万雷の拍手のなかをステックリング氏は自席に帰った。続いて全員の乾杯の儀に移る。この音頭とりは私の役目なのでまた正面に出て英語で乾杯の挨拶を行った。それを田中氏が通訳される。

「ジョージ・アダムスキー財団と日本GAPの発展を祝福し、スペース・ブラザーズと宇宙の創造主に限りない感謝をさげて乾杯します。カンパーイ！」

私は大音声で最後だけ日本語で音頭をとった。同行者の全員も大歓声をあげて一斉に叫ぶ。これはかねてから、乾杯のときはなるべく大きな声でやって下さいと頼んであり、それに皆さんが協力されたのである。アメリカで開催された日米GAP合同の計七十名からなるこのような盛大なディナーパーティーは空前であるが、ただし絶後とならないことを望みたい。

日本側の乾杯の声があまりに大きく響いたのにステックリング氏とホワイティング氏は驚いたらしく互いに顔を見合わせて笑っている。私は自席へ返ったが急に疲れが出てボーッとなってしまった。しばし無念無想のまま虚空を見つめていると、左隣のホワイティング氏が横腹をつつく。顔をねじ曲げると彼がささやいた。

「食事を始めませんか？」

ハッとして我に返った。私を主催者とみているアメリカ側は、私がハシをつけるまでは食事をしないのである。このマナーは実に立派だ！

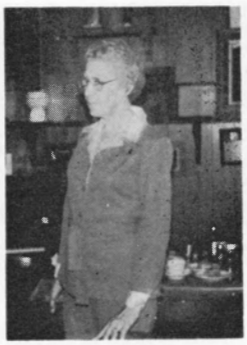
「すみません、始めましょう」

ナイフとフォークを取り上げると、皆は一斉に食事を始めた。

アダムスキーの姉君の生まれ変わり

あとで日本側に一人ずつ紹介したが、アメリカ側の出席者は九名である。体が衰弱して来られないアリス・ウェルズ夫人にかわって最上席に座っているのはアダムスキーに最も長く仕えたマーサ・ウルリッチ。八十歳を越える高齢なのに元気なもので、この日を心待ちしていたという。私の右隣にはステックリング氏、その向かい側にはイングリッド夫人、左にエリシアちゃん、その隣には問題の婦人ハンソン夫人がいる。彼女はむかしアダムスキーの姉であったが、幼くして世を去った。そしてア氏が死ぬる二年前にこのハンソン夫人が死んだ姉の生まれ変わった人であることをア氏が発見したという。現在はシカゴに住んでおり、いま休暇で折よくビスタへ来たということだった。

食事中に質問すると、彼女はア氏と姉弟であった頃の過去世のことを記憶していると答えた。晩年のア氏はたいへんな



●ハンソン夫人

紳士で、実に立派な人であったと彼女は心からの尊敬感をこめて語った。かなりの年輩だが、一時死亡しているから、その分の年齢は差し引かれるので、今生ではア氏よりも若くなったのである。

その左にはイングリッド夫人の弟さんのドイツ人ホルスト氏が座っていた。ステックリング氏の義弟である。現在はドイツで税務官吏をやっているけれども、やはりアダムスキー哲学に傾倒し、何とかしてビスタへ移住したいと言う。みるからに人の好さそうな、おだやかな人物で、視線が合うとすぐニッコリと微笑する。

その向かい側には例のセルチャウ夫妻が並んでいた。こうした人々を私の手で撮影したかったが、主催者がカメラを持って立ち歩くのは不作法と思い、愛機ニコンを野口氏に渡して撮影を依頼した。日本側の皆さん方もしきりに撮りまくり、ストロボの光がひんぱんに広い室内にきらめく。

ややあってから田中氏がプログラムどおりに今度は私に挨拶をせよと催促してきた。そこで正面に出てマイクに近寄り次のようなスピーチを英語で行った。通訳は田中氏である。

「皆さん、今晩は。本日私ども日本GAPの会員一同がはるばる日本からやってまいりまして、アメリカGAP本部の方々とともに夕食会を開くことができましたのは絶大な喜びであり、また多年の夢が実現したことに対して心から嬉しく思う次第であります。私たちのメンバーのなかには、このアダムスキー氏ゆかりの土地を訪れて感無量の方々もいらっしゃると思います。

ご承知のようにビスタはアダムスキー氏が晩年をすごした場所でありまして、現在もアリス・ウェルズ夫人を中心とする少数の重要な方々が世界GAPの本部として、意義深い活動を続けておられますが、これは宇宙的見地から非常に重要なことであります。なぜならば、宇宙から来る友好的な人々は、このGAP本部を通じてこそ彼らの偉大な宇宙哲学と宇宙観とを地球人に伝えることができるからでありまして、地球上におけるこのような活動の総本山はまさにビスタのジョージ・アダムスキー財団であり、他にはありません。もし『自分たちがアダムスキーの正統後継者である』と称するグループが他にあって、ビスタのGAP本部を非難しているとすれば、それは明らかにニセモノであり、混乱を起こす張本人であります。イエスが言いましたように世の中に混乱が広がるにつれてニセ予言者が横行しますので、充分に注意する必要があります。

私はすでに何度もビスタを訪れて本部の方々に接していますのでよく知っていますが、本部の方々はみな実に立派な人々であり、アダムスキーの後継者にふさわしい宇宙的な人々ばかりです。私たちがこうした人々を師と仰いで指導を受けることができますことを衷心より感謝しますとともに、今後もご交誼とご協力をお願いいたしまして私の挨拶に代えさせて頂きます。有難うございました」

アメリカ側の人々は特に大きな拍手をもって報いてくれた。自分の席に帰ると一同が感動の面持ちで口々に「有難う」と言った。私にはたいしたことはできないけれども、アダムスキー問題に関する限り、何がホンモノで何がニセモノかはわかるつもりだ。支持すべき人々を徹底的に支持しなくてはいけない。

万感胸にせまって食事はさっぱりすすまないが、ビールは大いに飲んだ。

「病気をしてからタバコをやめましたよ」と言うと、ホワイティング氏が眼を輝かして「すばらしい!」と叫ぶ。昨年彼が来日した折、「あんたは、いつかタバコをやめるほうがよい」と忠告してくれたことがあったので、それを実行したのだから、よけいに嬉しいのだろう。現在の私にとって、タバコは悪魔のケムリにすぎない、もう終生これとは縁がないだろう、などと話す。

日本側から次々と歌が出て、大宴会はたけなわとなってきた。佐藤和枝さんがリードして、合唱なども行われる。こうした日本の歌を理解できぬのにアメリカ側は楽しそうに聴いている。

正面に次々と出てきた日本人男女を見てホワイティング氏とイングリッド夫人がその過去世を透視して、すごく興味深い話をしてくれる。それは転生の壮大なドラマであり、人間なるものの不可思議さと生命の神秘とを感じさせる一大叙事詩でもある。

私は一女性を指さしてホワイティング氏に聞いてみた。

「あの人はフランスのルールドの奇跡と関係のある女性のように思うが、あんたはどう思う?」

「Could be(かもしれない)。だが詳細はイングリッドに聞かないとわからない」

そこでイングリッド夫人に尋ねると、「あの人については語るべき事柄が多すぎて、ここでは言えません」と答えた。

歌は次々と出て拍手と笑声が渦巻き、ビスタの夜はにぎやかに更けていったが時間の経過は如何ともしがたく、九時半

●スピーチを行う筆者

●日米GAP合同夕食会。前列右より2人目からホルスト氏，ホワイティング氏，ハンソン夫人，ステックリング氏，ウルリッチさん，久保田，ステックリング夫人，エリシア，セルチャウ氏夫妻，左端は田中氏

に私の閉会の辞によって終了した。全く素晴らしい夕食会であった。

出がけにステックリング氏が言った。「今夜、モーテルへ帰ってから、私の家へ来ませんか。ゆっくり話しましょう」

車で迎えに行くから待っておれと言うので、バスで一同とモーテルに引き揚げた後に、服をぬがずにカメラバッグだけを持って、ロビーの前に立っていると、しばらくしてス氏が車でやって来た。

暗い夜道を飛ばすこと数分、見覚えのある氏の自宅へ着いた。居間へ入ると、五年前に来たときとはかなり様子が変わっている。デスクにタイプライター、日本から持って帰った土産物の人形類、壁にかかった各種の絵など、にぎやかで雑然としている。

裏に庭を造ったので見に来ないかとホ氏が言うので一緒に出てみると、小さな築山があり、植物が沢山植えてあって、岩の間を水がチョロチョロと流れ落ちている。これは熱帯庭園で、いずれは別な場所に日本式庭園を作るのだと彼が説明する。素人にしては上出来だ。広間から持って来たビールの小ビンを傾けながらしばし眺めたあと、また居間へ引き返した。

グレンの姿が見えぬが、どうしたのかと尋ねると、休暇でハワイへ行っているけれども今夜帰って来るのだという。

ホルスト氏としばらく話し合った。この人は英語はよくしゃべれぬが、実に好人物で、たしかにビスタへの移住を切望しているようだった。イングリッド夫人が私の今後の問題について重要な示唆を与えてくれる。

そうこうするうちにグレンが帰って来た。玄関へ走り出たエリシアが「Kubota is here!（クボタが来ているわよ）」と叫んだ。ああ、この可憐な声を終生忘れることはできないだろう。互いに親友同士だから私はアメリカ式に彼らのファーストネームを呼ぶ。彼らは私をクボタと呼び捨てにする。絶対にミスター・クボタと呼ぶなと言ってあるからである。だから十歳のエリシアさえも私をクボタと呼ぶのであるが、これには日本語の語感でいうと「クボタさんのおじちゃん」というような親愛感がこめられているのである。

五年ぶりに見るグレンは大きな男に成長していた。ご承知のように彼は父親のステックリング氏が書いた『なぜ空飛ぶ円盤は来るのか（文久書林刊）』に小さな少年として出て来るこの家の長男である。五年前はまだ高校生で無口なおとなしい子だったが、今はたくましくなって、快活によく話す。ハワイは日本人だらけだったと言うのでおかしくなった。だから我々の旅行もハワイ寄りを中止したのだ。

彼は旅客機のパイロットになるためにいま飛行学校へ通っているという。父親が飛行機好きだからその血を受けたのだろう。

私がカメラを取り出して室内を撮影しているうちに、話はひとしきりカメラの問題に移った。彼らは日本製のカメラを世界の最高品だと思っているらしい。

あれやこれやと話しているうちに時刻はまたたくまに十二時を過ぎた。明朝は早く起きねばならない。一同に別れを告げて、グレンと握手したときに、あんたは、まだアダムスキー哲学に関心があるのか？　と尋ねたら、もちろん、ある、と彼はきっぱりと答えた。

私は感謝して同家を辞し、ふたたびス氏の運転する車でモーテルへ帰った。

熱砂上の追憶の涙

明十三日、六時起床し、七時に階上の食堂で朝食をとった後、ロビー前で全員二台のバスに乗り込んだ。今日はデザートセンター行きだ。バスの運転手は現地を知らぬので、ス氏が自家用車で先導することになっており、それにホ氏と私が乗り込む手筈になっていた。ところが意外にもホルスト氏がまずやって来て、私たちに同行すると言い、続いてイングリッド夫人とエリシアも来た。一緒に行くのだという。この三人を第二グループのバスに乗せたら皆さんは大喜びした。第二グループは第一グループにくらべて何かと損をしているので（本当はそうでもないのだが）、サービスにと思い、そのバスに同乗させたのである。

ス氏の車は実はホ氏の車だった。それをグレンが運転し、助手席にス氏が座り後部席に私とホ氏が並ぶ。

八時に出発して、ビスタの町をあとにし、パロマー山の背後を迂回する道路に出る。この日も曇り空だが、現地は晴れて暑いだろうとス氏が言う。

車は次第に荒涼たる地帯へ入って行き

インディオという町をまず目指したのだが、かなり進行してから道を間違えてしまった。停車して地図を取り出して調べたりしたあと、正確な方向がわかったとグレンが言う。

　果てしない大平原が展開し、月世界を思わせるような岩山が並んでいる光景は壮観だ。アメリカの国土の雄大さを実感するのに充分である。しかもここは米西部のほんの一部分にすぎない。その途方もなく広大な不毛地帯を突き抜ける二車線ハイウェーを一台の乗用車と二台のバスがアリゾナ州の方向にむかって時速百二十キロでぶっ飛ばす。空も次第に晴れてきて暑くなったので、窓をしめてクーラーをかける。広漠たる平野を走るのだからさほどのスピード感が起こらない。

　車中、ホワイティング氏からずいぶん重要な興味深い話を聞いた。その一部は次のとおりである。

―かつてアダムスキーの後継者とされながら後に反抗して出て行ったキャロル・ハニーが、あとになって「悪いことをした」と反省しているという情報があるけれども、これについては？

「反省してはいない。現在もアダムスキーの悪口を言っている」

―なぜ反抗したのか？

「自分も宇宙人とコンタクトしたいので円盤に乗せてくれとアダムスキーに頼んだところ、宇宙人側から断られたので、それ以来ア氏と対立するようになった。エゴのむき出しだ」

―いまどこに住んでいるか？

「ロサンジェルスの近くだ」

―今日、デザートセンターで円盤や母船が出現すると思うか？

「出現しないだろう」

―なぜか？

「もし出現して大騒ぎになり、世界的な大ニュースになれば、世間のUFOを信じない人たちが、UFOというのは宗教的な熱狂的信者のみに見られる幻覚なのだと嘲笑するようになるからだ。スペース・ブラザーズは我々のような信じている者はもちろん、信じていない人たちのことまで考えているので、我々の一方的な期待のみに答えるわけにはゆかないのだ。しかし今日の行動をどこかで見守っているだろう」

―なーるほど！

　ところで、アダムスキーは世に知られざる書物を書いたということだが、それは本当か？

「本当だ。『宇宙船の内部（日本では俗に〝同乗記〟といわれる）』を出したあと最後の書物として、すごい内容の記事を書いたけれども、それを出せばかえって人々を混乱させるだけだろうとブラザーズから忠告されて、ついに活字にならなかった」

―私自身は今後どうすればよいか？

「あんたはこの生涯を終えたら、もう地球で生まれ変わる人ではない。別な惑星へ帰ってしまう人間だ。だから、クボタよ、こうすればよいのだ」と言って彼はある重要な示唆を与えてくれた。これはその後も私の心にこびりついて離れない問題となった。

―私がこの生涯を終える時期はいつか？

「それはわからないよ」と言って彼は笑う。

　他にも重大な情報を与えてくれたが、残念ながら現時点では公開できない。しかしアダムスキー問題が想像を絶した深遠な事実を含んでいることは読者にも充分にご理解頂けると思う。

　車はやがてパームデザートという町に到着した。砂漠の中の集落という感じのする町である。ここのレストランで休憩しようということになり、全員で飲物を飲んだりして喉をうるおす。日本人の団体がこんな所に来るのは珍事だろうが、店内の白人客たちはさほど気にしない様子だ。

　少憩の後、暑い日ざしの照りつけるなかを広場に皆さんに集まってもらい、グレンをあらためて紹介した。グレンも照れながら挨拶をする。私よりも背の高い彼の金髪と美貌が青空をバックに浮き上がる。

　また車に乗り込んだ一同は、やがてデザートセンターという標識のある地域を通過した（六頁のバック写真）。正確に言うと、アダムスキーがコンタクトした地点は、デザートセンターからアリゾナ州パーカーダム寄り十・二マイルの地点である。デザートセンターというのは町の名かと思っていたら、家らしいものはほとんどなく、わずかにガソリンスタンドが一軒と数軒の小屋みたいなものが眼についただけである。

「ここだ」というステックリング氏の声で車を停めて、一同は外へ出た。青空がまた黒い雲で覆われてきたので、思ったほど暑くはない。これは私たちにとって幸いした。隠れ場所のない、こんなだだっぴろい場所で強烈な日光の直射を受けたら、暑さでやられてしまうだろう。

　一同は砂漠をぞろぞろと歩いてス氏のあとに従った。約一キロ近く歩かねばならないが、ヘビやサソリがいるから、ヤブの中に絶対に足を踏み入れるなと注意するので、それを皆さんに伝える。

　ここは砂漠といってもエジプトのサッカラの砂漠みたいな砂粉ではなく、小さな石ころがごろごろと転がった歩きにくい不毛地帯で、あちこちに灌木の小さな茂みがある。幅二メートルほどの乾いた川の跡を越えたりして次第に丘陵地帯へ入って行く。

　パームデザートを出発する直前、広場でグレン君を紹介したあと、デザートセンターでは円盤が出現しないとホワイテ

●グレン・ステックリング

●砂漠を歩く一行

ィング氏が予測した旨を一同に伝えてあるので、もうだれも空を見上げようとはしない。むしろめったに来られない劇的な場所を各自の眼で確認することに皆さんは関心があるようだ。

約二十分歩いてから前方に高さ十数メートルの岩丘が見えて来ると、先頭のステックリング氏がそれを登り始めた。一同も続いて登る。おや、こんな高地でコンタクトしたのかなと意外に思いながら、急傾斜の坂を登るのに、カメラバッグが重いので苦しくてしようがない。見かねた渡辺護氏（東京）が「バッグを持ちましょう」と言って持って下さったので助かった。

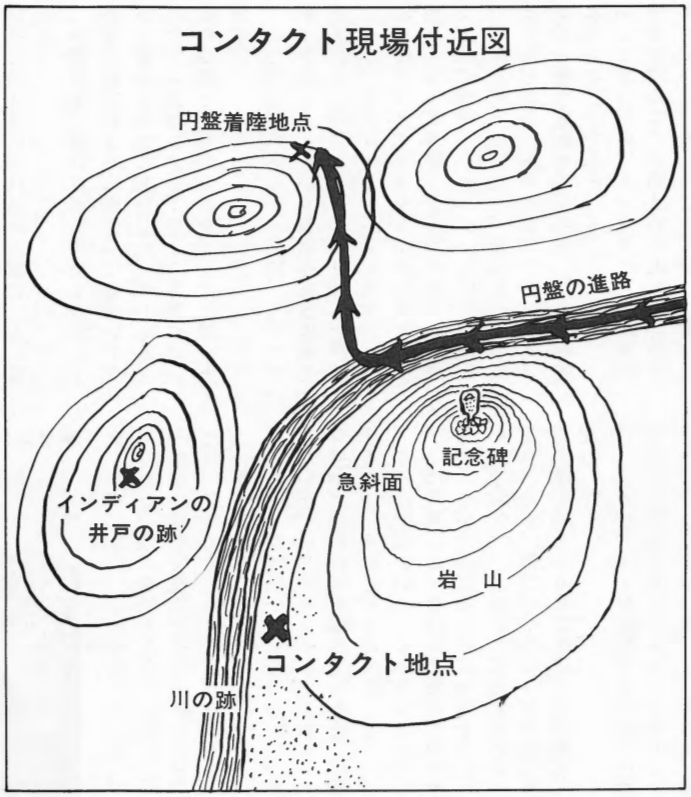
岩丘を登りきった頂上に、あった。8ミリ映画で見覚えのある高さ三十センチばかりの木製の記念碑が岩の中に打ち込まれている。円盤の絵の下に、一九五二年十一月二十日、ここでジョージ・アダムスキーが別な世界から来た人間と会ったという意味の英文が記されている。

ス氏の説明によると、実際のコンタクトの場所はこの岩丘上ではなく、山のすぐ下を流れていた川の跡のこちら側の砂原であるという。見おろすと、たしかに幅二メートルばかりの干上がった川があり、その手前に幅五メートルほどの砂地がある。そして今来た方向の彼方に小高い丘があり、アダムスキーは最初にこの丘の上に六インチ反射望遠鏡をすえて、川の上空を超低空で岩丘を迂回しながら飛んでくる円盤を撮影したという。その後円盤は馬の鞍状の丘の方へ飛んで行って、その背後に着陸した。そしてそこからオーソンが歩いて来て、アダムスキーも歩み寄って、眼下に見える砂上でコンタクトしたのである（**下図を参照**）。

●ステックリング氏が建てた記念碑

岩丘の頂上に記念碑を立てたのは、下方の砂地の地盤が弱いためだとのことでス氏によれば一九五二年当時に比べて、現在は砂原の標高が三メートルも低下しているという。多年の流水で洗い流されてしまったのである。だから地形はある程度変化しているのだ。

私たちは記念碑の前で簡単なコンタクト式典を行うことにした。私とステックリング氏が向かい合って、スペース・ブラザー流に掌を合わせる仕草をし、続いて、持って来た記念品を贈呈した。高品質のニコン双眼鏡である（軽量タイプ8×24）。ス氏はすぐに包みを開いて大喜びした。カメラの放列からシャッター音がひとしきり響きわたる。



五千機の宇宙船が出現！

そのあと一同は斜面をくだってコンタクトの現場へ降りて行った。全くの砂地ではなく、表面に小さな石が無数に転がっているけれども、掘り返せば下からキメのこまかい砂が出てくる。コンタクトが行われる直前に、現場へ円盤がやって来て、足跡がつきやすいようにオーソンが水をまいたのだとス氏が話す。こんな

●コンタクト式典

「皆さん方は大変な場所に来ているのです。二千年前のある大事件と関連のある場所なのです」としか説明のしようはなかった。

川の向かい側の丘の上を指さして、ス氏が言う。

「あそこにむかしインディアンが水を取るために掘った井戸の跡があります」

見ると、たしかに木組が残っている。ああ、やはり例のインディアンたちがここにいたのだ！　驚異と感動とで、また全身の血潮が逆流する。宇宙の法則を探求した偉大なインディアンたち！

その種族から転生して、はるかな年月を経た二十世紀のいま、再度、なつかしい〝故郷〟を訪れた人が何人かこのグループに混じっている筈だが、本人たちは記憶を呼び起こしているだろうか。気づいているのだろうか。

要するにこの場所はアダムスキーが偶然に円盤写真を撮影したり偶然に金星人と会見したのではなく、もっとはるかにことは初耳だ。しかし現在の砂地でも足をしっかりと押しつければ、クツの跡がつく。まだ水分はあるらしい。

ここで一同の記念写真を撮影後、私はしゃがみ込んで砂を採取した。塙君から取ってきてくれと頼まれていたのだ。指で柔らかい土を掘り返していると、感動で全身が震えてきた。二千年前のある出来事を思い出して激情で体が爆発しそうになる。そして二千年後にまたここでそれに関連した大事件が発生したのである。だれも知らない宇宙的な転生の大ドラマが演じられたのだ。もちろん、すべては事実なのだが、一般で伝えられている歴史というものの曖昧さをここほどに感じさせる場所はない。

思わせぶりな書き方かもしれないが、これ以上は言えない。

●砂を採取する

●コンタクト地点にて。前列右より５人目がステックリング氏，その左は筆者

深い意義の秘められた地なのだ。それをア氏は前もって知っていたからこそ、ここへ来たのである。しかも米空軍にもここでコンタクトが行われることが宇宙人側から事前に知らされていたという。だから当日は米空軍機が上空を旋回してコンタクトの状況を撮影した。その写真は空軍のトップシークレット資料として保管されているらしい。ア氏は体験記の中で、すべてが偶然に発生したかのように話をボカしているが、これは空軍との関係を考慮したためであろう。しかもコンタクトが行われたとき、上空に五千機のUFOが出現したとステックリング氏が説明した。これも驚くべき話である。

私たちは砂地にクツ跡をつけたり、インディアンがお茶の葉に用いたという灌木の葉をとったりしながら引き揚げた。

バスの方へ帰る途中、かたわらにいた一女性に話しかけると、涙が頬を伝わっている。

「どうしたのですか?」

「インディアンが掘ったという井戸の跡を見たら、なぜか涙が溢れてしようがないんです」

ああ、この人も遠い昔の記憶を呼び起こしたのか。旅行に参加して、この地へ引き寄せられたのは、転生のカルマによるものなのだろう。

一同はハイウェーのそばに待機していたバスに分乗した。到着してから約一時間半後である。空には依然黒雲が大きく広がっているけれども雨が降る気配はない。涼しくてよかった。これも天の恵みだ。

車は元の方向へ快走し、三時頃にインディオという町のレストランに入り、昼食をとった後、四時頃、ビスタへ帰るというステックリング氏のグループと訣別して私たちもバス二台でロサンジェルスへ向かった。

またも果てしない大平原が展開する。疾走する幌馬車、舞い上がる砂塵、インディアンの喚声——、西部開拓時代の幻影がカメラのファインダーの中に浮かび上がってくるような錯覚におそわれる。

「これがアメリカだ!」

私は何度もつぶやいた。

ルースなホテルの管理

バスは七時頃にロサンジェルス市内へ入った。チャイナタウンの大きな中華料理店の階上の大広間で一同夕食をとる。久方ぶりに油っこい料理で満腹感を起こして、食傷気味になる。異国のこうした場所へ来ると日本料理の淡白さについてあらためて考えさせられる。ここにも日本人の団体が多数来ていた。

八時近く店を出て、再度ヒルトンホテルへ投宿する。私のキイは一五〇二となっているので、その部屋へ行ってドアをあけようにも開かない。調べてみると、同じ番号でもS(シングル)とW(ダブル)の二種類があり、私のキイにはWと刻印があるので間違えたものと思い、かなり離れたW一五〇二室へ行くと今度はすぐに開いた。やれ安心とばかりずはトイレに入って用を足したあと、部屋へ入ると、なんだか様子がおかしい。人間がいるというフィーリングが起こるのだ。ふと見ると、ツインの各ベッドのそばになんとスーツケースが一個ずつおいてあり、しかも日本人の女の名が記してある。女物の靴まできちんとおいてあるではないか。

驚いて部屋をとび出た私はすぐピンときた。この女性たちが外出する際にフロントへ預けたキイを係員が間違えて私に渡したものらしい。日本のホテルでは考えられないルースなやり方だ。これはアメリカのホテルで多数の中南米人が働いているためである。生活程度の低い彼らは人件費が安いのでホテル業界で大量に雇われており、このホテルのフロントにもそれらしい従業員がいて、カギのことでクレームをつけると、謝りもせずにSのキイをポンと渡してくれた。

そこでまた重い荷物をゴロゴロ押しながら元のSの部屋へ上がって行った。

部屋へ入ると、十二帖もある広い室内には、大きなソファ、丸テーブル、椅子などがあって、一見応接間風になっており、ベッドが見当たらない。折よく井口才司君(東京)が廊下に来たので一緒に調べるのに、ソファをベッドに改造する装置もなさそうだ。仕方がないので電話でメイドを呼ぶと、彼女は、ソファの座を上にめくって中から折たたみ式のベッドを引っ張り出し、ソファで頭部を囲むようにして手早くベッドを組み立てた。日本人によく似た女性だが、これも中米人らしい。英語はほとんどできない。

チップに一ドルを渡すと、嬉しそうな顔もせずに出て行った。チップをもらうために、わざとベッドの用意をしなかったのかもしれない。他の女性の部屋でもこうしたケースがあったと後になって聞いた。

十一時頃、ニューヨーク在住の宮内温夫氏に長距離電話をかけたら、なつかしい声が響いてきた。氏は古くからのGAP会員で、非常に熱心なア哲学実践家であり、渡米十年近く大奮闘の末今はアメリカ商業美術界で名を成した成功者である。昨年七月に日本GAP会員で三重県四日市出身の水谷友紀さんと結婚され、まもなく第二世が誕生しそうだという。まずはめでたし、などと話す。氏は以前、私が仲介した別な結婚話がこわれたりして苦汁をなめたけれども、今の奥さんは最高の素晴らしい女性らしい。やはり良いようにしかならないのだ。いっとき物事がダメになったように見えてもそれは良き結果が生じるための前提なのだろう、と語り合う。氏はいまファインアートの個展をニューヨークで開くべく画廊のオーナーと交渉することになっているという。激励してから電話を切り、急に疲労が出てベッドに横たわり、熟睡して、夜中の三時に眼が覚めて以来、朝方まで眠れなかった。

太陽と情熱の国メキシコへ

今日は十四日。日本を出て以来、まだ数日しかたたないのに、一カ月もいたような気がする。あまりにめまぐるしい日々をすごすからだろう。

七時に起きると、気分がわるい。毛布

というよりも薄い布みたいなものを一枚かけて寝ただけだから風邪をひいたらしい。喉が痛くて、しきりにセキが出る。ビスタに着いた頃から体調はすぐれなかったが、今朝は微熱もあるようだ。こんな所で病気になったら大変だと思い、なるべく横になることにして朝食はやめた。外気は低いとみえて、室内の冷房はとまっている。深海ザメエキスの『マリンゴールド』を多量に飲み、一時間後にアリナミンA25を飲む。

本誌先号の拙記事『科学と人間愛と信念』の中で述べた、いくら酒を飲んでも酔わない、ガンでも白血病でも治るといわれる特殊な健康食品とは、この『マリンゴールド』のことで、旅行に際して小ビンを一個携行したのである。これは速効性があるので、以後の旅行中、急速に風邪が治って体調が快復したのも、やはりこれを多量に飲んだ結果ではないかと思う。井口君からはニンニクを主体にした健康食品を頂いたが、これも効果があったにちがいない。

ヒルトンホテルをバスで十一時に出発して空港へ向かう、これからメキシコへ行くのだ。今度で二度目の訪問だが、メキシコは私にとって非常に魅力ある国なのでエキサイトしてくる。強烈な太陽、底なしの陽気さ、マリアッチの奏でる明るい民族音楽、メスティーソ（スペイン人とインディオとの混血）の美人、強いテキーラ（竜舌蘭の根を蒸溜して作った強烈な酒）の匂い、生臭いタコス（トウモロコシの粉を練って焼いたメキシコ人の常食）の味、苦笑いしたくなるほどのだらしなさ、そして日本人を兄弟分とみる大いなる親日感――。過去世でメキシコ人だったのではないかと思われるほど私はこの国に限りない愛着を感じるのである。

バスが出発するときにガイドの上川氏がスーツケースを点検して、「このグループはしっかりしているなあ」と、つぶやくのを耳にした。あとで田中氏から聞いたところによると、ロサンジェルスのガイドさん方はわが旅行団を激賞していたということだった。整然と行動し、荷物の集積等にも全くミスがないからである。GAPは違うんだ、と私はひとり胸を張った。他の日本人旅行団はこうはゆかぬ。集合時間にいつまでも集まらぬ、ぐずぐず不平を言う、行方不明になって心配させる、大酒を飲んで暴れる、添乗員やガイドをバカにしてかかる、というような団体が多いらしい。田中氏の話によると、最もタチが悪いのは中小企業経営者から成る海外旅行団で、無作法でわがまま放題な人間の集まりに全く手を焼くという。

●ロス空港からメキシコ航空で

ま、そんな人間は我々に関係はないので、話をもどそう。

ロサンジェルスのフリーウェーのすばらしさや、カリフォルニア州の産業などについてバス中で上川氏が説明されるうちに一行は空港に着いた。ここでメキシコ航空九〇一便に乗り、予定より少し遅れて二時十五分に離陸した。ジャンボ機より小型のB七二七だが、全然揺れることはなく快適な飛行を続ける。

機内に走り幅飛びの世界記録保持者がいるので、話しかけたいから通訳をやってくれと大桑光順君（静岡県）が頼みに来た。左後方に座っている黒人がそれらしい。私はカゼ気味でセキが出るから越崎さんに頼んだらどうかと言ったら、同君は越崎さんをつれて話していた。

夕方六時半頃にメキシコ空港へ着くやイの一番にイミグレーションを通過して待合室へ出て行ったら、なつかしい顔が待っていた。一昨年のメキシコ旅行で世話になった現地在住のガイド金子氏である。この方のことは本誌62号の旅行記で書いたのでご承知の人も多いと思うが、マヤ考古学専攻の学徒で、スペイン語は母国語同様、メキシコに関して知らぬことはないという大ベテランである。今回は大人数なので、もう一人ガイドさんをお願いした。群馬県出身の山口氏で、高校卒後、世界中を放浪して歩き、最後はメキシコにとり憑かれてガイドになったという、これまたベテランである。英語とスペイン語が得意らしい。

七時三十分にバスは空港を出て、夕暮れの市内をまずレストランに向かう。この大都市は標高二千二百メートルもあるので、夏でも涼しく、夜は肌寒い。

バスは市内の大きなレストランに着いた。その名はフォンダ・デ・レクエルド（思い出の館）である。店内は大勢の客でごった返し、メキシコ特有の陽気さがみなぎり、騒然たる雰囲気だ。これに輪をかけているのが、店内で演奏している五人組の民族音楽の楽団である。インディアンハープ、ギター数挺で編成した男たちが合唱しながら愉快そうに演奏している。あまりうまくはないが、メキシ

●メキシコ市内

コ特有のエキゾティシズムでむんむんする。これだ、これだ！ 私は小躍りして喜んだ。全員乾杯の直後にこの楽団に演奏させれば雰囲気は最高だろう。最初の曲はラ・クカラチャに限る。よし、これを雇うことにしよう。とっさに演出を考えた私は、金子氏を通じて、宴会が始まるまで待ってくれるようにと頼んだ。彼らは承知した。

ところが食事は出てもワインがなかなかそろわない。人手不足もあるのだろうが、そこはのんびりしたお国柄、せっかちな日本人とはまるきり人種が違うから落ち着いたものだ。

やっとワインが出そろって乾杯にこぎつけるまでの約三十分間、楽団の男たちは全く不平も言わずに待っていた。こうした辛抱強さも彼らの特徴である。

例によって大音声による乾杯の音頭をとると全員の大歓声が店内に鳴り響き、続いて華やかな演奏が始まった。皆さん大喜びし、拍手大喝采のなかをメキシコの代表的民謡ラ・クカラチャの明るい男声合唱が流れる。

ラ・クカラチャ　ラ・クカラチャ
ジャノ　プェデ　カミナール
ポルケ　レ　ファルタ
ポルケ　レ　ファルタ
マリファナ　ケ　フマール

あまりにも有名な三拍子のこの曲は、日本では全く知られていない。独立戦争当時の兵士を歌ったものだと思っていたが、あとで山口氏の説明によると、兵士と共に従軍した婦人たちがナベを背負って歩く姿がゴキブリに似ているところから、クカラチャ（ゴキブリ）と呼ばれてこの歌が作られたという。

別な話になるがメキシコ、グァテマラ滞在中に、私は民族音楽の楽団をホテルやレストラン等で見かけると、この曲とランチョ・グランデをよくリクエストしたが、クカラチャはワルツ調以外にルンバで演奏する例も少しあった。だがこの曲の最高の名演は一昨年メキシコのカンクンのホテル『アリスタス』のレストランで聴いた三人組の演奏だろう。これは感動的だったが、残念ながらテープに録音しそこねた。

今度はテープレコーダーを携行した人が何人かいて、そのうちの菊地喜之君にステレオ録音をやるように頼み、これをスライドのＢＧＭに使用しようと、すでに計画していた。同君はこころよく引き受けてくださった。有難い。

さて、宴会も音楽がランチョ・グランデ、シェリト・リンド等五曲演奏され、そのたびに私が大声で曲名をどなると、拍手と大歓声がわき起こる。宴会も熱気をおびて騒然とし、酒が足りないという声も出た。そこで注文者払いとしてワインを次々と取り寄せた。メキシコのワインはわるくはない。結構飲めるし安いのだ。私も個人で注文したら給仕長らしいキズだらけの浅黒い顔をした五十年輩の太ったオヤジがワインを持って来たので、そこへおいてくれと言うと、男は片目をつむってニタッと笑った。おまえだけでこれ一本を飲むのか、という意味らしい。こうしたユーモラスな仕草もメキシコ人ならではで、体が震えてくる。ソースをたっぷりかけた魚の料理も実においしい。にぎやかな楽団の演奏が終わって、金子氏にチップの額を聞くと、十三ドルほどやってくれと言う。金を渡すと彼らは喜んで去って行き、階下でまた演奏を始めた。

愉快な、素晴らしい夕食会が終わってホテルのマリア・イサベラ・シェラトンへ入ったのは十時すぎだった。自室へ入ってから、まず大洗濯をする。喉を痛めたので井口君がウガイ薬と、例のニンニク玉の健康食品をこのときにくれた。そのあと睡眠薬を飲んで寝たら、ぐっすりと眠り込んだ。

●楽団のはなやかな演奏

●演奏が終わって拍手大喝采

●思い出の館の愉快な夕食会

テオティワカンの大遺跡

翌十五日はメキシコ市内見学と、テオティワカンの大ピラミッドへ行く日である。七時半に起床したが、喉が痛くてセキが出る。空は曇り模様だ。九時に全員バスで出発し、まず憲法広場へ行く。コロンブスや土民大統領の銅像などがある。一昨年に来ているので、初回ほどの好奇心は起こらぬけれども、なつかしい感じがする。

以下は車中での山口氏の説明。先年カーター大統領がメキシコへ来たとき、メキシコ人は冷淡であった。石油をアメリカに搾取されると思ったらしい。アメリカにやるぐらいなら日本へやるほうがよい、そして日本の技術を導入するほうがましだ、という声が強かったという。それほどに親日的なのである。こんないい国を日本人が理解せず、メキシコ人は怠け者だなどといって軽蔑するのは、国際感覚の欠如もいいところだろう。日本の実業家や政治家の視野がどの程度のものかは知らぬが、大体、メキシコについて知らなさすぎるように思う。

さて、十一時にバスはメキシコ市から約五十キロ離れたテオティワカンへ着いた。まず博物館へ入ってケッァルコアトル遺跡を見る。グロテスクな彫刻が奇観を呈している。ケッァルコアトルというのは羽毛あるヘビのことでデニケンはこれを太古の宇宙船にたとえたが、要するにナゾのシンボルである。詳細は本誌62号のメキシコ紀行で述べたので省略するが、古代マヤの遺跡は神秘と謎に包まれており、正統考古学でも容易に解決のつかない問題が山積しているのだ。

太古のマヤ人がどこから来たのか？古代マヤの遺跡に多大の影響を与えたというテオティワカンの巨大なピラミッドを建設したのはいかなる種族なのか？

ひとつの手がかりはある。それはジェームズ・チャーチワードのムー大陸に関する大研究である。彼の著作の日本語版が数点、大陸書房から出ているので、参照されるとよいだろう。

博物館に約三十分いたあと、再度バスで、まず月のピラミッドへ行く。右手に見える最大の太陽のピラミッドと双璧をなすこの大構築物には一昨年来たときに登らなかったので、今回は両方のピラミッドへ登ろうということにした。

●ケツァルコアトルを見る

●メキシコ，テオティワカンの大遺跡の「月のピラミッド」を背景に

まず全員が月のピラミッドを背景に記念写真をとる。そのあと太陽のピラミッドへ移動して、その前で記念写真をとる予定だったが、空の雲行きが怪しくなってきた。私は古代の神官の住居跡から少し離れた位置で太陽のピラミッドを撮影していたが、ついに小雨がポツンポツンと降り出した。通りかかった白人二人が私のカメラを見て「マミーヤ」と叫ぶ。カメラのことは後述するが、日本人が海外へ出て大威張りで持って歩けるのは日本製カメラぐらいのものだろう。

雨が次第にましてきたので〝太陽〟の前での記念撮影は中止して後方広場のバス乗り場の方へ行く。〝月〟の前で撮影してよかったと胸をなでおろした。この短時間内に〝月〟と〝太陽〟の両ピラミッドに登ってきたと数名の人が言うのにはおどろいた。私は一昨年〝太陽〟の頂上まで登っているので、様子は大体にわかっている。この大ピラミッドは後世に考古学者が修復する際、原型をかなりはずれた形にしてしまった。したがってアステカが発見して〝太陽〟だの〝月〟だの、〝死者の大通り〟などとロマンティックな名をつけた当時のものとは、かなり様子が変わっているらしい。

バスはメキシコ市へ引き返した。そして二時半に市内のノルマンディー料理店で食事をとった。魚料理だが、これもうまい。

約一時間後の三時半から人類学博物館へ行く。これは古代マヤ、トルテカ、アステカ、ミステカその他の種族の遺跡出土品を集めた大建築物で、ロンドンの大英、パリのルーブル、カイロの国立と並ぶ世界有数の大博物館である。館内を一巡してから、市へ帰る途中、マーケットになっている大きな土産物店へ寄る。メキシコは民芸品の宝庫だが、ここへ入ると、あるわあるわ、民芸品の山だ。こう多種類あると、かえって買う気がしない。小物を少し購入する。そのあと日本人経営のオパールの店へ立ち寄る。ここも一昨年来た場所だが、品数が少ない。

ホテルへ帰ったのは八時頃だった。有志十名ばかりで食事に出ようということになり、小さなレストランに入って、タコスをサカナにしてビールを飲む。ここのタコスは油の匂いが生臭くない。一人分七十一ペソ（七百十円）でまあまあというところ。結構、腹いっぱいになる。

ホテルへ帰ってから山木君がもっと飲みたいというので、ホテル内のバーへ行くも大音響のディスコなので、すぐ出て広いバーになっている正面階段の踊り場へ行ってみると満席で座れない。この階段に赤い服を着た十人の楽団がいて、やはりメキシコの民族音楽を合唱していたが、これは素晴らしい。市内の一流バンドということで、他のホテルの客もここへ聴きに来るほどだという。しかし間もなくやめたので、階下の別なバーへ入ると、ここも大音響。仕方なく階段のバーへ引き返し、ここでテキーラとマルガリータを飲む。これはこたえて、夜は熟睡し、朝四時半に眼が覚めた。マルガリータというのはテキーラにレモンジュースを混ぜたもので、これならだれでもおいしく飲める。ついでながらテキーラは東京の有名デパートの洋酒売場で輸入品を売っているから入手できるが、現地の価格よりは高い。

●メキシコ市の人類学博物館へ

最後の楽園グァテマラへ

十六日の早朝、六時に全員でホテルを出発した。楽しかったメキシコとおさらばして、今日はいよいよ最後の訪問国たるグァテマラに入るのだ。

空港に着いてからメキシコ航空B七二七の二〇七便で八時十五分出発の予定が遅れて九時三十分となる。どうも飛行機の発着時間はあてにならぬ。これでまたグァテマラ市内観光の時間が削られることになると思えば、面白くはない。

機内では当初微熱があり、気分がわるくて、この調子ではグァテマラで水泳などもってのほかだと思っていたところ、どうしたわけか次第に調子がよくなり、食欲も出て機内食をおいしく平らげた。

十一時十五分にグァテマラ空港着。早速バス二台に分乗して、まず考古学博物館へ行く。さすがに市内はメキシコ市ほどに繁華ではなく、ひなびた風景が展開する。私の乗ったバスは早く館へ着いたのに他の一台がなかなか来ない。一同は正面玄関の石段の所でたむろして待つ。熱帯ながら海抜千五百メートルあるので暑くてかなわぬというほどでもない。

ひまつぶしに付近をぶらつきながら撮影する。ここはメキシコよりも俗化されない国で、人々が実に純朴であることがカメラを向けるたびにわかってきた。写されるのをひどく恥ずかしがるのだ。インディオはスペイン語を母国語とするか

●グァテマラ市は緑が多くて美しい都市

ら、みかけはメキシコと似ているが、どうも中米に残された最後の楽園であるような気がする。そしてこのことは後日アンティグアへ行ったときに判明した。

二時前に市内の中華料理店たる漢宮酒家へ一同で入り、昼食をとる。ここの中華料理は少々怪しい。本物ではなさそうだ。こんな場所に中華料理店があること自体、奇妙な感じがする。

四時頃、ここを出て、まず中央公園へ行く。スペイン風の中央政庁をバックに全員の記念撮影を行ったあと、四十分ほど各自自由に散策する。やはりカメラを向けると人々は恥ずかしがる。

メキシコでもそうだがスペインの影響で、町作りのパタンは大体に一定している。中心部に正方形の広場をまず設け、そのそばに市庁、教会などを設置するのである。

バスは続いてメルカード（市場）へ行った。特殊な地域に、中庭を囲んで十数軒の民芸品店が並んでいるが、たいした物はない。店の人たちもうるさくすすめない。私たちをジロジロと見つめるだけである。

ここに約四十分いたあと、ホテル、フィエスタへ入る。私の部屋はすごく立派で、巨大なダブルベッドの頭部には美しい彫刻をほどこしたパネルがあり、両側には大きな電気スタンドがあって、すでに点灯されていた。室内は広く、浴室は大理石で作られている。海外のホテルで、こんな立派な部屋へ泊るのは初めてだ。

七時より田中氏、その他数名の方々と付近のレストランへ夕食をとりに出るもまた気分が悪くなり、悪寒がして、そのうち居ても立ってもいられなくなり、わるいとは知りつつも先に出て帰ることにした。金子氏が心配してタクシーを手配して下さった。ホテルへ帰り、睡眠薬を多量に飲んで熟睡したが、これがよかった。朝五時に眼覚めたときは気分爽快で「治った！」と感じた。

睡眠薬を携行したのは、昨年エジプトのカイロに泊ったとき、野外の深夜劇場の騒音で一睡もできず、翌日のピラミッド内のトンネル登りでえらい目にあったため、今年の旅行ではぜひ持って行こうと思いたち、田中氏を通じてある病院から入手したのである。

●グァテマラの淑女

大もての日本製カメラ

セキが少し出るが、今日は待ちに待ったティカールの遺跡見学の日だ。私は勇躍旅装をととのえて七時に出発した。

空港へ着いてみると大混雑を呈している。第一グループは予定通りに飛行機で早く出発した。ここも一台の飛行機に全員が乗れないので二手に別れたのである。私が属する第二グループはどうした

●グァテマラ市中央公園にて。後方の建物は中央政庁

わけか飛行機の出発が遅れて、ロビーで長時間待たされることになった。

私がニコンカメラとマミヤRB67をぶらさげて空港内を撮影していたら、中年の白人の男が、珍しそうにのぞき込んで、達者な英語でいろいろと質問してきた。まずニコンに取りつけていたアオリのきくPCニッコールレンズに関心を持ったらしい。レンズをシフトさせて英語で説明すると、世にも感心したような顔をして見ている。彼はフランス人で、夫婦三組計六人でティカールの遺跡見学に来たとのこと。手にはヤシカをさげていた。こんなレンズを見るのは初めてだと言い、仲間を呼んで皆で面白そうにレンズを見る。不思議がるのも無理はない。カメラ王国の日本でも『アオリをきかせる』という言葉が一般化していないし、こんなレンズの存在することも知らない人が多いのだ。だが、知的なこのフランス人はレンズの特性をすぐに理解した。そしてフランスではニコンカメラが四千ドルもすると言うので、今度はこちらが驚いた。八十万円ではないか！ 私が聞き違えたのでなければ、大変な金額である。日本では六～七百ドルだと言うと、信じられぬという顔をする。ハッセルブラッドをどう思うかと尋ねるので、こっちのほうがいいんだと手許のマミヤRB67を指さすと、価格を聞くので、約七百ドルだと答えたらびっくりしている。日本で高級カメラがこうまで安く売られているのが不思議でしようがないという顔付きである。カメラのメカニズムを説明したり、ピントグラスをのぞかせたりすると大喜びし、非常に嬉しそうな顔をして握手してから去って行った。

●フランス人にカメラを説明する筆者（左端）

さて飛行機はなかなか出ない。前夜、食事をとらなかったので、腹がへってきた。そこで山口氏と一緒に空港内のレストランに入り、いりタマゴ、肉一皿、パン、コーヒーの朝食をとった。これで二ドルだから安い。

前述のとおり、山口氏は世界中を放浪した人で、まだ行っていないのは南米とアフリカだけだという。食堂でいろいろ話しているうちに少々脱線して女の話になった。氏によると、世界の女で最もよいのはやはり言葉の関係もあって日本人で、次はドイツ人女性。これは日本人に似て恥じらいを見せるし、親日感も強いという。次にアメリカ女。これはこちらのミスをはっきり指摘してくれるからよいとのこと。ユダヤ系の女も捨てがたいと語る。体験した数は聞きそこねた。

ロビーへ引き返すと各国人でごった返している。アメリカ人が多く、申し合わせたように日本製カメラをぶらさげている。わが国産カメラの世界進出ぶりは、すさまじいものだ。

ジャングルの謎の大遺跡

結局飛行機が出たのは十一時半であった。実に四時間も待たされたわけだが、皆さんは全く一言の不平も洩らさなかった。讃歎に価する人々と行を共にする幸せを感じる。

小型のプロペラ機だが安定はよい。機中、大桑君の様子がおかしくなってきた。今までしばしばあったことだが、トイレに長時間入って出てこないのだ。数人でドアーを叩いたりして、やっと出させた。約一時間の飛行後、機はジャングル中の小空港へ着陸した。ティカールへ来たのだ。外へ出ると、すごく暑い。これはまさにユカタン半島の猛烈な熱気そのものである。

ティカールは紀元前六〇〇年から後二五〇年までの先古典期、二五〇年から九〇〇年までの古典期に分けられるが、九〇〇年代には例の有名なマヤの謎の大蒸発により、この大文化センターも放棄されて、以来ジャングルに埋もれていたのを後世発掘したマヤ最大の遺跡である。往時約九平方キロの面積に一万人の人口を擁する大宗教都市であったというが、今はグランプラサ（中央大広場）が主体となり、ジャングルの彼方に別なピラミッド群が首を出している。

●ティカール行きの飛行機に乗る

小さなバスに乗って大広場へ向かう。車中で現地のグァテマラ人ガイドがスペイン語で説明するのを聞いて、その見事な発音に完全に魅了されてしまった。ジャングルの奥から出てきたような野性的な浅黒い顔をしたこの男のスペイン語ほど美しい言葉を私はかつて聞いたことはない。続いて男は英語で説明したが、その発音も堂にいったものだった。よほど語学の才のある人物なのだろう。

大広場へ出ると、ある、ある！ 写真で見覚えのある大ジャガーの神殿の異名を持つ1号神殿ピラミッドが勇姿を見せており、そのむかい側には2号神殿がそびえている。例によっておそろしく急傾斜な石段が高さ六十メートルの上部神殿

まで続くが、まともには登れないので、上から垂らしてある鉄のクサリにつかまりながら登るのである。クサリなどなかった古代マヤ人は、この絶壁にも似たけわしい石段を平気で登り降りしたのだろうか。

しばらく下から見上げて撮影したあと続々と登るわが同胞の男女を見て、私も登りたくなってきた。一昨年メキシコ、ウシュマルの『魔法使いのピラミッド』の急傾斜の石段に登らなかった私を笑った人があったので(GAP会員ではない)今度は名誉挽回とばかりに登頂の決意をした。

山口氏に重いカメラを持ってもらい、クサリにつかまりながら登って行く。案外に身が軽く動く。もともと運動神経は鈍いほうではない。しかしさすがに息切れして、頂上に着いたときは急速に呼吸するのが精一杯だった。下方を見るとゾッとする。石段が垂直に近く見えるのだ。頂上の神殿内では監視人が座って読書していた。

しばらく休んで撮影したあと、降り始める。登山は登りよりも下降が危険という言葉を如実に感じる。だがなぜか恐怖心は起こらない。わりとスムーズに下降を続けて、やっと降りたときはホッとした。そのあと横の神殿跡へ登り、斜め前方から1号神殿を写す。考古学の本の写真でよく見かける図柄はここから狙ったものらしい。2号神殿の中腹まで登って真向かいの1号神殿を撮影する。これなら歪みが起こらないので、アオリをきかせる必要のない良好な写真が撮れる。

そのうち、折よく金子氏と第一グループの人たちが来たので、1号神殿をバッ

●グランプラサ。左は1号神殿ピラミッド

●1号神殿を降りて行く

●ティカールの1号神殿をバックに全員勢ぞろい

クに両グループ合同の記念撮影を行ったが、これは幸いだった。そのあとティカールでは両グループとも別行動をとることにきめた。

私たち第二グループはバスに乗って、かなり離れた4号神殿ピラミッドへ行った。未発掘のため、ふもとは山になっており、それこそ垂直に近い急傾斜の山腹を木の根やハシゴなどを伝わって約五十メートル登るのである。これは1号神殿よりもはるかにきつい。大汗をかきながらやっと頂上の神殿の基部にたどりついた。五十五歳の私が二十歳代の若い人たちと同じペースで登るのは少々苦痛だったが、それでも何とかやれたのは信念の力と深海ザメエキスのおかげだろう。

眼下を見おろすと、大海原のように展開するジャングルの彼方に3号神殿、右手に1号と2号とが首を突き出しており雄大な景観だ。

暫時休息して撮影したあと、また同じ急坂を降りて、バスに乗り、空港のそばのジャングル中のレストランへ入る。時刻は三時四十分だ。

レストランとは名ばかりで、「ジャングル・ロッジ」という草ぶき木造の薄暗い原始的な小屋なのだが、これがこたえられない。どこやらの国みたいに、すぐに観光地化してやたらと近代的なホテルや食堂を建てたり、〝ティカールまんじゅう〟を売り出したりするよりは、この未開発の状態がはるかに価値がある。「ジャングルよ、永遠にこの土地を護れ！」だ。

料理は魚と野菜で、ビールがすごくうまい。一体にメキシコやグァテマラのビールは味がよい。ただし日本のように大ビンではなく小ビンである。

大桑君の様子がおかしい。軽度の精神錯乱状態になったらしい。ひとりで立ち上がって何事かをわめいたり笑ったりする。拝むような格好をしたりして、正常ではない。これを同室の小島氏や静岡の野口さんが終始付き添ってついに帰国するまで面倒を見られた。このお二人の高貴な奉仕精神を心から讃え感謝したい。

食事後五時までレストラン前で撮影などして時間をすごし、五時五分前に空港——というよりもジャングル中の広い空地なのだが——へ行ってそのまま機内へ乗り込む。空港ビルというようなものはない。

機体は揺れることもなく、またも一時間の快適な飛行を続けて、六時にグァテマラ空港に着いた。ただちにもとのホテル・フィエスタへ帰り、ひと風呂あびてから夜八時に大勢でレストラン『パラドール』へ行き、マリンバの演奏を聴きながら食事をする。実に楽しい。ここで佐藤和枝さんとダンスをする。マリンバの演奏はさほどでもないが、ローカル色豊かで、インディオのグァテマラ人たちは人なつこくて、人情味に溢れている。

十時頃、一同歩いて引き揚げる。ホテルの自室へ帰ると、整備された室内はまたもすでに照明されている。こんなホテルがどこにあるだろう。しかも今朝出がけにメイド宛のチップとして一ケツァル札（米貨一ドルと同価）を二枚枕元においたのに、その一枚は残してあった！

●ジャングル中のレストラン

美しいリキンで保養

明くれば十八日、ホテルへスーツケースだけを残して、南部の保養地リキンへ向かう。一泊するのだが、全員、着替えの下着類だけの身軽な装備で出発した。グァテマラ市の朝は肌寒い。前述のとおり標高千五百メートルあるので暑くはないのだ。緑が多く、その中に白壁の家が並ぶ美しい都市である。日本の都市とはスタイルがまるきり違う。

●佐藤さんとダンス

途中、パリンという町のメルカードへ寄る。インディオの土民たちが果物や野菜を売っている。カメラを向けると、大いに恥ずかしがって顔を隠す。不潔な場所だが、私は異国のこうした素朴な人々のいる光景が好きだ。小安氏（大阪）がオレンジジュースみたいな果汁をおごってくれる。うまい。渡辺氏からは小さなバナナを頂いたが、これは珍味だった。

バスの中で山口氏がメキシコ民謡のラ・クカラチャの歌を解説し、一同に歌い方を指導する。天気は次第によくなって青空がひろがってきた。緑の多い田舎の風景は日本のそれに似ているけれども、植物が違う。ヤシの木の多い熱帯植物である。ジャングルや大平原が次々と展開

●レストラン「パラドール」での楽しい夕べ

し、眺めは壮大だ。

十二時頃、二台のバスはリキンの船着場へ着いた。ここでフェリーボートでリキンの町まで入江を渡るのである。第二グループ、第一グループの順である。ワニの出そうなジャングルに囲まれた入江を約十分で渡ってリキンへ着く。ここは太平洋岸の白亜のホテルの低い建物が立ち並んだ美しい保養地で、その模型がホテルのロビーに展示してある。中心部はプールになっている。

金子氏によると、こんな所へ日本人の団体が六十名も来るのはやはり空前絶後だろうという。だからこの旅行は価値があるのだ。金魚のウンコのように大勢の日本人がぞろぞろと行列をなして歩くパリやロンドンのごとき大都市へ行っても、もうあまり自慢のタネにならないし、だいいち異国情緒も薄れてくる。その点、リキンのように日本人はまず来ないというような場所へ行って、現地人から珍しがられ歓迎されるほうが海外旅行の意義があるのだ、という意味のことを私は何度も力説した。そして開発途上国の原始的な風景を見て素晴らしいと感じる感覚こそ本当の国際感覚なのだと話したが、皆さんはよく理解されたようだった。旅先で日本人の他の団体に出くわすと妙にシラケるが、このリキンにはシラケさせるものはない。あるのは熱帯の碧空と潮騒と灼熱の大地だけだ。

全員は砂浜に面した大きなレストランで昼食をとった。海は波が荒く、砂の色が黒い。千葉県内房の海岸に似ている。中庭に集合して全員の記念写真を撮影する。猛烈に暑い。湿度が高いようだ。

このあと、一同水着姿になり、まず海へ入るも、波が高くて泳ぎに適さないので、プールで泳ぐ。塩水なので体が浮いてスピードが出ないが、久方ぶりの水泳なので思いきり泳いだ。私がプールを全速で泳いでみせると、サイドに並んだ皆さんから一斉に拍手が起こる。こうまで泳げるオヤジとは思わなかったらしく、合田みゆきさんなどは、びっくりしたと言っていた。これですっかり男をあげて気分がよくなった。ついでに風邪も治ったらしい。体調はすこぶるよい。

夕方は七時半頃に食堂へ行ったが、この頃から激しいスコールが始まった。夕食後、浜村君が発熱したという情報が入ったので同君の部屋へのぞきに行った。たいしたことはないと思ったが、念のために井口君の健康食品を飲ませるように頼んで同室の福田氏に渡しておいた。あとで聞いたところによると、ゲルマニウムやその他の薬品類が続々と寄せられたらしい。この部屋でも野口氏や合田さん、その他の方々がつききりで看病しておられた。

●パリンのメルカード

●リキンへ行く渡し船

●リキンの海岸。バンガローは脱衣場

●プールサイドにて

●レストランでの昼食。爽快な海風が吹く

●ホテル「リキン」の中庭。猛烈に暑い！

●プールでのさざめき

翌十九日、朝六時に集合して、船でふたたび入江を渡り、バスでグァテマラ市目指して疾走する。気温は二十数度程度か、快適で、沿道の原始的な熱帯林が素晴らしい。曇り空の下をインディオの女たちが頭上に大きな物を乗せて歩く。馬に乗った少年もいる。ただし服装は民族衣装ではなく、かなり国際化されている。

途中、ガソリンスタンドへ寄って給油中、数人がヤシの実を買ってきて、中の水を飲ませてくれた。うまい。

車中、若林昭氏（川口市）から商売のことでいろいろと話を聞く。氏は日本全国のデパートを渡り歩いて、店内の特設売場で珍しい道具を売る仕事をしている人で、その体験談は一聴にあたいする。宇宙哲学に熱心になると金が入らない。儲けようとすれば次元が低くなる。そのバランスをとるのがむつかしいという話だ。なるほどと思う。また、メキシコの間伸びのした雰囲気を日本の働きバチに認識させたいとも言う。そうだろう、日本の、特に東京の息づまるような気ぜわしさや窮屈さを海外から帰るたびに私は感じるのだ。

九時半頃にホテルへ帰り、就寝した。

インディオの町アンティグア

明くる十一日、今日はグァテマラ滞在最後の日で、古い町アンティグア行きだ。チチカステナンゴに行く予定だったのを、事情によりこちらに変更したのである。一五四三年にスペイン人によって創設された町で、一七〇〇年頃にはメキシコ市、リマに次ぐ中南米三番目の都市として繁栄したが、一七七三年の大地震で廃墟と化した。以来、中米のポンペイとして知られるに至ったのである。現在のアンティグアは元の町とは違うのだ。

十一時にバスで出発。雨がやんだ。浜村君は大事をとってホテルで寝ることになった。加藤登志子さん（東京）も腹具合がわるいので残るという。そこでまたも野口氏と小島氏がホテルに残って、浜村、大桑の両君を看病することになった。その高貴な精神に私は讃辞の言葉を知らないほどである。

十二時半頃バスはアンティグアに着いた。まずメルセー寺院へ行く。バロック様式の教会建築で名高い。次にインディオのメルカードへ行く。民芸品や土産

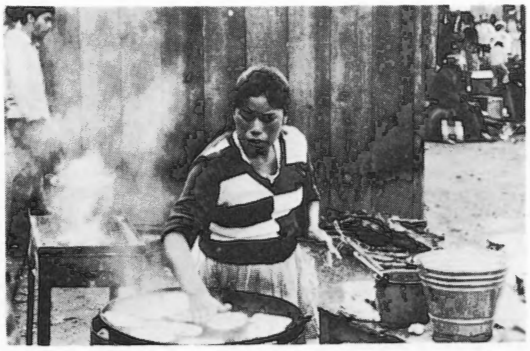
物、日用雑貨、食料などを売る小さな店が目白押しに並び、にぎやかだ。日本人を珍しがるが、ここのインディオたちは金をほしがらないし、押し売りもしない。非常に素朴で、カメラを向けると例によって顔を隠す。きわめて親日的で、顔を合わせると人なつこく微笑する。

広場で中年の女がトルティーリャを揚げている。女の子がトウモロコシの粉を練ったものを両手でパタパタと押してセンベイ状にしたやつを、油の入った大きなナベに入れて揚げてから野菜をのせて売る。元木氏が一枚買ってくださったので試食すると、結構おいしい。女は煮えたぎる油の中に手を突っ込んで平気でひっくり返す。手の皮が鉄みたいになっているのだろう。

別な一隅で、三十歳ぐらいのインディオの男が立ち、その横に乳飲児を抱いた妻君らしい女が地面に座り込んでいる。十歳ぐらいの少年もいる。一家族でわずかな果物を売っているのだ。これは写真の素晴らしい被写体である(下の写真)。私は数メートル離れた正面からRB67をのぞき込んで撮りまくったが男の冷静な眼付きを見て中止した。彼の生活の苦闘は我々のそれと異なるものではあるまい。私がつまらぬ文章を書いて、わずかな原稿料が来るのを一日千秋の思いで待つのと同様に、彼も十センターボ(約二十円)の果物一個が売れるのを心待ちしているのだろう。

感傷と同情の波が激しく逆巻いて、私はシャッターを切るのをやめ、立ち上がってポケットから一ケツァル札を引っ張り出して男に渡したら、微笑して受け取った。

●アンティグアのメルカード(市場)



●煮えたぎる油の中に手を突っ込む女

被写体の宝庫

このメルカードはどこを見ても被写体の宝庫である。グァテマラ全体がそうだといえるだろう。だが、わずか二十本のコダカラー120フィルムと、二十五本の36枚撮りコダクロームではどうにもならない。無茶苦茶に写してはいけない、大切に、大切にと、わが身に言い聞かせながら、そのあと市内のホテル『ポサーダ』の食堂へ全員が入る。

木造の古めかしいスペイン風の建築で、異国情緒満点だ。ウェイターやウエイトレスは民族衣装を着ており、きわめて親切で、非常に親日的である。中庭のテラスでは十人ほどの楽団がマリンバの演奏をやっている。グァテマラはマリンバの本場なのだろうか。

そのあと一同は市の中央広場へ行った。ここも典型的なスペイン風レイアウトによって建設された町で、中央広場の南側に総督の宮殿と呼ばれる石造の大きな建物があり、右方にはカテドラルがある。ここを中心として町全体が整然とゴバン目の通路で区切られているのである。広場をへだてて総督の宮殿の真向いの北側正面には市庁の堂々たる建物がそびえている。

この建物の基部に、赤いドレスを着た美しいメスティーソ(混血)の娘と、恋人らしい若い男が座って談笑している姿が眼についた。白亜の壁をバックにして素晴らしい光景だ。よし、やったるで!私はそろそろと近寄って67でシャッターを切った。上からのぞき込む一眼レフだから案外に気づかれない。もっと接近しようと歩み寄ってピントグラスをのぞいたら、二人が気づいて、消え失せたいという風情で手で顔を隠し、恥ずかしそうに大声で笑い出した。なんという初々しさだろう。こんな純情な若い人たちを見るのは、ポーランドのワルシャワとこだけである。遠くから友人らしい男たちが奇声を発して二人をひやかす。

●カメラを向けられて顔をかくす

どうやらここは中米最後の楽園らしい。撮影されて怒り出すひねくれた文明人よりも、カメラを向けられて羞恥心を起こす彼らのほうが、はるかに純粋であろう。

私はぶらぶらと歩いてカテドラルのテラスを散策した。この通廊にもインディオたちが座り込んで品物を売っている。あざやかな民族衣装を着た五〜六歳の女の子が二人、座って果物を売っている。カメラを向けるとまたも恥ずかしがって二人が笑いながら顔を隠す。一瞬手をはなしたすきに撮影し、二人に一ケツァルを渡すと、嬉しそうに笑う。通廊を南の方へ少し歩くと、中年のインディオが私の67カメラを見てヘラヘラと笑いながら近寄った。カメラという文明の利器を見るのが楽しくてしようがないという顔付きだ。ピントグラスをのぞかせてやると大喜びする。子供たちも寄ってきてのぞき込む。のぞき料として「シンクェンタ！（五十センターボ）」と冗談に言うと、男は笑う。そばにいた元木氏も大笑いする。

「やったるで！」

エモノを狙う本人も、だれかに写されていることに気づかない

●気づかぬ二人

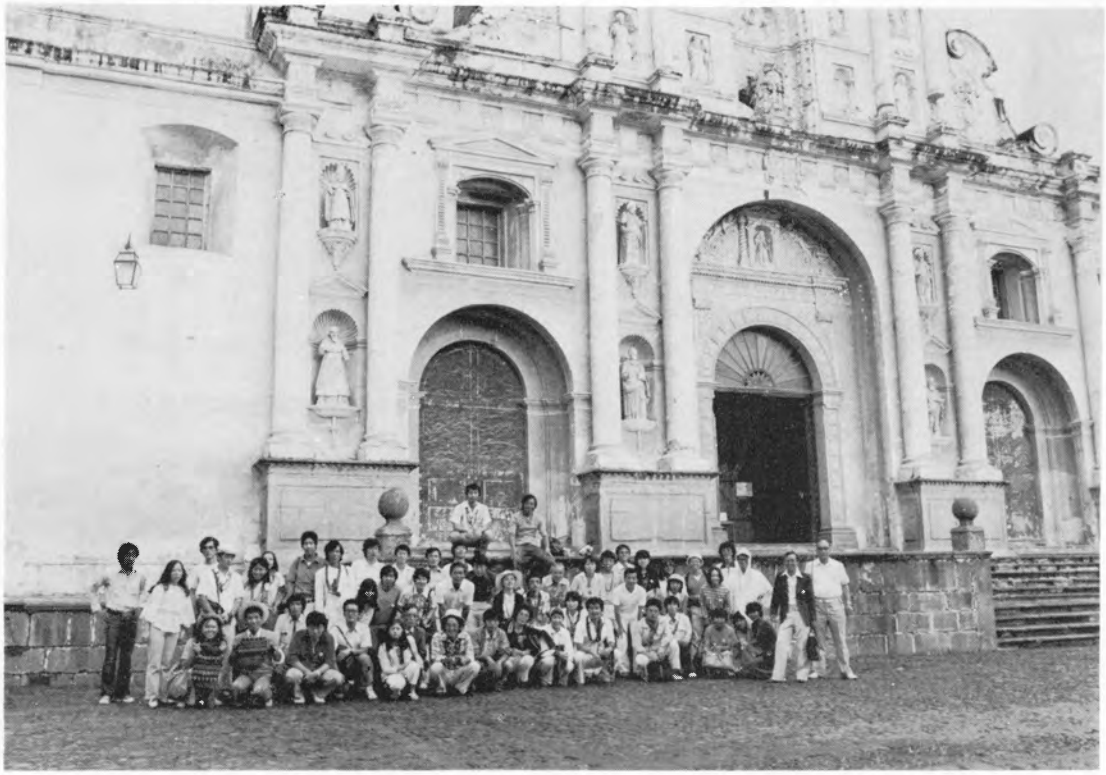
このあと一同はバスでコーヒー園を見に行ったが、アンティグアでの全員記念撮影を忘れていたのを思い出し、折から降り出した小雨の中をまた広場へ引き返して、市庁舎をバックに撮影した。あとで知ったのだが、この広場には一人の日本人青年が世界放浪の旅で来ていたとのことだった。足立亘宏君（新潟市）と同郷の人で中学と高校の後輩らしく、話がはずんだようだ。

夕方、七時半頃に全員はグァテマラ市のホテルへ帰った。グァテマラ最後の夜だというので、十一名で外出し、しばらくぶらついて、ピザの専門店へ入った。

井口君は将来、中南米への勇飛にそなえてスペイン語を勉強しているというので、花を持たせることにして、ここでのスペイン語の交渉は同君にまかせた。片手に持ったスペイン語の参考書の例文にチラチラと眼をやりながらしゃべった同君の勇気を讃えたい。

三種類の大きさの皿の最大のものを三皿とビール、ワイン等を散々飲み食いして、全部で四十七ケツァル、一人平均四

●アンティグア市庁舎前



ドル少々（八百円余）だからこれは安い。ここで大いに楽しく談笑し、十一時に店を出てホテルへ帰り、今度は三階のディスコバーへ行き、大音響の音楽と共に若い人たちが踊る。こういう場所は私には不向きだが、最後の夜だからまあいいだろうと我慢しながら皆さんとつきあい、越崎裕子さん、菅原恵子さん（千葉県）、柴田文子さんらと社交ダンスをやり、十二時頃自室へ帰って就寝した。

こうして楽しい中米の旅を終えた一行は翌二十日の朝グァテマラ空港を飛びたち、午後ロサンジェルスに着いて再度市内を見学後、夜は日本料理店の『川福』で最後のサヨナラパーティーを行い、ここで大騒ぎを演じて徹底的にアメリカの夜を楽しみ、翌二十一日に二機の飛行機に分乗して日本へ向かったのである。そして二十二日に全員無事に成田空港へ帰着したのであった。（終）

× × ×

付記（一）

十二日間（第一グループは十三日間）の強行軍だったが、一人の軽度な病人が出た以外は全く支障なしに素晴らしい旅を終えて全員無事帰国することができた。これも参加者各位のご協力のたまものので、衷心より感謝する次第である。団長たる私の数々の不手際にもかかわらず不平不満を訴える人は皆無であり、むしろ皆さん方は心温まる雰囲気をかもし出すように意識的に努力しておられることを感じた。地球人としては最優秀な人々であろう。特に大桑君の発病に対して小島氏と野口氏が示された奉仕精神と献身的な世話については、再度、心から感謝したい。宇宙哲学を実地に実践されたお二人の高貴な態度は、私たちのこよなき鑑（かがみ）となった。第二次説明会でお話しした食事のマナーも皆さん方は立派に守っておられた。

海外旅行は素晴らしい。未知の国を訪れて異人種や文化に接することは人間を大きく開眼させ成長させる。

まず笈（おい）を背負い故郷を出でて異郷を歩き、次に故国を出て異国を放浪し、やがて地球を出でて異星へ転生する。更に太陽系から別な太陽系へ、銀河系から銀河系へと限りない転生により宇宙を流転して魂の進化を図りたいものだ。

海外へ出て痛感するのはどこへ行っても人間はみな同じだという事実である。違うのは皮膚の色と言語ぐらいのもので生活様式や食物に大差はない。考え方にもさほどの相違はないだろう。そして万人が平和を願い、幸福な生活を望んでいるのだ。それは異国で多種類の民族の友好的態度に接してこそ実感するのである。だから旅行は有益であり、宇宙的意義を帯びているのだ。

「旅行に出かけてよかった！」と参加者の皆さんが眼を輝かせて異口同音に話されるのを聞くと、企画者として望外の喜びを感じる。来年も日本GAP企画第二回として『アメリカ南米宇宙考古学の旅』を計画しているので、多数のご参加を期待したい（本号別掲広告を参照）。

●ロサンジェルス発祥地（オルベラ街）で最後の記念撮影

当方企画の海外旅行は毎回主宰者久保田八郎が団長となり、提携旅行会社ワールドセブントラベルのベテラン田中氏が添乗員として親身の世話をするので安心して同行されたい。一般の海外旅行とは次元の違う素敵な旅が実現する筈である。

なお都合により、この旅行記中では少数の黒白写真しか掲載できなかったが、色彩あざやかなカラースライドを約四百点、十一月二十三日の日本GAP総会で公開するので、多数のご出席をお待ちする次第である。

＜本文記事中に掲載した写真の内、六頁のタイトルバック写真、全員の集合写真類（セルフタイマー使用）と若干は編者撮影、その他は山木益巳、斎藤一弥、子安達雄、鈴木一宏、仲間秀樹、熊倉清貴、野口敏治の各氏提供＞

付記（二）

作家の紀行文にありがちなキザな文体は避ける方がよいという某氏のご忠告を拝承して、この記事はなるべく平易な文章で淡々と表現するように推敲（すいこう）を重ねて書き綴った。拙文で恐縮だが、紙数の都合もあり意を充分に尽くせなくて遺憾な点もある。また筆者の一方的な見解とみなされても具合が悪いので、同行の十数名の方々に補遺の意味で感想文のご寄稿をお願いし、公平を期するとともに紙面の充実を図ることにした。

付記（三）

語学については同行の皆さん方もかなり勉強しておられたようで意を強くした次第である。簡単な日常英会話は楽にできるらしく、私などが通訳で出しゃばる必要はなかった。

ただしメキシコとグアテマラはスペイン語国であり、英語はほとんど通用しないのだが、これはベテランの金子氏と山口氏に多大のお世話になった。しかしある程度スペイン語を学習してこられた方もかなりあって、案じたほどではなかった。外国語の習得に知能は直接の関係はなく、とにかく〝慣れ〟であるから今後にそなえて大いに努力したいと思う。

回想のアメリカ中米旅行

——思い出を語る人々——

あまりにも素晴らしかった！

菊地喜之（千葉県）

今回のアメリカ中米宇宙考古学の旅に参加させていただき、大変ありがとうございました。この旅があまりにも素晴らしいものだっただけに、旅行後はもう何も手につかないといえるぐらいボーッとしています。

旅行に参加しようと思い立ってから出発する日までの期間の心わくわくとしていた日々。アメリカ、ビスタのGAP本部訪問。このときは私も涙を流して喜びたい気持でした。何も言うことができないほど感激しました。もう日本へは帰りたくないという気持とここへ残りたい気持が同時に出てきました。デザートセンターでは自分はゴミほどにしか感じなかったこと、また、そこいらに溶け込めそうになったこと、久保田先生がここで話されたようなことが昔行われていたという思いもよらぬことが聞けたこと。

メキシコのテオティワカン遺跡で見た、なんとなく懐かしい風景。グァテマラでは入国したときから起きたいやな気持、早くこの国を出たかったこと。ティカールへ行くのに四時間も待たされたことなど、今でも鮮明に思い出されます。

これほど素晴らしい旅行は今までにないと断言できます。とにかく言葉ではすべてを言い尽くすことができません。それと、この旅行があまりにも素晴らしかったためか、旅行後は非常に悲しくなる時があります。これではいけないと思いながらも、どうしようもない自分の感情をコントロールできないことに少々腹が立ってくるほどです。

次回の旅行は南米まで行くとのこと、ぜひ参加したいと思っています。そのときはまた宜しくお願いします。

インディアンの井戸に感動

坂野美津子（函館市）

今回初めての海外旅行でしたが、幸いあまり暑くなくて、しのぎやすい天候であったことと、GAPの会員間のかもし出すなごやかな雰囲気で、とても楽しく愉快な旅を送ることが出来ましたことを心から御礼申し上げます。その上、第一グループは一日分余計にアメリカの土を踏むことが出来て、とてもツイていました。一番印象の深かった処はやはりデザートセンターでした。

バスから降りた時はそうでもなかったのですが、記念のケルンのところからずっと下ってオーソンの足跡のあたりで、久保田先生が、かつてこの辺に宇宙哲学を探求していた偉大なインディアンの部落があった等の説明をされた時、ふと小高い丘の井戸を見上げましたら、自然に涙がわき出て仕方がありませんでした。

二千年前に私がインディアンの少女であの井戸から水を汲んで偉大な師のお話をうかがっていたというようなフィーリングが起こってくるのです。単にアダムスキー氏がオーソン氏とコンタクトした場所だというのではなく、過去との関係での感動の涙だったと思います。このような体験はあまりないことですが、とても清々しくて、素晴らしい体験でした。これだけでもうこの旅行に来た甲斐があったと思い、幸せな気持でした。

去年この企画を拝見しました時、行かなければならない旅だと思ったのも、このデザートセンターの為だったように思われてなりません。それほどまでに自分の人生のなかで何にもまさる貴重な体験でした。

そしてその時、かえって円盤が出ない事がよかったと考えました。もし出現したならば好奇心で円盤を見ることに目がうばわれて、フィーリングで深く把握することが出来なかったと思われるからです。

旅行のすべてが順調で、見たかったものはすべて見れましたし、テオティワカンにもティカールのピラミッドの頂上にも登れて満足しました。本当にすべてが素晴らしく、リキンのプールで少し泳いだ時、青空を眺めながら何とも言えぬ幸福感で一杯でした。このような素敵な旅がまた出来るように、イメージを描きつつ、あと三年位したら実現させたいものと思います。

イングリッド夫人に助けられる

岡本静江（大阪市）

旅行中はいろいろお世話に相成り有難うございました。成田空港では（帰途）御挨拶もいたしませず失礼いたしました。おゆるし下さいませ。

今年は九日夜に風邪をひきまして旅行中ずっと持って歩きまして、他の皆様に御迷惑をかけ、申訳なく思っています。でも皆様とてもよい方ばかりで、ちっとも嫌がらず、お薬を下さったり席をゆずって下さったり、親切にしていただきました。本当にやさしい気持の良い人達でした。感謝いたしております。

大阪へ戻りまして早や七日になり、やっと頭の中の酸欠がもどりまして普段の状態になりました。今度の旅行は大勢なのと、いろんな事で先生はじめ御病人のお世話をなさった方々、また田中さんの御苦労など、大変だったとお察し申し上げております。

またデザートセンターでは身体の状態が最悪で皆様について行けず、ミセス（注＝イングリッド夫人）に手を支えて頂き、本当に有難うございました。心の中で感謝したら「心配しなくてよい」と返事が戻ってきたり、またここで止まって二、三分休めば、また登れると考えると、私の心が（テレパシーで）分かって「それじゃ少し休んで」と先に行かれ、皆様頂上におられるのに私は——と少しはがゆく思うとミセスの弟様（注＝ホル

スト氏）が片足の悪いのに「大丈夫か」と戻って来て下さったり、本当にあのときは――いいえ今も幸せの感情を胸一杯に持ちつづけております。どうぞ御便りの節にこの旨よろしく御伝え願えましたら幸甚に存じます。

昨年の旅行（注＝ヨーロッパ・エジプト旅行）の際も種々未知と感激によろこびを、また今年も人々の心の美しさに身も心も洗われる様なすがすがしさを味わいました。良い旅でございました。本当に有難うございました。また来年もその次も健康で参加させて頂けるよう祈りながら先ずは御礼まで。有難うございました。（編注＝岡本さんはGAP会員ではありませんが、GAP会員諸兄姉の人徳にひかれて参加されました）

忘れじのティカール

穴原美智子（神奈川県）

八月十六日、メキシコからグァテマラへ。木々の様子だろうか、光のせいだろうか、私の記憶にある何処の風景にも外観は似ていないが、どこかしら日本と似ている。それがグァテマラに降り立った際の第一印象だった。透明な風の中をバスに乗り、グァテマラシティへ。途中考古学民族博物館を見学、第二グループのバスの到着を待って白亜の建物の前で休む。日ざしが眩しい。女学生が数名見学に来ていたらしい。素朴で美しく、心引かれる。この後中央公園内で記念撮影を行った時も人々が私達を物珍しそうに見物していたが、ロスで味わった様な冷たさは全く感じず、この点グァテマラ、メキシコの居心地の良さは忘れられない。

翌朝は五時半起床。早朝の市街地を抜けて飛行場へ。朝の大気はわずかに湿気を孕み、ひんやりと心地良い。田中氏のお話では〝余程の事がないと定刻に飛ばない〟飛行機が、幸いさほど遅れず出発する。乗ってみて驚いた。私の座席ベルトが片方ない。しかも離陸直前に後部のドアが開いており、仲間の一人が乗務員を呼びに行くという一幕もあった。機はさりげなく離陸し、やがて夢に見た風景を眼下に飛行を続ける。雲の切れ間に、その下が既に密林の渺茫とした広がりだと知ると、おとなしく座っていられず、隣席のI氏に迷惑をかけてしまった。密林の彼方に突然海が開ける。海面に光が反射してキラキラと輝いている。一時間半の飛行の後、機は小さな平原に着陸。思ったより観光客が多い。〝ティカール〟はマヤ最大の都市で五つの神殿を中心に数多くの神殿が建ち並ぶ壮大な都市〟ということで神殿と神殿の間はバスで移動する。そのバスはガラスが半分なく、排気ガスがすごく、出発毎の数分間まるで実験用ハツカネズミの如き心境だった。見学の途中で動かなくなり、仲間の男の人達が後から押してやっと動き出すという楽しい場面もあった。ガタガタ道を縫うようにバスは走る。開いた窓から木々の枝が車内に飛び込んでくる。国の公園になっているので、神殿の周囲は美しく、芝生が一面に生えている。発掘されぬままの神殿は小高い山となって既に幾本もの大木がしっかり根をおろし、中天に枝葉を繁らせている。かつて人々がこの地で生き、十世紀のある時この地を棄てる。人生、時の流れといった言葉が脳裡をかすめる。

二時間の休みを利用して大神殿に登る。急勾配でしかも崩れかけた階段だ。階段の中央に鎖がついていてひたすらそれに頼って登っていく。やっと頂上にたどりつく。思わず目が眩む。一生この光景は忘れないだろう。前方には対をなす神殿、その奥にはさらに二対の神殿が密林の中に立ち並んでいる。頂上の右手に廻って唖然とした。そこにあった光景は、ただ果てのない樹海。そして一すじの滑走路が地を分かっている。一瞬ここから落ちても悔いはないなと思う。あまりの鮮烈な光景に下に降りる気になれない。しかしとうとう鎖を伝わって一歩一歩降り始める。この後第四神殿、民族館を見学して昼食後なごりおしいティカールをあとに、再び市へと飛ぶ。

しかし今回の旅で感じたことは、やはり写真で見るのとは違うということだ。実際に自分で体験した感動が素晴らしい。多くの人から暖かい思いやりも受け取ることができた。確かに旅が終われば全ては思い出となるであろうそうした人々とのふれあいをいとおしんだという満足感。今も目を閉じると、ブーゲンビリアの紫、ハイビスカスの赤、原色の美しい織の衣裳を身にまとった女たちの姿と共に、様々な光景があざやかに甦る。そしていつかまたグァテマラへ帰りたいという思いが心から離れない。日本に住めなくなったら本当にグァテマラへ移住したいと望むのかもしれない。

すぐれた人々に接することが大切

近藤富子（埼玉県）

思い出すのは、砂上に限りなく広がっていた真っ青な空と、米国GAP本部のすばらしい方々の微笑の数々、しぐさのひとつ、ひとつ……。精神的に発達している方々の側にいる事がどれほどすばらしい事なのか、言葉ではなく肌で感じる事ができ、とてもうれしく、米国に思いをはせるたびに胸が震えてきます。

〝あの方達のようにやがてはなりたい〟机の上に置いてあるビスタの方々の写真をみつめてはそう願ってきました。その願いはビスタを訪れた後も変わる事なく、むしろ更にそれは大きくなっています。人の態度を見てあれこれと批判する事よりも、人を見た時自分がどのような心で接しているかが大切なのであって問題とすべきは常に、人が自分にどのような接し方をしたかではなく本人の相手に対する心の持ち方、心がどのような状態にあるかという事ではないかとこの旅行を終えて強く感じさせられました。ビスタの方々の何者をもシャット・アウトせず心を開き、温かく、常に微笑をたたえた受容的な態度に自分の今迄の汚れた心さえも包み込んでくれそうで頭が下がりました。本を読んで頭の中だけですばらしい人々の存在を理解する事よりも実際にそれにふさわしい人々をまのあたりに見る事は私にとってどれほど自分自身の向上につながるか計りしれない思いです。

自分のいたらなさゆえに反省、反省の繰り返しの日々の中でいつも変わりなく人を思いやる心を持ち続けている人々が身近にいる事は私にとって本当に救いです。そのような人々に自分も近づける可能性が緩慢ながらもやがては来るだろうからです。それにしても今回の旅行はいろいろな意味において勉強になり、良い体験をしたと感謝する次第です。

ツアーでいっしょだった人々のほとんどの人が個性的でとっても強烈な印象を受けました。本当に忘れがたい魅力ある人々です。本来私たちはどこにいても変に取り繕わずありのままの自分を出す事が自然だと思うのです。自然に自分を表現してそれがすばらしいものならば最高なのですけれど私の場合仲々そうはゆきません、嫌味な言葉や不愉快な態度をとってしまい自分自身に疲れます。

でも何処にいても何をしていても流れて行く時の中にいる限り自然と表現された自分がすばらしい人間となるよう一日一日、ひと時ひと時をみつめながらより高い段階を求めて歩むべきで想念観察とはそのようなことの為にあるのだと思いそれを心に留めて与えられた環境を精一杯楽しみたい。そうしてちょっとした言葉においても、ちょっとした表情(心情)においても相手に対して思いやりを持って接したいと、この旅行を終えて今迄よりも一層強く感じました。

感じたと云えば、語学(英語)のマスターは絶対に必要だという事です。久保田先生があれほど言っていた英語力を身につける大切さを痛感致しました。ビスタの方々に「もう少し近づきたい」「もう少し笑顔を見たい」などと思っても二、三の単語を知っている程度では(私においては)意志の疎通などありませんもの……。

私の今の段階では言葉で語り合いながら徐々に〝触れ合い〟を感じるのですから英語が話せないという事はとっても残念な事でした。目が合えば微笑をかわす。微笑をかわしたらもう少し近づいて二言三言を語り志を告げたい。そう思ってもそれができない悲しさ、自分の今迄の日々の甘さがうらめしく思われて遠くから彼らをみつめるだけが精一杯でした。

けれども単純がとりえのせいかデザートセンターのあの広大さにその悲しさは跡形もなく消えて私の心はあの雲よりも大きくふくらんだ——。

デザートセンターへ向う途中の道路際を見ながら「ああ、こんな所なら住んでみてもいいな」という思いがしました。目的地へ着いて山頂へ登り一望していると何かとても懐かしい感じが心の中に広がって行き、落ち着いた心なごむ雰囲気に満たされました。

四方にはてしなく続く大地には緑の小さな木々がポツポツと生え、小さな石はコロコロと私の足元で快い音を聞かせてくれる。遠くに連なる山々も緑と淡い茶色を映して無言で、両手を広げて迎えてくれているようで私の心はスッポリとこの山間におさまっている。

フッと上を見上げれば白い雲の浮かぶ青い空。数千年の昔に思いをはせ、しばらくの間私の回りの時が止まる。

〝自分がどうしても行きたいと思っている場所には必ず行きなさい！〟その言葉が何となく私の耳元で聞こえてくる。〝ああ、この事なんだな—。ここに来てよかった〟

自分の身体がその地に実際に触れるという事がなんとすばらしいことか！ 旅行を終えて帰宅した今でもあの時の感動とあの光景は深く私の心と身体に焼き付いています。

ビスタとデザートセンターは何度訪れても訪れただけのものを私たちに与えてくれるものと思います。

ステキな旅行を本当にありがとうございました。

最高の日々をすごした

仲間秀樹(福知山市)

今年の旅行に参加させて頂きまして、まことに有難うございました。私にとって、こんなに最高の毎日を皆さんと一緒できましたことに、非常な喜びを感じます。帰りにふと思ったのですが、自分がまったく疑惑、不安、心配というものを起こしていなかったことです。GAPの人々の中にいると、一般とは全然波動が違い、自分がまったく自然になってゆくように思います。

またGAP本部、パロマー・ガーデンズ、デザートセンターと、その訪問はアダムスキー問題に対する大きな再認識をいたしました。そして米GAP本部の立派な方々とお会いできましたことは、非常に意義深いものでした。

メキシコでは大好きなマリアッチのメキシコ民謡の演奏で生き返った感を受けグァテマラでは博物館に来ていた子供たちとの出会いがとても印象的で、親近感をおぼえました。

旅行がこれほど素晴らしいものになるとは——。少し予想より上回りました。毎年このような旅行に多くの方が参加されるとよいと思います。最後に、私たちの見えない所で久保田先生には大変な苦労があったと思います。どうも有難うございました。

GAPの皆さんの素晴らしさと大成功の日米合同夕食会

野口敏治(静岡市)

大変素晴らしい旅行をすることができました。六十名の大部隊が何のトラブルもなく無事に帰国でき、しかも大成功であったことは、久保田先生をはじめ田中さん、現地のガイドの皆さんのご苦労、ご配慮が並大抵でなかったとお察しします。いろいろと有難うございました。

今回の旅行であらためてGAPというグループの素晴らしさ、会員個人個人の素晴らしさ、特に先生が67号で書かれた「人間愛」の美しさというものを十二分に見させて頂きました。このような素晴らしい人々がいる限り日本はまだまだ大丈夫でしょう。

ビスタの米GAP本部を訪問し、その興奮も冷めやらぬまま、今夜は待ちに待った日米合同夕食会です。ビスタ市内のホテルに一度入って着替えて出てくる皆さんの晴れ着姿を見て、現地ガイドの古

谷さんは、これがさきほどのバスの中の人達ですかと細い目をめいっぱい丸くして皆さんの変身ぶりにびっくりしていました。全員そろってバスで会場のスージーカントリーキッチンレストランに行きました。ここは一昨年の旅行でバスが故障したときちょっと立寄った所で東京出身の日本人の方が経営されています。

会場内はテーブルが三列に整然と配置されその中央のテーブルの前の方に米GAPの皆さん、そしてこの方々を囲むように我々も席につきました。はじめに添乗員の田中さんの司会でパーティーの開催が伝えられ、全員起立し、各自グラスを片手に、久保田先生の音頭で、GAPの発展と旅行の大成功を祝して「カンパイ！」と場内が割れんばかりの大きな声で唱和しました。つづいてステックリング氏から歓迎のご挨拶をいただき、そのなかで宇宙的な大変有意義な話があり、それは生命の科学の講義を聞いているかのようで、皆さんその内容に聞き入っていました。これは米GAP本部臨時例会ともいえるようなものでした。次に久保田先生が英語で挨拶されこれを田中さんが通訳されました。そして久保田先生から米本部側の皆さん一人一人の紹介がありました。一昨年来日したステックリング夫妻、エリシア嬢そしてホワイティング氏、マーサさん、ステックリング夫人の弟さん、ホワイティング氏の甥のセルチャウ氏とその夫人（大阪出身のGAP会員旧姓馬場さん）と、そして大変珍しいお客様が一人、かつてアダムスキー氏のお姉さんで現在その生まれ変わった方。この方はアダムスキー氏自身が見つけ出されたそうです。このような素晴らしい方々にご出席いただきました。

一段落したところで、浜村さん、佐藤さんのリードで日本の歌を本部の皆さんに聞いていただくことになり「おぼろ月夜」、「四季の歌」など次々に歌い、また正面に出て行って美声を披露される方もあり、数多くの歌が出たり皆さんの手拍子もあり、夕食会は最高に盛り上がり、米本部側を代表して旧姓馬場さんの素晴らしい歌があり全員陶酔してしまいました。また前に出てエリシア嬢と並んで記念写真を撮る方や、本部の皆さんと思い思いに並んで写真を撮るなど、なごやかな日米の交流がもたれました。

予定の時間も近くなり、久保田先生の閉会の挨拶、つづいてステックリング氏が「皆さん方、大変素晴らしい方々なので、毎日私達を訪問してくださることをお願いしたいくらいです」と話され、最後に久保田先生が大型カメラで全員の記念写真を撮影され、名残惜しくも日米合同夕食会は大盛況のうちに、終了しました。

この日、壁をへだてた隣の部屋で何人かのスペースブラザーズの方々が食事をしながら、「となりは楽しくやっとるわい」と、我々を見守っていたかもしれませんね。

ステックリング夫妻を始め米GAP本部の皆さん方とともに食事をしながら親しく一夕をすごすことができましたことは我々にとって最高の喜びであり、また名誉でもあります。この夜の出来事は我々の記憶から永遠に消え去ることはないでしょう。

米本部の皆さん方を拝見していますと楽しく食事や談話をしている時でも、いつも自分自身を見つめているようで常に冷静ですが、それでいていつ見ても楽しい雰囲気で、たいへん愉快にやっているようです。特にホワイティング氏などは食事中でも何度かジーと何かを透視していたようでした。

とかく私などはこのような席では心が浮かれがちで、なかなか自分自身を客観視することはできませんが、これからはいつでも、どこでも、自分自身の内部をみつめることが出来るような人間になるように努力すべきであると強く感じた次第です。

全身が浄化されるような フィーリング

山木益巳（東京）

ビスタのGAP本部を訪れて、理事長のアリス・ウェルズさんをはじめとする本部の方々にお会いできた事は、私にとってこの上ない喜びでした。純白の室内には高貴な波動がみなぎり、その清浄な雰囲気には全身が浄化されてゆくフィーリングさえ感じるのでした。

霧に包まれたパロマー・ガーデンズ跡やパロマー天文台の見学をも併せて果たしたこの日は、アダムスキー師に対する確信を一段と深めたのだった。

またホテルからは自分の過去世を想い起こさせるアメリカ開拓時代の絵もみつかり、ただただ感激の一日でした。

私にとっては毎日が最良最善の日でありますが、この日は私の生涯で最も心に残るものとなるでしょう。（十二日）

グァテマラのアンティグアの街はまるでスペイン風だ。昼食をとったレストランは古びた素晴らしい雰囲気のスペイン風の建物だ。そのスペイン風のレストランで過ぎ去った昔をおもう。中米は長い間、スペインの植民地だったのだ。情け容赦なく中米を侵略していったのだ。だから、自由と平和の為に戦ったスペインがまっさきにナチの侵略を受け、第二次大戦に巻き込まれてしまったのは、中米を侵略したスペインのカルマだったのかもしれない。

スペインの田舎町さながらのアンティグアの石畳の道をひとりで歩いているとどうしようもないほどのノスタルジックな感情がこみあげてくる。インディオの街アンティグア。僕はアンティグアを一生忘れないだろう。（十九日）

旅行中はほとんどブルックナーとマーラーの交響曲しか聴かなかった。テオティワカンではテープレコーダーでブルックナーの七番を鳴らしながらピラミッドの頂上に立ったが、この時はこれ以上ふさわしい曲はなかった。霧に包まれたパロマー山や、太陽が燦然と輝くティカールでは、マーラーの三番が深遠な宇宙をうたいあげた。

また会員の方々と哲学問題について語り合った事も大きな喜びでした。リキンの夜「僕からアダムスキー哲学を取ったら、あとは何も残らない」としみじみ語った仲間氏の言葉に、それぞれの胸中に

去来したものは一体何だったのでしょうか？

私などはるかに俗物にすぎませんが、今回の旅行で会員の方々と接する事ができて、本当に多くの事を学びました。

最後になりましたが旅行中お世話になりましたワールドセブントラベルの田中さんと久保田先生に、紙上を借りてお礼を申し上げます。

マヤ文明と宇宙哲学を思う

渡辺　護（東京）

果てしなく続く千古のジャングルの中を一本の白い道があたかも定規で線を引いたように遙か彼方まで延びている。目を凝らすと雲間に見え隠れしながら一筋の川が蛇行しているのが見える。これがパレンケやピエドラ・ネグラスの遺跡で知られるウスマシンタ河の支流であろうか。……グアテマラ市からティカールへ向かう飛行機から眺めたユカタンの地の光景である。

この度の「アメリカ中米宇宙考古学の旅」には並々ならぬ関心と期待を抱いて参加した。ジョージ・アダムスキーが金星人オーソンと最初にコンタクトしたと云われる記念すべきカリフォルニアのデザートセンター、古代史の謎の一つと云われるマヤ文明の遺跡メキシコのテオティイワカンとグァテマラのティカール、どれ一つとって見ても歴史上大きな意味を持つ場所であるように思われ期待していたものである。特にティカールの遺跡についてはマヤ文明古典期のかなり古いものであり、復元による影響が少なく、未発掘の部分が多いとされている。

私が古代文明、特に巨石文化に興味を持ち始めたのは中学生の頃であった。ムー大陸に関する単行本を読んだのがそもそものきっかけであった。その後ジェームズ・チャーチワードの一大研究を始めとする数多くの書籍類に接したが、その結果、世界各地に散在する古代遺跡には何か共通する基盤があると考えるようになり、ムー大陸やアトランチス大陸の実在性を確信するに至ったのであります。

このような状況の元でアダムスキー哲学に触れ、共鳴し、その実践に努力してゆく中で、偶然にもこれら古代文明に関する数多くの情報が得られるようになった。その結果、最近ではムーやアトランチス時代における古代の哲学思想は、アダムスキーの説く「宇宙哲学」の中に多くの共通点があることを見出した。またより壮大なスペースプログラムまでもが綿々と続く歴史の中で複雑に絡み合っているようにも思われて来たのであります。更には、偉大な文明を築いたと云われるムーやアトランチスが何故海底に没し去らねばならなかったのか、と云うことを考えて見ると必然的に「宇宙哲学」に内在する本質的かつ重要な問題に辿りつくのであります。

チャーチワードによれば、人類発祥の地はムー大陸であって「母なる国」と呼ばれ、ここから世界各地に進出して行ったとしており、マヤ文明が開花した中米ユカタンの地域もムーの植民地であったと云われている。そして、かつてこのユカタンの地が人類史上極めて重要な聖域の一つであったとする考え方を受入れるならば尚更その場に立ち、自らの手で触れ感じ取って見たいと願うのは至極当然の成り行きであり、このような背景を持って今度の旅行に望んだ訳であります。

さて、前置きが少々長くなってしまいましたが次に旅行中印象に残った事柄について述べて見たいと思います。

まずカリフォルニア州ビスタにおけるGAP本部の訪問でありますが、ここではアリス・ウェルズ夫人、ステックリング夫妻、ホワイティング氏を始め、その他の方々の慈愛に満ちた想念に触れることが出来、加えて生前のアダムスキー氏の写真の飾られた部屋に入った時は正に胸の詰まる思いでした。緑の中の清楚な建物が瞼に焼きついています。

デザートセンターでは、前日砂漠に大雨が降った程の異常気象の為か、当初予想していた暑さは感じられず、時々陽の射す程度で砂漠としてはかなり凌ぎ易かったものと思われました。

「藪の中に蛇やサソリがいる」と驚かされたがコンタクト地点が近づくにつれてどこかで見たような光景が展開した。コンタクト地点付近の小高い丘の上にあるステックリング氏の建てた記念碑の所でコンタクトセレモニーが行われ気分を盛り上げた。コンタクト地点に立った時は「夢にまで見た場所にとうとうやって来た」と云う思いでしばし感慨に耽ったものでした。記念に石を拾いカバンに詰め込んだ。

この場所は以前多くのインディアンが住み「宇宙哲学」について研鑽していた所だと云う。そして、ここで久保田先生がくり返し述べられた『ここは重大極まりない場所で、単にアダムスキーがコンタクトしたと云うことだけでなく、ある時期（約2000年前）とてつもなく重大な事があった場所である、しかしそれについては今は云えない』と云う言葉が頭の隅に引っ掛かって離れない。

次の訪問地メキシコのテオティワカンの遺跡は案内書通りのスケールの大きなものであった。月のピラミッドと太陽のピラミッドに登る事が出来、ここでの目的を一応果たすことが出来た。

ケッアルコアトルの石の彫刻や色彩を施した絵画など目を見張るものが多かったが、反面外側のかなりな部分が復元工事によるもので元の形をとどめない部分もあり、石材なども相当量別な場所から運んで来たとの事で、その為か新鮮な驚きやインスピレーションは生じなかった。これとは対照的にグァテマラのティカールの遺跡は実に素晴らしく、見ごたえのあるものであった。

まず遺跡自体が非常に古さを感じさせる事と復元による手の加わっていない未発掘の部分が随所に見られた事である。中でもグランプラサにある1号、2号神殿は人々を威圧し、あちこちから感嘆の溜息がもれた程であった。

説明の詳細は他に譲るが、1号神殿の上からの眺望は素晴らしく、眼下の遺跡群はもとより、遠方の3号、4号、5号神殿の眺めも欲しいままであった。密生したジャングルの上に突き出たこれらの

神殿は一種異様な雰囲気をかもし出している。ティカールの遺跡は私の予想を遙かに越えた壮大なものであった。尚、後になって判明した事であるが、1号神殿内部の上方にある木製の梁に黒ずんだかなり古い板が無雑作に打ちつけてあり、これに古代の絵文字が彫刻されており興味を引いた。

これらの遺跡で感じた事は、テオティワカンを含めて、マヤのピラミッドと呼ばれているものの背景にある思想および建設方法や材料等については、エジプトのそれとは本質的に異なっているように思われた事である。建設された年代が双方かなりの隔たりがあることによるものであろうが、エジプトのピラミッドはムー・アトランチス時代の科学および哲学思想を後世に残すと云った記念碑的なものに加えて、精神的な意味での修業の場としての要素があると推定されている。これに対してマヤの場合はピラミッドと云うよりも神殿の土台と云った感じで宗教的な色彩が強く、遠い昔に沈んだムー帝国の流れを汲む民族あるいは少数の集団が今は無きムーへの追慕とムーより受け継がれて来た幾許かの技術力とによって神官として土着民族を指導し威信を示す為に建設された、と考えた方がより理解し易いように思われた。

とりとめのない話になってしまいましたが今度の旅行で特に強い印象として心に残った事柄について述べて見ました。

旅行中は普段あまり話が出来なかった人達とも打ち解けた話が出来たし、先輩の方々からも有益な話を聞く事が出来、実り多い旅であったと思っております。

おわりに、「アメリカ中米宇宙考古学の旅」の企画と実現に奔走され、旅行中は団長としての重責を担われた久保田先生、実行に際して細かな所まで面倒をおかけしたワールドセブントラベル社の田中氏、また旅先でいつも話し相手になって頂いた大坪さんには心からお礼申し上げます。

精神的向上を計るべく今後もアダムスキー哲学の理解と実践に努力したいと願っています。

偉大なファミリーに会えて

合田みゆき（東京）

今回は、皆様と共に旅行に参加させて頂き、大変有がとうございました。

ア氏の著書に触れました時から、パロマー山や、デザートセンター、ビスタのGAP本部へ一度は訪問致したいと思っておりました。パロマー天文台の見学も天体写真が好きだった私には楽しみの一つでした。天体写真集もいつか宇宙を旅行してみたいと言う夢を掻き立ててくれました。

パロマー・ガーデンズのレストランの跡も実際に行ってみますと昔と変わらないカシの木や物置小屋などがあり、それらに触れて来る事が出来て嬉しく思います。GAP本部では、アリス・ウェルズ夫人や、マーサさんの御元気な姿に接する事が出来、本当に行って良かったと思いました。ア氏の遺品やオーソン氏の肖像画を見せて頂き、いつかア氏の生まれ変わられた姿に御会い出来ればと思いました。

夕食会の時も高貴なすばらしい方々と御一緒出来、本当に有がとうございました。皆様の中で食事を共に出来まして楽しく過ごさせて頂きました。

GAP本部側から出席された方々は本当に高貴で、素晴らしい偉大なファミリーの様な感じが致しました。

当日私は訪問の夢が実現致しまして、大変感動致しましたが、強い感情の為に皆様に御迷惑を御掛けして大変申し訳ありませんでした。

本部の方々とも握手出来るなど、接する機会がありましたにもかかわらず、英語を話す事が出来ませんでしたので残念に思います。来年またビスタへ行かれます方々がより素晴らしいレッスンを積んで帰られます事を期待致しております。

デザートセンターは本当に素晴らしい所でした。皆様方と立っておりますと、いつまでもずっとこの場所に居たい様な気が致しました。以前に友人に頂きました絵の風景が、どことなくこの場所に似ていますねとか、三年くらいここでテント生活でも出来れば楽しいでしょうねなどと冗談を言い合ったりなど致しました。昔この場所にはインディアンが住んで居たとの説明を受けて、彼らが掘ったと言う井戸の跡や彼らのお茶の原料になった植物なども見学させて頂きました。

ア氏とオーソン氏のコンタクト記念碑を見て、今もなおア氏の哲学を非難する人や円盤すら信じられないと言う人々にさえ、スペースピープルが援助の手を差し伸べておられる事を思い起こしました。GAPの方々とは初めて御会いした方でもすぐに親しくなれますので、この素晴らしい人間関係が、より大きく広がり、いつか皆様方と共に宇宙へ飛び出せる日を願ってやみません。

ビスタへの訪問は大変短いものでしたので、もう一日ビスタに居られたらとの声もありましたし、私ももっと自身が謙虚でありましたならば、より学ぶ事が出来ましたのにと思いました。

本部の方々と皆様方に更めて御礼申し上げます。

本当に有がとうございました。

それからメキシコにて大変陽気な人々に触れ、マヤの遺跡や人類学博物館などを見学させて頂きましたし、グァテマラのティカールの遺跡に登りまして、大変有意義に過ごす事が出来ました。

私の場合は遺跡などについてもあまり予備知識がありませんでしたので、遺跡群についての知識を身につけて登りましたならば、より楽しみも増した事と思います。リキンで過ごした時も大変楽しく、アンティグアの町もまだ民族衣装が多く見られるなど大変有益でした。

旅行中は少しカゼをひかれた方もおられた様でしたが、すぐに元気になられましたし、訪問地へ向かう時の行動などからも、団結力や友情などを学ばせて頂く事が出来ました。

今回御一緒出来ませんでした方々を大変残念に思いました。

来年御旅行なさる方々が、本当に素晴らしく御成長なさって御帰りになられま

す事を楽しみに致しております。

また旅行前から御世話に成りました久保田先生と田中様、本当に有がとうございました。

そして旅行中に知り会いました方々や親しく接して御世話頂きました皆様方、どうも有がとうございました。

これからもよろしく御願い致します。

皆様の御健康を御祈り致します。

印象的だったデザートセンター

足立亘宏（新潟市）

「イングリッドさん、ホワイティングさん、あなた方が人の過去世を見ることが出来るというのは、私にとってとてもミステリアスに感じられるのですが……」

二人は微笑しながら視線を交わし、イングリッドさんが優しく私に目を向け、「その人を見るときに、目で見ないで、フィーリングで見るようにすればよいのですよ」と、さりげなくおっしゃった。

このアダムスキーの本に何度も出てくる言葉を、あの高貴な方が直接に話されると、何という深みをもって感じられたことでしょう。

私が今回の旅行に参加して、最も強烈に印象に残っているのはこのデザートセンターでの会話でした。私の英語は未熟でたどたどしく、うまく気持を伝えられなかったのですが、恥を忍んで話しかけてみました。私のような低次元の人間があの方々に近づくのは失礼な気もしたのですが、旅行参加を決めた当初からイングリッドさんに再会し、出来ればお話をしたいとずっと願っていたので、勇気をもってやってみた訳です。

一昨年の総会のときに初めて女史にお会いし、そのゆっくりとした口調から話される言葉に最初は当惑したのですが、時間がたつにつれて、それが意識から流れ出るメロディーのように感じられたときに、内部から爆発的な感動が湧き上がってきたことを今でもはっきり記憶しています。

私の眼前で広大な風景をバックに女史が話された内容は、その時はピンとこなかった点も多かったのですが帰国してから思い返すごとに深みを増して来ます。

また今回の旅行では、他の熱心な会員の方々とゆっくりお話する機会があったことも大きな収穫でした。その中で、自分はその方々と比べると、ア氏哲学に対する情熱・純粋さという点で随分欠けていたということを認めなければなりませんでした。

私自身、社会人として働くようになって既に四年が経過しました。そろそろ社会にも順応し、仕事もうまくこなせるようになってきました。しかしそれに反比例してア氏哲学の実践という面では真剣さに欠けていました。思い出した時にしか生命の科学を開かなかったり、支部の例会がある時にしかテレパシー練習をしなかったりの日々でした。時々仕事中にア氏問題の事が頭に浮かぶと、現実の自分との間に大きな距離を感じて、自分が部外者のような気がしたことさえありました。

デザートセンターでイングリッド女史らと話した時も、私は彼らの持つ雰囲気の中にすぐに溶け込める人間ではありませんでした。あまりに大きな差があったからです。

帰国してから私はまたゼロから出発しなくてはいけないと感じました。毎日、「生命の科学」を読み実践して、マインドに振り回されている現在の自分をコントロールしなくてはいけない。口で言うのは簡単だが、どれだけ真に実践しているか、常に自分自身に問いたい。生命の科学のほんの短い一節でも、それを真に実践したらどんなにか深い意味の言葉になるだろう。イングリッドさんのさりげない一言が私にそう感じさせました。

今回の旅行は外的には非常に楽しいことで一杯でしたが、私個人の内的な点では低迷している自分を直視する機会を与えてくれました。

いつか自分がもう少しましな人間になったら、またビスタを訪問したい。本部の素晴らしい方々の雰囲気に溶け込めるような人間になりたい。そう思いつつバスの窓越しにイングリッドさんと別れを告げました。

最後に今回の旅行参加を勧めて下さった友人の皆さん、企画して下さった久保田先生に深く感謝致します。

生涯忘れ得ぬ感動のビスタ

浜村建郎（千葉県）

海外旅行は初めて、空を飛ぶのも初めてというわけで、初めてづくめの今回の旅行は私にとって他のものでは置き換える事のできない貴重な体験となったと思います。

書きたい事は山ほどあるのですが、その中からいくつか旅の思い出を綴ってみたいと思います。

私の属しておりました第一グループは第二グループよりも一日早く出発し、そのおかげでロサンジェルスではダウンタウンのごく一部ではありましたが、徒歩で見物することができました。敷地が広いという事が日本とは対照的で、このような事が両国民の気質に反映しているのではないかと思えるほどです。

翌日は、パロマー・ガーデンズ、パロマー天文台の見学の後、ビスタの本部を訪問しましたが、生涯忘れえぬほど感動的な思い出となりました。

フリーウェイ（高速道路）をビスタに向かって走りながら8ミリ映画の中にビスタと書かれた標識を入れようとねらっていたのですが、その標識を見つけてから次第に何か興奮してきまして、ビスタの町中を走っている間、まわりの人も、いい感じの町だ、と興奮ぎみに話していました。本部訪問の前に一旦レストランで食事をしたのですが、どうも近くにスペースピープルが来ておられるのではないかと思われるほど、何か落着いた、高次な雰囲気を感じました。そしていよいよ本部を目指してバスに乗り込んだのですが、脇道に入ってそろそろ到着ではと思われるころ、車窓から青っぽく外壁を塗った本部の建物を見つけて、思わず「あった、あれだあれだ」と叫んでしまいました。

六十余名もの同行の人々が一度にこの小じんまりとした本部の建物の中に入ったものですから、身動きもできないほどの大混雑で、本部の方々もずいぶん驚かれた事と思います。ビスタには是非もう一度（いや何度でも）行ってみたいと思います。もちろん今度訪れる時は、もっと英語を勉強してからですが。

あくる日、昨日の感動も冷めやらぬうちに、今度はデザートセンターへ向かったのですが、これも実によい思い出となりました。途中西部劇に出てくるような不毛地帯（砂漠地帯）が延々と続き、このころからアメリカに来たのだという実感が湧いてきました。目的地のデザートセンターは、他の砂漠地帯とは少し趣が異なっていたように思います。赤味がかった濃い藤色をした剝離しやすい岩石が到る所にころがっていましたし、小高い丘の上に昔インディアンが井戸として使っていた三角形に組んだ木組が残っていたりして非常に印象的でした。

そしてそろそろロサンジェルスに引き返さねばならないという時になって、何かしんみりとした変な気分になったのを覚えています。立去りがたいという気持の現れだったのでしょうか。

別れというものはやはりどうしても寂しさを伴うもののようです。デザートセンターとも別れ、途中立ち寄ったレストランで本部の人々とも別れなければならない時が来て、ひどく寂しく思った人も少なからずいたと思います。日もそろそろ傾きかけて、「ああ、これで旅も終りなんだ」というような気分さえしたほどです。帰りのバスの中でも8ミリを撮影していましたが、その音が実に頼りなく聞こえたのを覚えております。

この二日間は、実に充実したものでした。もう何週間も過ぎたのではないかと思えるほどでした。同行のある人も同じように言っておられました。

この後、メキシコ、グァテマラと、異国情緒に満ちた国を訪れ、日本では到底考えられないような珍事もいくつかあって、非常に良い体験になりました。ただ実は太平洋岸の保養地リキンで、私は高熱を出して寝込んでしまったのです。間嶋さん、子安さん、同室の福田さん、野口さん、加藤さん、佐藤さん、望月さん、合田さんには大変お世話になり、誌上をお借りして深くお礼申し上げます。また、ゲルマニウムを熊倉さんから、マリンゴールドを合田さんから頂き、帰る頃までにはすっかり元気を取り戻す事ができました。GAPの旅行団でなかったらこうまで親切にはして頂けなかったと思います。そして終りに、今回の旅行中終始私たちをお世話下さり、また旅を快適なものとするために御尽力下さった久保田先生と田中さんに、心からお礼申し上げます。Viva, GAP!

スペース・ブラザーズとの遭遇？

柴田文子（山形県）

今回の海外旅行は私の生涯において最も貴重な体験でした。本当にどうも有難うございました。

アメリカ旅行から帰って二週間以上もたつのに、まだ心の半分はパロマー・ガーデンズ、ビスタのGAP本部、そしてデザートセンターにいるような、そんな気がして仕方がないのです。それほどにそれらの場所は感動的な所でした。どういうふうな表現であらわしたらよいか、わからないのですが、本当に素晴らしい所でした。今、想い出しても体中が震えて止まらなくなってしまうのです。

パロマー・ガーデンズへ行った時は、あの付近一帯にアダムスキーの高貴な波動が漂っている感じで、今にも木々の陰からアダムスキーが私達の前に現れて来そうな気がしました。そしてアダムスキーが愛したというカシの木が小枝を揺らしながら主人について語ってくれるような気がしたのです。あの辺を歩いていたら、望遠鏡で円盤を観測しているアダムスキーの姿がはっきりと心の中に浮かんできました。

ビスタのGAP本部を訪問した時、とても感激しました。アリス・ウェルズ夫人の顔を見た時、自分でもとても不思議なのですが、心の糸がプッツリと切れてしまった感じで、内部から抑えることのできない激情がこみあげてきて、体がガクガクとして涙が止まらなくなり、立っているのがやっとという状態になってしまったんです。あの時の熱い感情を言葉にあらわすことはできません。

オーソンの肖像画を見た時も、すがりつきたいような衝動に駆られました。イエスの姿とだぶって、今にも絵の中から抜け出てきて私達の前に現れて手を差しのべてくれそうな錯覚さえ覚えました。

本部の素晴らしい方々との夕食会を終えたあと、ホテルへ帰ってから自責の念やらいろんな想いが大洪水のように心の中に溢れ出て、抑制することも打ち消すこともできず、胸が張り裂けるように苦しくて苦しくて、どうしようもありませんでした。何度、久保田先生のお部屋に電話しようと思ったかもしれません。

次の日、デザートセンターへ行った時何となくなつかしいような気がしたのです。ステックリング氏やホワイティング氏の後について歩いて行った時、二千年前もこうして、ある偉大な指導者の後を多くの人達と一緒にこの場所を歩いたような気がしてきました。なぜか「主よ、私はあなたに従います」という言葉が心の中に飛び込んできました。

でも私自身、過去世においてその指導者に会ったことがあるのか、それとも間接的に知ったのか、また実際に私がデザートセンターに住んでいたことがあったのかはわからないのです。想い出すことができないんです。ただデザートセンターで二千年前、ある大指導者と弟子達、そして宇宙的なインディアン達が生活していたのではないか……と思うのです。

旅行中、先生や会員の方々からいろんな事を教えて頂きました。また出会ったすべての人が私にとって教師であったような気がします。人間は万人と万物を通して学んでいかなければならないのだということを痛感しました。

反省させられた点も沢山あります。私自身、心が今までに見たことのない珍しい物を見た時など、必要以上の好奇心を

起こしてしまって、自分を客観視することを忘れたことが幾度もありました。マインドの訓練の必要を強く感じます。また私の中に削り取らねばならないエゴの部分が多くあります。自分自身に対してしなければならない事がまだ沢山あるような気がします。

旅行中、スペース・ブラザーズは現れたんでしょうか。はっきりわからないんですが、そういうフィーリングを感じたことがあったんです。

初め、シアトルからロサンゼルスへ向かう飛行機の中で感じました。その時、私は座席を捜していました。ふと顔を上げると、男の人がにこやかに微笑んでいるんです。

私はびくっとして、ブラザーズ？と思って、すぐに「他の惑星からいらした方ですか？」というテレパシーを送ったんです。

するとその人はものすごく真剣な顔をするんです。自分の座席に着いてからも気になって、後を振り向くと、その人もじっと見つめてくれるんです。

「これからもGAPを見守って下さい」

とテレパシーを送ったら、何度も何度もうなずいてくれました。

その人から発せられる高貴な波動が私の胸を貫き、何度も胸をしめつけられるような気がしました。先生の三列目の後の席だったと思います。隣の席の女の人も仲間だったと思います。

でも飛行機から降りてロスの空港でその人から声をかけられた時、疑ってしまったんです。「本当のブラザーズだったら声をかけたりするだろうか？」と。一瞬そういう想念がわき起こったんですがあの深い愛情と理解力に満ち溢れた瞳を忘れることができないのです。

次にデザートセンターの見学を終えて本部の方々ともお別れし、ロサンゼルスのヒルトンホテルへ戻った時もブラザーズと感じさせる人達がいたんです。

ロビーで自分のキイをもらい、自分の部屋へ行こうとしてエレベーターをちょうど降りた時、反対側のエレベーターを待っている五、六人の黒人の団体がいたんです。そしてハローと声をかけるんです。私もハローと言ったんですが、何か雰囲気が普通の人達と違うような気がして、テレパシーを送ったんです。するとその中の一人の男の人がとても真剣な表情をしてから仲間の人達と何か話していました。その後、みんながこちらの方を見つめるんです。ニッコリ笑いながら――。

私は他の仲間の人々と一緒だったし、立ち止まるわけにもいかないので、心の中で「有難うございます」と言って廊下を曲がったんです。

その時、私は急にエレベーターの所へ戻りたいという強い衝動を感じて一人で戻って行ったんです。すると私がそこへ行くのを知っていたかのように、二、三人の人がエレベーターの中から上半身を乗り出し、手を振って微笑んでいるんです（編者注＝スペース・ブラザーズのなかには黒人タイプの人もいる）。

その次の日、ロスからメキシコへ向かう日、ホテルから空港へ向かうバスがちょうど空港に着いた時、ブラザーズがいるというフィーリングを感じて窓の外を見た時、それらしき人の姿があったんです。バスから降りてからも気になってテレパシーを送ったら、ニッコリと笑ってくれて、私と合田さんにウィンクしてくれたんです。

その時ふと気になって違う方向を見たら、ちょうど先生の近くにいたサングラスをかけた男の人が眼に入ったんです。またブラザーというフィーリングが起こってきました。その人は私達の回りを少し歩いて、すーっと人混みの中に消えてしまいました。

その次にメキシコのホテルでもブラザーズと感じられる人がいたんです。

メキシコへ着いた次の日の朝（市内見学とテオティワカン遺跡を視察した日）みんな食事を終えてロビーに集まった時なぜか高貴な波動を感じて回りを見てたら、近くの男の人と視線が合い、その人から話しかけられて私だけ一人とり残されてしまったんです。急いでみんなのあとを追いかけてバスへ向かった時、エレベーター乗場の所をちらっと見たら、ブラザー、シスターと思われる人がいたんです。

テレパシーを送ったら二人とも真剣な顔をして、男の人が私のそばへ近寄ってきて私の手を両手で握りしめてくれたんです。それをシスターらしき人が光り輝くような笑顔で見つめてくれたんです。

その時、全身がほとばしるような喜びでいっぱいになりました。

グァテマラ空港に着いた時、空港関係の仕事をしていた人達の中に少し不思議だなと思われる人が二人ほどいました。

その日の昼食時、中華料理店で打ち消すことのできない高貴な波動を感じました。もしかしたら先生のそばにいたのではありませんか。

グァテマラのホテルにもいたような気がします。**ホテルへ入ってすぐブラザーらしき人がいたのでテレパシーを送ったんです。するとうなずいてくれました。**

その人は上下茶色の服を着て、髪を短くしていました。そのそばにもう一人ブラザーズかな？と思える人がいました。

その人達たちはじっと私達を見ていました。そのあと自分の部屋へ入り、しばらくしてから急に下へ降りたい衝動を感じて、もしかしたらまだロビーにいるのかなと思って下へ降りたんです。でもロビーにはいませんでした。外に行ってもいないので、あきらめて部屋へ戻ろうとしてエレベーターに乗ろうとしたら、なぜか階段を上がって行った方がいいという印象がわき起こってきたので、階段を上がって行ったんです。

ちょうど三階の途中まで来た時、人が降りてきたので顔を上げて見たら上下紺色の仕事服を着た二人の男の人でした。その中の一人がさっきロビーでブラザーと思ったその人だったんです。

私は思わず心の中で「だから下へ降りたい衝動が起こったんですね」と、つぶやいた時、その人はじっと見つめて微笑んで通りすぎて行きました。

三階へ着いた時、もう一人のブラザーらしき人がニコニコと微笑んでいるんで

す。何度テレパシーを送っても微笑んでいるだけでした。その次の日もその人に会うことができました。私達のバスが出発するのを見送ってくれたんです。

その次の日の朝、また内部に強い衝動を感じてロビーに行ったんです。前日の男の人がフロント（ホテルへ入って右側のフロント）にいました。その人の服装は上が水色のシャツに下が紺色のズボンを身につけていました。

ホテルへ着いた日に階段ですれ違った人とはもう会えませんでした。リキンへ行って戻ってきた時、前の二人はもういませんでした。でも不思議だなと感じる人がフロントにいました。背の高い人です。テレパシーを送るか送らないかのうちに答がはね返ってきたような感じでした。

今まで述べてきた中に一人でも本物のブラザーズがいましたでしょうか。それとも全部違う人ですか。先生の御意見をお聞かせ下さい。

（編者注＝おそらくほとんどスペース・ブラザーズやシスターズだったと思います。柴田さんは非常に特殊なカルマを持つ、そういう人なのです。気付く力を持たない人は、すぐそばにブラザーズやシスターズが来て肩が触れ合っても気付きません。

初めての海外旅行ながら、外界の珍しい風物にマインドが浮かれることなく、常にスペース・ブラザーズにアラートネス（警戒）の心眼を向けていた柴田さんの態度自体が普通人の次元をはるかに超えています）

質疑応答

(1)

スティーブ・ホワイティング

1978年度日本ＧＡＰ総会における質疑応答の全訳

この質疑応答は昨年東京で開催された日本ＧＡＰ総会の席上、出席者から提出された質問に対してホワイティング氏がステージ上で回答したもので、当日通訳氏はかなり簡潔に大意のみを伝えたけれども、ここでは録音テープを追跡して完全な訳文とした。

問1　日常、宇宙的な考えを持ち、それを実践しようと求めています。ところがどういうわけか身近に同調できる人が現れず、孤独感を起こすことがよくあります。これはアダムスキー氏の「エゴを支配する道」（本誌第64号に掲載の重要な論文）に述べられた試練に関係するのではないかと考えていますが、それについてアドバイスをお願いします。

答　他の惑星から来た人々によって教えられているような原理を実践し始めるのに最良の方法は、簡単で日常的なものです。孤独であったり淋しい思いをしたりすることは不快であるかもしれませんがあなたの考え方が一般人とは異なるのだということをその孤独さが示しているのですから、それは良い事なのです。

他人が私たちのやっている事と（宇宙哲学の探求と）同じ線に沿っていないにしても他人と交際することは容易です。私たちが（宇宙問題について）知っている事柄のすべてを他人に伝えたり驚かせたりする必要は必ずしもありませんが、多くの場合、少しは伝えてもよいでしょう。

しかし他人に説教することよりもむしろ自分の生き方でそれを示すべきです。だれしも説教されたり言い負かされたりすることを好まないからです。命令に服従するよりも他人を見習うのが人間の本性です。つけ加えますと、どんな人でも長いあいだ親切な行為に接しますと、それに感応するものです。

問2　宇宙哲学を身につけて実践してゆく際、自分の選択した職業によってその効率が左右されるのではないかと思いますが、どうでしょうか。

答　私たちがやっている仕事や職業の種類は、もちろん道理上からみてさほど問題ではありません。人間がどんな仕事を選ぼうが行おうが、生活の原理を生かしたり保ったりできると申しましょう。

職業または生き方によっては、かなり難儀な場合もあります。そんなときは相当な時間や労力をとられますので、仕事を終えたときは疲れ果てて他の関心ある物事についやす時間は少なくなります。**要約しますと、可能な限り私たちは生活を簡素化するのが最もよいでしょう。**なぜなら私たちの生活は非常に複雑になっていますので、自分でつくり出した日常のさまざまの義務を果たすことがもはやできないからです。

多くの人は人生をまっしぐらに進んで何かを成就しようとし、自分の能力以上に多くの仕事をやりたがりますが、これは良い結果をあげようとして急ぎすぎているからです。たとえば自分の家を持とうとして一生懸命に働く人があるかもしれません。そしてこれも欲しい、あれも買おうと思い、時間外の勤務などをしてますます働き、支払いをし、よけいな仕事までして、その結果、心中に描いた目的を一応達成します。

しかし、ちょっと考えてみる必要があります。こうした家屋その他の所有物を持ったところで、健康をそこねて楽しむ時間を失ったら何の価値もありません。

問3　愛についてどのように理解すればよいのでしょうか。どうぞ詳しく説明して下さい。また宇宙哲学や宇宙問題に全く関心を持たない人に対して、私たちはどのように接してゆけばよいのでしょうか。

答　愛の原理には多くの解釈の仕方があります。愛は二人の人間のあいだの感情でもありますが、人間と自然、人間と美しい風景や美しい芸術作品のあいだの感情でもあります。私たちはあらゆる種類の生命表現体に対して同じような愛または感情や愛情を持つこともできます。

重要なのは、ほとんどいかなる原理にも二種類の形があるということで、愛は多くの原理の一つです。愛は強い感情（エモーション）または（エモーション）フィーリングでもあります。強い感情を完全に非難するものはありません。強い感情は極端になったフィーリングにほかなりません。私たちがフィーリングでバランスをとるならばフィーリングは強い感情になることは少ないでしょう。

第二の質問の件ですが、自分と同じ考え方をしない人々をどのように扱えばよいか、どんな態度をとればよいかについては次のとおりです。

こうした人々に対しては、あなたと全く同じように（宇宙哲学や宇宙問題について）考えている人に対するのと同じ態度で接するべきです。当然、あなたは宇宙問題の基礎知識を持つ人（GAPの同志）に対するのと同じような会話を交わすことはできないでしょうが、相手が敬愛の念を受け入れる限り、他の人に対するのと同じことになります。なぜなら万人は、あらゆる同胞から要求し受け取ることが可能な等しい生得権を持っているからで、これは親切さや尊重感でもあります。

問4　月の気圧は何気圧ありますか。人間が住めるようですから百分の一気圧よりもかなり高いと思いますが――。月の昼と夜の気温をお知らせ下さい。月の大気には酸素が何パーセントありますか。

答　よろしい、最初の質問、月の気圧はどれくらいかに対しては、地球の気圧の六分の一です。

月面の温度は全く極端に変化しますが赤道では特にそうです。しかし月の明るい部分と暗い部分とのあいだの影の線の個所では、中立地帯または快適な地帯というべき場所があって、そこの温度は地球のそれと大差ありません。非常に寒冷になりますが、地球以上に寒冷にはならないのです。また暑くもなりますが、極端に暑くはならず、そうですね、四十度か四十五度ぐらいです。

月の酸素は地球のそれよりもはるかに少ないようです。私は正確な数字を知りませんが、月のある地域では全然何の装置を用いなくても呼吸できるほどの酸素があると言えば充分でしょう。呼吸するのに充分な量を持つ酸素は、月の表側と裏側のより大きなクレーターの中にあります。月の気圧や回転などのため――これは地球や他の惑星のそれとは全く異なるのですが――月の酸素は標高の低い土地に停滞する傾向があります。これが月面の低い大きなクレーター地帯で多くの異常な活動が発見された理由です。

問5　アダムスキー著「宇宙船の内部」（編注＝「宇宙からの訪問者」の第二部の原題）の中に「世界中の有色人種が立ち上がって、平等の尊厳と自由人の権利を要求するだろう」と予言されている旨書かれていますが、だれの予言かわかりませんか。次に最近の中東情勢をどう思われますか。

答　抑圧に対して有色人種が立ち上がるという部分は、大体にスペース・ピープルによって述べられたものです。これは予言ではなく、むしろ地球の歴史で無数に起こった事の繰り返しです。というのは、白人だろうが黒人だろうが黄色人種だろうが、一人種が他の多くを支配すると、早晩、多数者はそれに対抗して反乱を起こすからです。つけ加えたいのは、今日、民族の如何にかかわらずあらゆる人々が不満を感じているのは、人種的な革命ではなくて、むしろ全体的な状況です。なぜなら我々はアンバランスな世界に住んでいるからです。

私たちは多くの物質的な物を与えられており、科学的な発展をなしとげていますが、社会的公正さはほとんどありません。この社会的公正さが人種の如何にかかわらず世界の人類に影響を与えるのです。

中東の問題に関する第二番目の質問ですが、中東の争いは過去の歴史における大抵の戦争がそうであったように、全く経済的宗教的なものです。それらの戦争は征服の原理にもとづいたものではなくむしろ経済を安定させようとしたものでした。現在、中東の情勢はベトナム戦争や朝鮮戦争その他で我々が経験した多くの戦争と異なりません。

アメリカやソ連のような世界の列強が中東に関心を持っているのは、個々の問題ではなく、いわばエネルギー産出世界の中心地であるからです。世界が消費する燃料のほとんどは中東から産出するのであり、それゆえに中東の支配は現在の世界情勢の経済の支配にとって根本的に重要です。

（以下次号）

英語を母国語同様にする！

ひとり言（ごと）で マスターできる英会話

久保田八郎／アン・デイカス

全国書店で絶賛発売中

■英語の語感を身につけて母国語同様にするには、英語で考える習慣を身につけねばならぬ。英語で考えるためには、自分自身の日常の行動に際して、英語でひとり言をつぶやくに限る。これこそ英語を自分のコトバにする魔術的な方法である――という著者久保田八郎は多年の研究と実験の結果、ついに秘法を公開した！　これこそ他に全く類のないユニークな学習書であり、これにより、読者はむぞうさに英語を口から出すようになって狂喜し、〈英語で考えることのできる世界〉を作り上げて、英語圏内に住む一人となるのだ！

■本書の主体をなす第１部では、丸の内の大貿易会社につとめる混血の青年ユキオ・ブラウン君の春の一日がストーリーとして展開し、その間たえずユキオが英語でひとり言をつぶやきながら行動する。読者も一人のユキオになって、日常生活で彼と同じ英語をつぶやけばよい。そのようにして〝慣れる〟のだ。第２部は英語のひとり言の重要なきまり文句集。第３部は外人にものを頼むときの模範的会話集。第４部は英語の文語体と口話体の相違を豊富な例文により解説。冒頭の「発音上の注意」や全巻にわたる脚注と共に、一般に知られていない意外な事実を多数洩らしている。

B6変型判・159頁・厚手上質紙使用
￥720 〒120（日本GAPでは取扱いません）

主婦の友社　〒101 東京都千代田区神田駿河台１－６
TEL.（03）294-1111（大代表）振替・東京2-180

日本GAP企画第２回

アメリカ南米宇宙考古学の旅

■ジョージ・アダムスキーがこよなく愛した南カリフォルニアのパロマー山とビスタを訪れて高貴な波動に触れよう！■1952年11月20日、アダムスキーと金星人がコンタクトしたデザートセンターで感動に身を震わせよう！■南米ペルーとボリビアに眠る謎のプレインカの遺跡群と、世界最大の謎の一つ、ナスカの地上絵は驚異の極致！■日本ＧＡＰが企画するこのすばらしいツアーに参加するあなたにとって、終生忘れがたい感動と歓喜の日々が展開するのだ！　笈を背負い、手をたずさえて出かけよう、アメリカと南米大陸へ！

GAP会員は大挙して行こう！

アダムスキーゆかりのカリフォルニアへ
謎のインカの遺跡の国へ！

大成功裡に帰国した日本ＧＡＰ企画第１回「アメリカ中米宇宙考古学の旅」に引き続き、1980年度の旅行はアメリカと南米を目標にしました。久保田と田中の名コンビが綿密に企画した手作りの旅は他社の追随を許さぬ高密度な見学日程でぎっしり。しかも費用は格安（他社ならばこの程度で大体70万円代ないし80万円代が普通）。めったにないこの絶好の機会をお見逃しなきよう、早目にお申込下さい。

●定　員　40名
●期　間　昭和55年８月13日→25日（13日間）
●費　用　￥598,000（航空運賃・朝食付ホテル代・団体バス運賃・その他の費用を含む　★24回払い可
●案内書申込先　〒133 東京都江戸川区本一色町365－818　日本GAP（140円切手同封のこと）
●主要見学地　米ロサンゼルス市、パロマーガーデンズ（アダムスキー旧居跡）、パロマー天文台、ビスタ町の米GAP本部（ビスタ１泊）、日米GAP合同夕食会開催、カリフォルニア砂漠の広大な大平原を走り、デザートセンター行き。ロサンゼルスへ帰り、飛行機でペルーのリマ市へ。黄金博物館、ラファエル・ラルコ・エレラ博物館　クスコ市、サクサワマン遺跡、幻の空中都市（マチュピチュ）、プノ市でインディオの原始的風俗を視察、チチカカ湖、ボリビアのラパス市、ムーンバレー、ティワナコの遺跡、ナスカの地上絵を小型機で上空から視察（これは希望者のみ）、リマ市の国立人類学博物館、ふたたびロサンゼルスへ　その他
●旅行団長　日本GAP主宰　久保田八郎
●添乗員　ワールドセブントラベル社　田中　正
●企　画　日本GAP
●主　催　トラベル日本
●協　力　アメリカGAP本部
●後　援　ペルー大使館、ボリビア大使館

※この旅行は日本GAP会員を主体に企画したものですが、会員でない方も参加できます。知人等にお誘い合わせの上、多数ご参加下さい。この企画は日本GAP独自のもので他の団体や企業体とは一切関係ありません。

日本ＧＡＰ

〒133 東京都江戸川区本一色町365-818（Tel. 03－651－0958）

各地支部総会行事報告と予告

（79年7月以降分）

▼大阪支部大会

●七月十五日　大阪府立労働センター
●午前十時半より午後五時
●出席者　約百名

大阪支部総会は梅雨未だ明け切らぬ七月十五日大阪地区の府立労働センター視聴覚室にて開催されました。梅雨中とはいえ比較的晴天に恵まれたこの日は、近畿地区の会員の方々を始め東京・静岡・福井更に鹿児島などからも熱心な会員の方が参加され、一〇八名収容の会場はほぼ満員となり、それこそ熱気に溢れんばかりでした。

午前十時半より私の挨拶と「宇宙哲学と聖書」の講演で午前の部を終了し、午後は一時より久保田日本GAP主宰者による「アダムスキー哲学の意義」と題する深遠な講演に一同多大の感銘を受けられたことでしょう。ついで「エジプト宇宙考古学遺跡の旅」のスライドが上映されましたが、すばらしいカラー画面に感歎の声が聞かれました。

そのあと質疑応答が行れました。普段直接久保田先生に質問するチャンスの少ない会員の方からの質問が多く出されましたが、時間の関係上途中で打切らざるを得なかったのは残念でした。総会最後を飾る講演は岐阜支部長松尾氏で時間に制約があったもののその内容はすばらしい哲学で、聞き入る会員の方々が「もう一度じっくり聞きたい内容だな」と思っているのが伺われました。

会場内にはアダムスキー氏の記事コピーや滋賀県のS氏らによるア氏関係のUFO写真類や資料が多数展示され、会員諸氏の賛辞を浴びておりました。

記念撮影と共に無事総会終了の幕は下されたのですが、大阪支部としては始めての多数の参加者が終始熱心に真剣な態度で立派な総会を無事終了することができましたことは久保田先生を始め参加会員の方々の絶大な応援の賜と深く感謝致しております。

（片　京記）

久方ぶりに大阪支部大会に出席した。雰囲気は良好で熱意に溢れていたが、私は前日が東京月例会であったために、午後から出席した。午前中は片氏、午後の部は私と松尾氏の講演にスライド映写が盛り込まれ、これに質疑応答が加えられたが、質疑は短時間で断念せざるを得なかった。実はこれに最も力を入れて皆さんの疑問に徹底的にお答えし、直接の対話の時間を充分に持ちたかったので、少々残念にも思った。

他に気になったことは講演者が三人もいて入り替わり立ち替わり一時間ずつ講演を行うのは自己主張が強すぎて、聞く皆さん方がくたびれるのではないかということだった。講演者は編者（久保田）一人で充分なので、今後はGAPの主体性を明確にされることを望みたい。お世話になった片大阪支部代表、巧みな司会をされた平塚氏、その他の方々に厚く御礼を申し上げる次第である。（編者）

▼アメリカ中米宇宙考古学の旅

●八月十日より二十二日まで。米西部、メキシコ、グァテマラを訪問。
●参加者六十名

日本GAP企画第一回の試みとして実施したこの旅行は、当初の予想をはるかに上回って計六十名という大部隊になり十二日間（一部は十三日間）の素晴らしい旅を終えて、全員無事に帰国した。大成功裡に終了したこの旅行の内容については本誌の関係記事を参照されたい。参加者と関係者、ご支援頂いた全国の会員各位に深甚の謝意を表したい。

▼おめでた二件

仙台市内にお住まいの熱心な会員赤間節子さんは八月に結婚されて姓が太田に変わった。詳細は不明なるも心から祝福したい。

九月二十二日には会員・高梨和明氏（静岡県）がめでたく華燭の典を挙げられて、この日伊豆長岡のホテル富士見ハイツで披露宴が行われ、編者、静岡支部代表野口氏、富士市の会員・筒井氏の三人が招待にあずかり出席した。

新郎はかねてからイメージを描く方法によって理想的な花嫁を得たということで、美男美女のカップルを中心に盛大な宴が挙行され、席上、編者と野口氏の二人が祝辞を述べさせて頂いた。ご多幸をお祈りする次第。

予告
先は長いが計画は周到

昭和54年度日本GAP総会

ベルギーGAP主宰者
キース&メイ・フリットクロフト夫妻による

大講演会開催

世界屈指のUFOと宇宙哲学研究大集団が放つ今年度の巨弾

本年度日本ＧＡＰ総会にはヨーロッパきってのＵＦＯ研究家、ベルギーＧＡＰリーダーで、アダムスキーに親しく師事したキース&メイ・フリットクロフト夫妻を招待して大講演会を開催いたします。会員の皆様のために来日してヨーロッパのＵＦＯ研究事情、アダムスキー問題や宇宙開発等に関する素晴らしい話題や秘話を公開する夫妻の高次なスピーチをぜひお聴き下さい。

★主　催　日本GAP
★日　時　昭和54年11月23日（金曜日・祭日）10時より。
★会　場　都内・皇居・北の丸公園内「科学技術館」地下大ホール
地下鉄東西線「竹橋」下車。毎日新聞社ビル前の竹橋を渡って徒歩３分。
★会　費　￥3,000（当日受付でご納入下さい）

プログラム

10：00→10：15　開会の挨拶……久保田八郎
10：15→12：00　講演「アダムスキー問題と宇宙開発」……キース・フリットクロフト
— 昼食休憩 —
1：00→3：00　講演「ヨーロッパのＵＦＯ事情、ベルギーGAPの活動とアダムスキーの思い出」……メイ・フリットクロフト
3：15→5：30　スライド映写「パロマー山、米ＧＡＰ本部訪問、デザートセンター見学その他 200 点以上」……久保田八郎
（今夏の「アメリカ・中米宇宙考古学の旅」より）

〈ご注意〉
●会場の受付は午前９時より開始します。　●ホール内での喫煙・飲酒・食事はご遠慮下さい。
●昼食は休憩時に会館内の地下食堂（セルフサービス・安価）か他の場所ですませて下さい。　●再入場する場合は必ず胸にリボンをつけること。
●テープレコーダー、カメラ持ち込み可。ストロボとフラッシュの使用も許可します。録音内容やスライドの複写を他の刊行物に掲載しないこと（版権は日本GAPが所有）。
●控室へ不意に侵入したり、ホール外の場所で夫妻をつかまえて質問をあびせることはご遠慮下さい。

歓迎大パーティーを開催！

当日総会終了後、フリットクロフト夫妻歓迎大パーティーを下記の要領で開催します。会員の参加自由につき、ふるってご出席下さい。
■当日はアトラクションとして会員・衣笠陽子嬢の日本舞踊の上演とフ夫妻の社交ダンスが行われます！■

とき　6：30→9：00（立食形式。料理・ビール・酒・ジュースをたっぷり準備。椅子も多数用意）
ところ　東京駅・丸の内側南口構内「精養軒」２階ホール（100名まで可。南口改札所に向かって右手奥）注意！　駅の外ではなく駅舎内ですから間違えないように。八重州側ではなく、東京駅の丸の内側（皇居側）です。
会費　￥4,000（パーティー会場でご納入下さい）
申込　会場準備の都合上、パーティー出席希望者は、「フ夫妻歓迎パーティー出席」と記して、ハガキで10月末までに日本ＧＡＰ宛ご予約下さい。満員（100名）になりしだいにメ切ります。予約申込者には整理券をお送りしますから、入場の際に提示して下さい。（５月末現在で出席申込者は約40名）
※ご注意　従来、総会直後のパーティーには地方支部代表の方を無料で招待していましたが、経済上の理由により、今回より会費を頂くことになりましたので、パーティー出席希望の支部代表の方も、一応ハガキで申し込んで下さい。　※パーティー会場でストロボとフラッシュの使用は可。大いに撮りまくって下さい。

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　時	会　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第2土曜日 午後2：00→6：00 **※11月のみは総会のため月例会を中止**	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。電話（828)2111。国電「上野駅」の「公園口」下車，改札口の真向かいスグ。会館正面に向かって左側の入口から入り，奥のエレベーターから4階へ行く。	¥ 300	テキストとして「生命の科学（文久書林刊)」を持参。2：00→3：00「生命の科学」講義，3：00→4：30主宰者挨拶・報告，テレパシー練習，休憩。4：30→6：00自己紹介，研究発表，質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00 **※10月のみは定時月例会を中止**	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」電話（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝片　京0720—31—5646	200	テキストとして「生命の科学」（たま出版刊)」「テレパシー」を持参。東京例会における久保田主宰者の講演テープを公開。
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	新潟駅前「青年の家」 電話 0252—44—6766	200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の「生命の科学」講義録音テープを公開。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	熊本市桜町「熊本市民会館」会議室。電話(55)5235。国鉄「熊本駅」前から市電「健軍」行き乗車，「お城前」下車，同交差点左折，徒歩2分。 連絡先＝津野田俊行 0963—52—3381	200	テキストとして「生命の科学」と「テレパシー」(文久書林刊)」を持参。久保田主宰の東京例会における「生命の科学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
福知山支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00 **※10月のみは定時月例会を中止**	福知山市「福知山市民会館」2階会議室。駅前から右方向の道路を直進し，2つ目の信号機の所。電話0773—22—9551 連絡先＝仲間秀樹　0773—22—4340(呼)301号，平日は18：00～22：00まで	100	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」，久保田主宰者の講演録音テープ公開，自己紹介，研究発表，座談会。
岐阜支部	毎月第3日曜日 午前9：00→12：00 **※10月のみは定時月例会を中止**	岐阜市神田町「商工会議所」電話（64）2131。国鉄または名鉄「岐阜駅」下車，徒歩10分，バスか市電で「柳ケ瀬」下車，近鉄百貨店を北へすぐ近く。 連絡先＝松尾和也 0582—51—8567	300	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」を持参。久保田主宰者の講演録音テープ公開。支部長松尾氏による「生命の科学」解説。質疑応答，座談。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1：10→4：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可 0222—95—0725	200	東京本部月例会における久保田主宰者の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午前10：30→3：30	上山市「労働福祉会館」2階会議室。電話02367(2)6082。月岡公園入口より左側へすぐ。 連絡先＝山口　緑 02367—9—2555	200	テキストとして「生命の科学（文久書林刊)」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第3日曜日 午前9：00→12：00	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。電話011—241—9171　連絡先＝伊藤重信 011—251—4331	100	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」と官製ハガキを持参。読書会，テレパシー練習，自己紹介。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1：00→4：30 **※11月のみは18日(日)に変更**	静岡市民文化会館 連絡先＝野口敏治　0542—86—7729	200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。
旭川支部	設立準備中	詳細は〒071—13旭川市末広6条4丁目，石川公一宛連絡のこと。自宅0166—51—5699　職場0166—23—3165		
松山支部	設立準備中	詳細は〒790愛媛県松山市中村3丁目6の6，藤原美由紀宛ご連絡を。		

★本誌バックナンバー(旧号)★

米GAP本部公認の唯一の日本支部たる日本GAPがアダムスキー問題に関して正確詳細なインフォメーションを伝える本誌は貴重な資料として後世に残るものです。

No.65 主要記事「UFO問題の真相(1)」G.アダムスキー／「バミューダ海域の謎」F.ステックリング／「超能力開発法(1)」亀田一弘／「幻影と巨石の国へ(1)」久保田八郎／その他。

No.66 主要記事「アダムスキー哲学の偉大さについて」スティーブ・ホワイティング／「ジョージ・アダムスキーの思い出」フリットクロフト夫妻／「幻影と巨石の国へ(2)」久保田八郎／その他。

No.67 主要記事「UFO問題の真相(2)」G.アダムスキー／「永遠の生命を得るには」松尾和也／「私はこうしてGAPにたどりついた」衣笠陽子／「円盤の推進力」清家新一／「動物たちは知っていた」ゴードン・ギャスキル／「科学と人間愛と信念」久保田八郎／その他。

No.65 ¥300 〒200／ No.66.67 ¥500 〒200

—日本GAP—
振 替・東京4—35912
(久保田八郎個人名義)

①「生命の科学」解説講義と(1時間半)
②「質疑応答」の録音テープ(1時間半)

今年度東京月例会における久保田先生の毎月の「生命の科学」各課の解説講義録音テープ。①は真意を理解し、思想の統一を図る上で貴重な資料となるものです。先生の雄大な弁舌は聴く人の心をふるい立たせます。**「近況報告」**(30分)付き。テープ②は月例会での質疑応答の録音で、先生の明快な回答や珍しい話を聞くことができます。

テープ① ¥1000 〒140
テープ② ¥1000 〒140

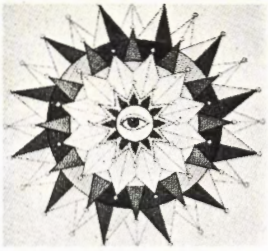
2本注文の場合、送料は200円です。

※ これらのテープに限り、第×課と記して必ず下記へご注文下さい。(本年1月より毎月1課ずつ録音)

〒274 千葉県船橋市前原西8—5—18
〈東京月例会司会者〉 **浜村建郎** Tel.0474-65-1844

①

②



①オーソン肖像写真
②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500 〒100 ②¥200 〒50 一括注文の場合 〒100

編集後記

★今夏のアメリカ中米旅行が大成功裡に終了し、感動いまださめぬこの頃ですが、本号はこれを記念して特集号とし、八頁ふやして総頁を四十八頁としました。但し頒価は従来どおりです。充実した内容となって読みごたえあると存じます。この旅行が会員諸氏にとってきわめて重要な意義を帯びていることが察知できるでしょう。

旅行中、宇宙船は出現しなかったと思われているようですが、実はUFOらしき物体を撮影した人が同行者のなかに数名いたことが後日判明しました。またスペース・ブラザーズらしき人達も時折出現していたのですが、本号の紀行文中では事情あって省略しました。スペース・ブラザーズは、エゴの少ない純粋な人、テレパシックな敏感な人、そして何よりも宇宙を愛する人に接近しやすいもののようです。日本にも相当数潜在しているはずですからご留意下さい。

★来年夏には日本GAP企画才二回として、「アメリカ南米宇宙考古学の旅」を実施します。今夏、無念の涙をのんだ方はぜひご参加下さい。ビスタを訪問して高貴な人々と接触することは非常に重要です。デザートセンターにも行きます。

南米のハイライトは何といっても小型のセスナ機で上空からナスカの地上絵を視察することにあります。地上最大の謎の一つ、神秘の大絵画と線型模様は私達を感動と驚嘆の極に達せしめるでしょう。

★十一月二十三日に挙行予定の本年度日本GAP総会も切迫してまいりました。役員一同万全を期して準備中です。当日は多数のご来場をお願いいたします。**総会当日の夕食パーティー出席申込はすでに定員に達して締め切りました。**予約申込者には十月末頃までに整理券をお送りいたしますので、パーティー会場受付で会費と共に提出して下さい。

★この総会のため十一月才二土曜日の東京月例会は中止しますからお間違いなきようお願いいたします。

★現在一般のUFOブームはさめてしまいましたが、読売新聞の調査によると、日本では五人に一人がUFOの存在を信じているそうですから、かなり定着してきたとは言えるでしょう。編者がアダムスキー研究を始めた昭和二十年代後半の頃からみれば隔世の感があります。しかし興味本位の時代はすぎて、今は真剣に宇宙と人間の問題を考える時機が来ています。真に宇宙に眼覚めた人はこれから残るのではないでしょうか。

★日本GAPを創立して以来、今秋で満十八年になります。その間実にめまぐるしい日々が続き、多数の人が去来し、悲喜こもごもの出来事を体験しましたが、すべては現象の世界における夢であったような気がします。その夢から覚めて現実に立ち返ったのは今夏デザートセンターを訪れた時です。あまりにも深遠重大な場所を目撃して薪で脳天を割られたようなショックを受けたのは編者だけだったのでしょうか。今後はGAP活動に渾身の力を発揮しようと決意を新たにした次才です。

★そのGAP活動なるものはあくまでもアダムスキーの宇宙的哲学と体験の研究啓蒙活動を主体にしたもので、聖書、仏典、その他の哲学、道学、他のコンタクトマンの説等は直接の関係はありません。地方支部の熱意と努力には衷心より感謝しますが、アダムスキーという正道から外れないようにし、スペース・ブラザーズとの連携感を深める方向に進展されることを望みます。支部に対してできる限りの応援をしますから何なりとご相談下さい。

★当方、日中留守をすることが多いので、ご送金の場合は書留にされないで、必ず振替をご利用下さるようお願いします。 (K)

GAPニューズレター 68号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365—818
電話(651)0958
振替東京4—35912(久保田八郎名義)
Oct. 15 1979
頒価500円・送料200円